
「闇から逃亡した少女とそれを追う漆黒の闇。」

Natu

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「闇から逃亡した少女とそれを追う漆黒の闇。」

【Zコード】

Z4900H

【作者名】

Natū

【あらすじ】

闇から逃亡してきた少女その名は龍崎ミレイ。彼女は元々黒の組織の人間では無いが彼女自身にも人には言えない理由があった。そしてある日何かしらの事情で黒の組織の幹部であるジンに拾われ、妹分として側に置かれるようになつたが、ある日たまたま出かけた後にジン達のある取引現場に遭遇し見てしまい闇に墮ちる前に心底敬愛していた「姉貴分」をジンに始末されてしまった。その後ミレイはその場をし闇からの逃亡を決意。だが・・それをジンは見逃すはずが無かつた。そして、ミレイとジンの追いかけっここの時が始

まつてしまつた。

作者からの「ご挨拶と注意書き」（前書き）

「ご挨拶にも書かせて頂いたと思いますが、
此れは黒の組織のジンの兄貴様方が中心として
作者のオリキャラも交えて書かせていただく予定と
なっております。従いまして、オリキャラ等が
嫌な方のご観覧は大変に申し訳ありませんが
お勧め致す事は出来ません。

また、苦情、そして中傷等は一切お受けできませんので
ご理解とご了承頂きますようお願い申し上げます。
また、もしかしたら残酷なシーンもあるかもしれません
のでその辺もご理解とご了承頂きます様重ねて
お願い申し上げます。

作者からの「」挨拶と注意書き。

作者「」挨拶と注意書き。

皆様、初めまして今日から登録させて頂きました。Natuto申します。

このタイトルは闇から逃亡した少女と言ひ事で黒の組織、ジンの兄貴様方がメインのお話とし

て書かせて頂きたいと思います。作者自身のオリキャラも出る可能性も否定出来なくはあります

せん。なのでオリキャラが出るのが許せない方、そして、オリリストが嫌いな方の「」観覧は

大変に申し訳ありませんが「」覧頂かない事をお勧め致します。

それ以外の方はどうぞ「」ゆっくりとお読み頂ければと思います。

尚、評価、感想等に関しましては当方文才がないゆえ。。。

お手柔らかにお願い致します。

中傷、また苦情等に關しましては此方も大変に申し訳ござりません
が一切お受け致しません

のでその辺もどうぞ理解・協力をお願い致します。

また、もしかしたら、違つジャンルのキャラ（全部ではないですが）
が出る事も

ある可能性もございます。その辺も理解して承願いたいと思いま
す。

それでは、長文と乱文ではありましたが最後までお読み頂き有難う
ございました。

2009年。7月23日（木）

訂正日 8月17日（月）

Natu。

作者からの「批評と注意書き」（後書き）

今日初めて登録いたしました。文才無いながらも
私、私なりに頑張つて書かせて頂きたいと思ひます
で応援の程宜しくお願い致します。

尚、「」感想をとして「」評価があつまましたらお手柔らかに
お願い致します。それでは、どうぞお手くつと
お楽しみください。

第1章プロローグ。（前書き）

此処では、まづマレイが通つている女子大からの
スタートとなります。

第1章プロローグ。

此処は、米花町にある米花女子大学。此処に1人の少女が居た。

彼女の名は龍崎ミレイ。年齢20歳だが・・・。学年的には2年生。

彼女は、訳ありで、留年して丁度復学見たいな形でこの大学に戻つてきた。

学科は一応国文科である。そして彼女は只・・・1限の授業が終わつた後ずっとずっと・・・。

浮かない顔をしてそして若干、怯えながら、毎日を過していた。

そして、1人の少女がミレイに声をかけた。

「ミレイさん。」

ミレイ、その自分の呼ぶ声がしてふつと我に返り、「ああ・・・。

沙江島さえじま

か。」

彼女の名は、ちょっと珍しい苗字だが沙江島真理恵さえじままりえ

彼女とは同期だが学年は3年。年齢20歳。

ミレーヌ「どうしたの？」

真理恵ため息をつき「もう、どうしたのじゃないわー今日貴女の様子変よ？」

貴女こうべどうしたの？」

その事を聞きフツと笑い「・・・いや。特に何も。」

真理恵「本当に？」

ミレイ鞄から麦茶を取り出し飲み始めて「ああ。大丈夫さ。」

と続け様に窓を見て居たもう一人の少女が「ねえねえ！窓見てみなよー。今日は珍しく

電柱に沢山カラスが留まっているよー。」

真理恵「え？本当に？」そう言ひ窓を見て「うあーー何なのよーー。このカラスの数・・。」

最初に窓を見て居た少女も「・・そうだね。多分、5羽位居ると思つよ。」

と続け様に「あんたも見てみなよー。ミレイー。」

ミレイ遠慮しながら「え・・わ・・私は良いよ。前川。」

そう少女に呼んだ。（彼女の名は前川カノン。真理恵の幼なじみ。）

がカノン「そんな遠慮しないでさ。滅多に見られないんだし！」

と言しながらミレイの片腕を掴み窓に連れて行つた。

ミレイ困惑した顔で「ちょ・・ちょっとーー前川！」

カノン「良いじゃん。ね？」と何食わぬ顔をして言った。

するとミレイハアーとため息を付きながら偶然にも窓を見た。

するとミレイその窓の外に居るカラス達を見て只、只・・黙つて居た。

そして・・。

カラスの群れの一匹と目が合ひ。

「やつと・・・見つけたぜ、？俺の可愛い妹よ。」

と続け様に「いつか、必ず、迎えに行く、それまで大人しく待つて
いろ。」

ミレイそのカラスを見て再び、恐怖心、が襲つた。

そして・・それが、黒の組織との追いかけっこ、の始まりの前兆
だとは知らずに・・。

第一章、 プロローグ 完。

第1章プロローグ。（後書き）

最初にミレイの事について書かせていただきました。

次回はですね。多分黒の組織が出て来る予定です。

（と云いましてもジンの兄貴様方ですが・・・。）

どうぞお楽しみに。

第2章 大学帰りと小学生組み（前書き）

此方は、ミレイが友人である真理恵と一緒に帰宅している最中に小学生組みと会います。が、ミレイはコナンの‘正体’を知っています。

ですが、哀の‘正体’は話しているうちに、知る、様になります。そして・・2人は、ミレイの様子を見てジンに未だに、追わている、事を悟ります。

第2章 大学帰りと小学生組み。

アレから、ミレイは今日は1限だけだったので、早めに帰ろうと教室を出た。

すると、真理恵が再び声をかけ「今日、私も上がりだから一緒に帰りましょ？」

しかし、ミレイ「別に構わないけどさ。。。あんた? 2限は?」

真理恵「今日は、先生が緊急会議の為遅休講！」

と楽しそうに笑った。

「ミレイ、なら・・・もたもたしないでやつやと帰れ!」

そう言いスタンダードと校門にスタンダードと歩き始めた。

真理恵「ああ。。。ちゅうひとーー待つてー!!」レイさんーー!!」

真理恵慌ててニレイを追つた。

そして、大学の校門を出て路上を歩いていたその時「あれ？ ミレイ
姉ちゃん？」

と1人の少年が声をかける。

ミレイヤの机の上に饭がせられ「お・・・一やの机はもしかして」口ナカン
か?」

コナン「うん。僕だよ。」其処にはメガネをかけた小学生が友達と共に居た。

その少年の名は江戸川コナン。帝丹小学校に通う小学一年。

しかし・・その正体はあの高校生探偵工藤新一。

黒の組織の取引現場を見た際にジンに毒薬を飲まされ小さくなってしまった。

そして、今は幼なじみの家に居候しながら黒の組織を追っている。

もちろん。ミレイ自身もコナンの正体は知っているが・・

此処ではあえて「コナン」と呼んでいる。

すると「ナンン、今、大学の帰り？」

ミレイは「ナンの畠たまでしゃがみ「ああ。そひで。今日は1限だけだつたからね。」

と続け様に「そりいや・・・」ナン今時間帯は学校じやなかつたか?今日は金曜だよ?」

すると、カチューシャをかけた女の子がやってきて「今日は、学校の先生が緊急出張でね

朝から居ないから学校お休みなんだ。」と続け様に「「めんなさい。お姉さんは?」

ミレイ「ああ。紹介遅れたね。お嬢ちゃん。初めまして。私は龍崎ミレイ。宜しく。」

と続け様に「んでもって・・私の隣に居るのが、沙江島真理恵。私

の大学の友達。」

真理恵「沙江島真理恵です。どうぞ宜しくね。」と微笑んだ。

そしてその女の子「ミレイお姉さんと真理恵お姉さんだね。私は吉田歩美。コナン君の

友達なの。」と続け様に「コナン君の他にも紹介するね。」そう言いい他のメンバーを

呼んで「このガタイが良い男の子は小島元太君。そして、その隣に居るのが円谷光彦君。

そして、その隣に居るのが灰原哀ちゃん。」

元太「俺、小島元太って言つんだ。宜しくな。」

光彦「僕、田谷光彦と言います。宜しくお願ひします。」

哀「灰原哀よ。宜しく。」

と其々自己紹介した。

ミレイ「歩美ちゃんに、元太君に、光彦君に、哀ちゃんね。宜しく。」

「

と言いつつ哀に向をやり・・。

・・似ているな。‘あの子’に・・。と心中で呟いた。

すると、哀が口パクで「ミレイさん。久しぶり。」と言つた。

ミレイ「・・え? -」

ま・・まさか。この子・・・、志保、？

と続け様にミレイも口パクで「あ・・あんた。もしかして・・。
志保、？」

哀頷き再び口パクで「そつよ。・高野志保、よ。だけど・・・此処
では」の子達が居るから

哀と呼んでね。」

ミレイ口パク換えして「OK。」

哀再び口パクで「悪いわね。ミレイさん。」

すると光彦が「灰原さん? 何してるんですか?」

哀「別に・・なんでもないわ。気にしないで頂戴。円谷君。」

それを聞いた光彦「分かりました。」と言い辺りを見渡し「それにしても今日は・・

やけにカラスが多いですね。」

元太「ああ。そうだな。」と続け様に「不気味だぜ。」

その事を聞いてミレイに再び、恐怖心、が襲い掛かる。

すると、コナンと哀はミレイの様子を見て何かを感じていた。

そして、「コナン小声で「灰原。」

哀も小声換えして「ええ。多分・・・彼女まだ、追われて、いるわね。」

「ナン」「ああ。 そうだな。」

と続け様にミレイに「ミレイ姉ちゃん。 颜色悪いよ? 大丈夫?」

ミレイハツと我に戻り「ああ。 大丈夫だよ。 ナン。 ジャ・・悪いけど、もつ

行かせて貰うね。」と続け様に「真理恵。」

真理恵頷き「じゃ、 賛さん。 また会いましょう。」

「ナン達は一斉に「はーい!バイバイ!」

と//レイ達を見送った。

その後コナン「じゃ・・オメーラ」これから博士ん家に行つてゲーム
でもしようぜ。」

元太「おひー。」

光彦「良いですね。」

歩美「行ひー・行ひー。」

そう言い博士の家に向かった。

そして・・空を飛んでいたカラス達が一斉にその場から消えて行つた。

第2章、大学帰りと小学生組み完了。

第2章 大学帰りと小学生組み（後書き）

まず、一つ謝らせて頂きたい事が・・・。

前回では黒の組織が出る予定でしたが・・・

ヒロインは大学の中だつたものですから・・・

急遽大学帰りに変更をせて頂きました。

次こそは・・黒の組織を出したいと思います。

本当に申し訳ありませんでした。

次回もどうぞよろしくお願い致します。

第3章。漆黒の闇の人間。（前書き）

此方では、黒の組織のジンの兄貴様方を中心として書かせていただきたいと思います。ヒロインはもう

‘見つかってしまいます’が。あえて・・

未だに‘泳がせておく事’に・・。

この章ではまた新たにオリキャラが2人でます。

この2人は・・果たして一体何者でしょうか？

第3章。漆黒の闇の人間。

此處は、米花港。辺りはすっかりアレから、夜、になっていた。

此處に一台の黒のポルシェが止つていてそのポルシェに1人の銀色の長髪の全身黒ずくめの

男が寄りかかりタバコを吸いながら1人の少女の写真を見ていた。

そうこの男が見てる写真はミレイの写真だった。

男はタバコの煙をフワーと出していた。

するとガタイの良い此方も全身黒ずくめの黒のサングラスをかけていた男がその男の所に

やつてきて「兄貴つ！」

その男は自分に近づいて来た男にミノイの写真を見せ「ここは、見つかった、のか？」

と続け様にその男を「ウォッカ。」と呼んだ。

その男にウォッカと呼ばれた男が「へい。見つけましたぜ。ジンの兄貴。^{ヒト}あの女

は間違いないこの米花町にいます。」

それを聞いてウォッカにジンと呼ばれた男がニヤリと笑い「そうか。此処にいるか。」

ウォッカ「兄貴。どうしやす?」

ジン「そうだな。もう少しだけ、この表の世界で、泳がせて、やる

か。」

と続け様にタバコを吸いながら「ヤツと笑い「直ぐに、捕まえても、良いんだが、

それじゃ、つまらねえ、からな。」

それを聞いてウォッカもニヤリと笑い「じゃ・・じわじわとあの女アラを、追い詰めて、

行くんですかい?」

ジン「ああ、追い詰めた所、でありますを再度、此方に連れ戻す。
、あいつには、表では

怯え続けなければ生きていけねえ、つて事を、教えてやらねえ、といけねえからな。」

と続け様に「ソロソロ行くぞ。ウォッカ。今日は、お前が運転しろ。

「

ウォッカ「了解しやした！」そつ言いジンとウォッカは黒のポルシェに乗り込み

米花港を後にした。

そして、その黒のポルシェを見て居た1人の少女が居た。

少女タバコに火をつけて「あれは・・。黒のポルシェ・・。
‘35
6A’か。間違いないね

あの男ヒトの車だ。」と続け様に「まさか・・。もう、‘あいつ’が見
つかって

しまったの？！」と驚きながら呟いた。

すると、1人の少女が彼女に声をかける「・・夏美。」

夏美と呼ばれた少女はその声の主の所に振り向き「・・ライカか。」

ライカタバコに火を灯し「ああ。私だ。」と続け様に「どうやら・・
。‘あの男等’

は此処に来ていた様だね。」

夏美頷き「ああ。そうだ。」

ライカ「じゃ・・‘標的’（ターゲット）は？」

夏美タバコを口に加えながら「恐ひく。ミレイだらうぞ。」

ライカ「・・そうか。」

と続け様に「じゃ・・ソロソロ私等も行きますか?「相棒。」

夏美フツと笑い「そうだな。‘相棒’。」

そう言い黒のベンツに2人共乗り込んでその場を後にした。

この2人は、橘夏美とライカ・ネアン。

2人共幼なじみで兼相棒同士。

年齢は2人共21歳で彼女等もコナン達の‘正体’を知る人物だ。

しかし、黒の組織との関係は今の所・・謎?のままだ。

だが、このジンとウォツカが米花町に現れた事はまだミレイは知らないでいたが、

此れでミレイの身に、漆黒の闇の人間、の魔の手が着実について言って良いほど伸びて来ていた。

た。

第3章。漆黒の闇の人間 完。

第3章。漆黒の闇の人間。（後書き）

今回は、前回お話した通り黒の組織を出させて頂きました。さて、次回はヒロインの見た夢を中心として書かせていただきたいと思います。

次回もお楽しみ頂ければ幸いです。

第4章。闇の夢。（前書き）

此方では、ヒロインの夢について書かせて頂きます。

と同時にヒロインを中心となります。

第4章。闇の夢。

此処は、米花町にあるある高層高級マンションの9階。このマンションの903号室が

ミレイの今の家だ。と言いつつもミレイの、姉貴分だった女性が前元夫を今でも

ミレイ自身が住み続いている。家賃等は一切姉貴分だった女性が前払いしていたおかげで

支払い等もせずに気楽に住む事が出来た。

只・・この家の番はミレイにとってはあって、酷、だった。

すると、ミレイ今までコレクションにあるソファーに座っていたのだがシャワーを浴びる為

一度ソファーから立ち、シャワー室に向かいシャワーを浴びて、そろじてから更衣室で

パジャマに着替えてもう一度ソファーに座りタバコに火を灯した。

そして・・。

時計を見て「もう・・夜の11時か。早いな。」と呟き「ソロソロ、寝よう。」

と皿ごはんに向かってベッドの中で寝始めた。

すると、リースは夢を見た。

‘見たくない夢を’。

とある日の夕方の雪の日。

ミレイは一人でアイポットを聞きながらいつも通りに大学を出て自宅へと向かっていた。

すると、米花町の国道に黒いポルシェが止っていた。

黒のポルシェの中からジンがミレイを見て

‘平和ボケも終りだ。’ もうじき、夢の偽りの世界が終わり、お前自身が再び

お前の本当の世界に戻る時が来た’。

ガチャリ

ジンニヤツと笑い「やあ・・・、迎えに来たぜ、~!!レイ。」

ミレイ何かの気配を感じ取り恐る恐る後ろを振り向き「~・~・~・~」

そして、ミレイ汗だくになりながら田が覚めた。

「何だ・・・、夢か。」と呟きそして苦笑いをして「一先ず、
‘夢で’、安心した。

だけど・・何て言つ、酷い夢、なんだ。」

とベットから出てタバコを吸いに行つた。

だが・・。

この夢は・・・。時間が立つに連れて、現実になつてしまつ、

しかし、ミレイはまだ・・・この、平和、が続くと信じていた。

第4章。闇の夢 完。

第4章。闇の夢。（後書き）

色々とネタ考案ながら書いていたり何時かの間にか

深夜になりました。（笑……）

さて、次回は「ナン」と「ヒロマーン達のやつ」取

りを中心として書かせて頂きたいと思します。

と詰つわけで一先ず・・・今回は此処までと詰つ事で

おやすみなさい。

第5章。ミレイと2人の少女。（前書き）

おはようございます。

今回のお話は、ミレイと夏美のやり取りが主になります。前回のお話よりか長くなっていますので
「ア」承ぐださー。

第5章。//レイと2人の少女。

あの、悪夢、から1夜開けた朝。

//レイは頭をかきながらフウとため息をつき、「結局、アレから寝付けなかつたわね。」

やつぱり、私と、闇は、離れられない物なのね。

すると、//レイ携帯をかけたすると、一人の少女が出た、「はい！橋

！」

//レイ「ああ。夏さん？ 私？ //レイだけ？」

夏美「おひつー//レイか？ おはよつわよ。」

//レイ「おはよ。あさね。朝早くから・・・もしかして、寝てい

た？」

夏美時計を見て笑いながら「良いやつにさつき私しゃあも起きた所さ。」

ミレイ「そつか。」

夏美「所で・・お前さんから連絡してくれるなんて珍しいね。何かあつた？」

ミレイ「うん。ちょっとね。」と続け様に「ねえ・・。夏さん。唐突で悪いんだけど

、今日この後会えないかな？」

夏美「今日かい？今の所は何も予定ないから大丈夫だと思つよ。」

ミレイ「有難う。じゃ・・・悪いんだけど、いつもの所、に来てくれる？ライカさんも

連れて。」

夏美「OK！相棒も今日何も無いみたいだから、そろそろ来ておくよ。」

ミレイ「じめんね。有難う。」

夏美「じゃ・・時間は？」

ミレイ「午後でどう? 午後の時間だったり適当に来てくれば良いから。」

夏美「了解。じゃ・・・1時位行くよ。」

ミレイ「1時位ね? 分かったわ。」と続け様に「じゃ・・・また後で。

「

夏美「ああ。じゃね。」

そう言い携帯を切った。

すると、ライカが何時もの様にタバコに火を灯し「おはよっさん。
相棒。」

夏美「おひーおはよっさん！相棒。」

ライカ「さつさんの電話//レイからか？」

夏美頷き「ああ。んで・・お前さんには悪いんだが、唐突に今日の
午後会う事になつた。」

ライカ「そつか。んで？場所はあるの子等が居る、あの場所、で良い
の？」

夏美再度頷きた。

ライカ「了解。んで? 時間は?」

夏美タバコに火を灯し「午後の1時位だ。」

ライカも再度頷き「んで? あの子には伝えたのか?」

夏美「いや。。。まだだ。多分、あいつがやつてると想うが。。。只、此処にあの男^{ヒト}」

達が潜伏している事は否定出来ない。下手すりやあ、あいつ等の事、自体ばれる可能性

もあるから。。。多分、やらないんじやないかな?」

ライカ「成る程ね。」と続け様に「じゃ・・・」から、伝えた方が、良いか?」

夏美頌き「ああ。その方が、「賢明」ちゃん・・・「賢明」かもしね。」

そつ言い携帯でメールを打ち始めた。

メール。

おはよ~つせご。

唐突で申し訳ないが、今さつき//レイから連絡があつて

今日午後1時位にそちらに相棒と向かわせてもうつ事にしたよ。

だから、お前さんにも、何時もの所、で待っていて欲しい。

宜しく頼むね。

夏美。

そして、送信ボタンを押す。

ライカ「あの子にかい?」

夏美頷き「電話なら兎も角、メールの方が何かと、便利、だしさ、
それに。」

ライカ「それに？」

夏美「足が付かない場合もある。」

ライカフツと笑い「成る程ね。」

そして、メールの着信音がなつた。

夏美「おっー！来た来たつー！」

と続け様にメールを見る。

メール返信。

おはよ。俺も今さつき起きた所だ。

了解した。んじゃ、午後1時位に、何時もの所、で灰原にも話した
から

待っているぜ。

夏美メール返えす。

有難う。助かるよ。

悪いけど・・・。

それで宜しく。

コナン。

再び送信ボタンを押す。

そして、再びメールが来た。

良いって事だ。

実は昨日//レイに会っているんだ。

その様子を見たらやけに、可笑しかった、から・・。

気になつてよ。

俺も灰原とアレから話して会つて話を聞いたほうが良かつたと思つたんだ。

と、言つ事でオマーからメール来て良かつたぜ。

じゃ・・また後でな。

夏美それを見て

ああ。また後で！

とメールを返した。

すると、ライカ窓を見て「なあ・・。相棒。」

夏美「ん？」

ライカ「外見てみなよ。今日は珍しく、雪、だよ。」

夏美窓を見て「本當だ。珍しいね。」と続け様に「何だ? 今日もカラスが、やけに飛んでる、

な。」

ライカ苦笑いをし「」つや・・色々な意味で、不吉、な感じがするよ。」

夏美「ああ。そうだな。」と続け様に「相棒。びひやり・・・早めに向かつた方が、

よさそうだ。」

ライカ領き「了解した。」

そう言い2人共灰皿にタバコを消しそして軽めに朝食を済ませ早いが出かける支度をしてい

た。すると、夏美達が潜伏しているビルに一台の黒のシボレーが止つてその中にニット帽を

被つてラフな格好をした男が夏美達の話を盗聴していた。

男フツと笑い「成る程な。ビーヴィー・此処に、潜伏、している事は確かなようだな。」

と続け様に「ビーヴィー、ナーフィー、会えそうだ。」愛しき宿敵（恋人）さんと共にね。

と楽しそうに呟いた。

一方、出かける準備をし終わって夏美リビングに戻り窓を再度見て黒のシボレーが止つて

居る事に気付く。

それを見て夏美苦笑いをし「黒のシボレーか。『彼、だね。』と続け様に

「多分・・あの様子だ、私等の会話、聞かれてしまったんだろ?」

。

と更に「まあ、‘あの男’^{ヒト}に聞かれなかつただけでも良かつたけど
ね。」

と咳き再びタバコに火を灯した。

第5章。ミレイと2人の少女。完。

第5章。//レイと2人の少女。（後書き）

此処まで「」ご覧頂きありがとうございます。

次回はこのお話の続編？みたいなものを書かせて頂き

たく思います。

のでお付き合い頂ければ幸いです。

此処から先はオマケみたいなものです。

もし良かつたらお読みください。

夏美「おや。。。作者さん。朝から『』が読める？」

「あ。。。どうも。夏美さん。ありがとうございます。」

「...」と続け様に「貴女は一体??」

夏美「ハハッ。まだ、此処では悪いけど明かせないね

まあ、しいて言えば・・私しやあは組織の人間

では無いよ。しかし、それを書くのが貴女だろ?」

「・・確かに。」

夏美「読者の皆さん。今後共相棒共々どうぞ宜しく。

く。」

第6章。再びの夢、そして田代覚めた何時もの場所。（前書き）

前章での続編みたいな物です。

最初にミレイの、夢、から始まり。

その後阿笠博士の家で田代が覚えます。

前章と同じく長くなつてあります。

ので此方も此方でじつは承ぐださ。

第6章。再びの夢、そして目覚めた何時もの場所。

一方、此処はミレイの自室。

ミレイは、夏美との携帯での会話を終え、何時もの場所、に向かう為の準備をして今さつき

終えた所だった。そして、タバコに何時もの様に火を灯し窓を見た。

ミレイ「・・・雪か。」

すると、前に見た、夢、を不覚にも思い出してしまった。

ジン

‘迎えに来たぜ?’ ミレイ。

ミレイ思い出す度に冷や汗をかいてしまった。

そして・・。

思わず、後ろを見てしまった。

しかし、誰も其処には居ない。

ミレイホシとしたよつて前を向きタバコを吸っていた。

その時、コトリシと音がした。

ミレイ「ん？？何だるひへ今の音。。。私の部屋？？？」

タバコを灰皿に押し付け自分の部屋に向かった。

そして、自分の部屋を見て辺りを見渡し誰も居ない事を確認すると
フツと笑い

「・・・・何だ。誰も居ないじゃない。私、疲れているのかな。
」
とやう咳き

自分の部屋を出ようとドアがある所に振り向いたその時！！

ジンが不敵な笑みを浮かべてミレイの前に立っていた。

「ミレイ「んなつ……！」

「……じうじて？！、兄さんか、？！」

ミレイ逃げようとしたが体が思うように動く事、が出来なかつた。

だが、ジンに捕まつてしまつ。

ジンニヤコと笑い「久々だな。ミレイ。会いたかつたぜ」。

ミレイ「…………な、何しに来たの？？」

ジン「愚問だな。お前を、迎えに来た、んだよ。」

やつはミレイに睡眠薬を飲ませた。

「レイ「な・・何を?」

と言いかけた次の瞬間眠気がレイを襲い、ジンの腕の中に倒れこむ。

ジンはレイを抱き寄せ、「もつ、逃がさねえ、よ。」

セツコはレイのマンションを出て黒のボルシHが止っている路地裏に向かった。

と同時にレイの中で、レイを呼ぶ声がした。

「レイの声と共に田代が覚める。

すると、「コナンと哀達が見て居た。」

コナン、「良かった！ 田が覚めた見てーだな。」

ミレイ「・・し、新一？」

コナン「ああ。俺だ。」

と続け様に「因みに此処は俺達がいつも屯るする場所だ。」

(「コナン達がいつも屯する場所、阿笠家）

ミレイ寝ていたソファーから起き出しだ、「私、一体どうしたの？」

哀悽腕組みながら「それは、いつのセリフ。ミレイさん。此処に
来た途端急に

倒れたのよ?」と続け様に「大丈夫?」

ミレイ「そつか。うん。大丈夫。」と続け様に「誰が私を運んでく
れたの?」

「俺やー。」

関西弁の男の声がした。

ミレイその男を見て「貴方だったんだ。ありがとう。」と続け様に
その男に

「失礼だけど・・・どちらなんですか?」

「コナン」「ああ。」
「は、服部平次。西の高校生探偵。で俺の仲間。

」

「服部平次や。よろしくう。」と続け様に「自分なんて叫ぶ
？」

ミレイ「服部平次君ね。私は、龍崎ミレイ。此方こそ宜しく。」

と続け様にコナンに「あれ？あの2人は？」

あの2人とは、夏美とライカの事。

哀「もう、来ているわよ。」

夏美とライカリビングに入ってきた。

夏美「よー!!レイ、お田覚めか?」

ライカタバコに火を灯し「あんた、急に倒れこんだから心配したよ?
?」

ミレイ申し訳なさそうに「めんなさい。夏さん。ライさん。」

夏美二「つと笑い「ま・・。お前さんが無事に起きたから良かつた
よ。」

とライカを見て「なあ。相棒。」

ライカ領き「ああ。そうだな。相棒。」

そして、コナン「んで?」ミレイ。起きた当初から悪いんだが。
「何かあったのか?」

ミレイコナンを見て「此處最近カラスがやけに多いだり?」

コナン「ああ。金曜日もそして・・今日もやけに多かつたな。」

ミレイ「先週の金曜の大学帰りで偶然にもあなたと志保に会つただ
る?・その時から、夢、を

見るよくなつたんだ。」

それを聞いて服部「夢なんか誰でも見るものやん。そんな気にする
事あらへんかと思うで?」

コナン「、良い夢、だつたらの話だがな。」

服部「え？ それどういう事なん？ 工藤。」

すると、夏美が「横入りですまんね。3人とも。此れは、あくまで
も私しゃあの考えに

過ぎんが、カラスが多く出没したとなると大体、不吉な事、が起
る事が多い。」

と続け様に「下らん事聞くが、カラスの色は？」

服部「そりや・・・橘の姉ちゃん。カラスは、黒、に決まってるやが
な。」

と続け様に「！？ まさか？！」

「ナン領セ」・・あ。その、おわか、や。服部。」

哀「彼等が・・」の町に来ると云つ事。「

ライカ「いや・・。むづ、 来てはいる」と云つた方が正しいよ。哀
ちゃん。」

その事を聞いて哀「え？ それ、どう云つ事、？ ライカさん。」

ライカタバコ口に加え直し「・・見てしまったのさ。先週の金曜、
相棒と偶々夜のドライブ

をしていた時に、米花港で、あの男達、をね。」

ライカからその事を聞きコナン達は驚いていた。

そして、ミレイは思わずその場で、固まってしまった。

第6章。再びの夢と目覚めた何時もの場所。元。

,

第6章 再びの夢、そして目覚めた何時もの場所。（後書き）

今回は、ミレイが見た夢をコナン達が聞いていたと言
う前提で書かせて頂きました。

次回は、多分、ジンの兄貴様の敵である、

赤井さんが出る予定です。

この先はまたオマケです。じ覽になりたい方はビツキ
お進み下さい。今回のお相手は？

オマケ2。

赤井「ほつ。次回は俺が出るのか。」

「あら・・聞いていましたか？」

赤井「勿論。」と続け様に「変更はないよな？」

N 「・・・今の所はです。」

赤井「そつか。そつ願つてゐるよ。」

N 「は・・・はい。」

第7章。リレイの夢の話と黒のシボレー。（前書き）

此れは、リレイが見た夢をロナン達に話しています。

そして、後半辺りから赤井わんと少しどすがジンの兄

貴様が出てきます。

この章もまたこので毎回同じ事を書かせて頂いて

おつまみがじゅく承トセ。

第7章。ミレイの夢の話と黒のシボレー。

そして、コナン達は我に戻るが、ミレイは只口固まり続けていた。

それを見たコナン「ミレイ。大丈夫か？」

ミレイ顔を「あ・・ああ。何とか。」

哀「ねえ、ミレイさん。話してくれない？貴女が見た夢の内容。」

ミレイ「実はね・・志保。先週の金曜とそして・・今日私が此処でぶつ倒れて氣を失つてい

る頃に一度も、悪夢、つて言つて良いのかな。見たんだよ。」

服部「どんな夢や？」

ミレイ多少うつむきながら「実はね・・先週の金曜と今日の悪夢はね両方とも、兄さん、

が出てきたんだよ。」

服部「、兄さん、？」

コナン「あいつが言つて、兄さん、は、ジンの奴の事だ。服部。」

服部それをコナンから聞いて「なつ・・何やど?ー」と驚きをして統
け様に

「それ・・ほんまか?ー!」工藤。」

コナン頷いた。

そしてミレイ話を続けた「まず、先週の金曜の見た、悪夢、はね。ある日の夕方の大学帰り

辺りは雪が降っていたの。私は、アイポットを聞きながら一人で自宅に向かい路地を歩いてた

んだ。そうしたら、国道に一台の黒のポルシェが止っていてね。黒のポルシェの中から

兄さんが私を見て居たんだよ。そして・・・」と言ったんだ。「平和ボケも終りだ。」

「もうじき夢の偽りの世界が終わり、お前自身が再びお前の本当の世界に戻る時が来た。」

そして、黒のポルシェから降りて私を見てニヤリと笑い「ああ・・・。迎えに来たぜ？」

ミレイ。「つてね。」

コナン達はミレイの話を聞いていた。

そして、夏美話を変えて「んで? その今日、見た、やつは?」

ミレイ「血中に居た時、窓を見てタバコ吸っていたの。そしてね私の部屋からゴトって

音がしたから見に行つたら誰も居なくて部屋を後にしたら、兄さんが田の前でまたニヤリと

笑つて立っていた訳。私はその場を後にしようとしたんだけじ・・
体が思つよつに動かず

そのまま兄さんに捕まつて睡眠薬で眠らされて、その後兄さんに抱かえられて私の自宅裏の

路地に止めてあつた黒のポルシェの中に連れて行かれた訳。」

その話を聞いて夏美、ライカを見て「あの男がミレイにに対する執着心、は

余にも凄過ぎるな。相棒。」

ライカも頷き「ああ。そつだな。相棒。」

すると哀「・・分かるわ。ミレイさん。貴女の気持ち。私もまだ・・・
・。‘組織’に

追われ続けているから。」

ミレイ、哀を見て「そつか。志保。あんた・・・。」

哀願いて「ええ。」

ミレイフジと苦笑いをし、「お互いある意味色々と苦労するね。」

哀「・・・ううね。」

でも・・・。

ミレイさん。貴女はまだマシな方よ。

私なんかがもし、見つかればもつ、この世には居ないんだもの、。

それだけ・・ジンが貴女に対する、執着心、が凄いって事ね。

何故、あのジンが其処まで貴女に、執着、するのかは貴女の、過去

、に纏わる

事なんじょうナビ。

服部「ま、この龍崎の姉ちゃんが折角話してくれたんやから俺等も力になつてやらへんとな。

なあ？工藤。

コナンフツと笑い「ああ。そうだな。」と続け様にミレイで「話してくれて有難うな。

ミレイ。1人で抱え込むなよ。俺達が何とかしてやつから。

ミレイコナンを見て「ありがと。新一。助かるよ。」と続け様に「

だけど、良いのか？

下手すリヤ・・あんの事も志保の事も、ばれる、可能性あるんだよ？

兄さん、こう言った所で結構勘が鋭いか。

コナン「ああ。分かってるわ。だが、ジンにまかねえと借りを返さねえと

いけねえからな。」

コナンは一切迷いもない顔をしていた。

「コナンが言っていたジンへの借り。それは、コナンの体を小さくしてしまった事だった。

それを聞いてミレイフツと笑い「・・・そつか。」

すると、夏美何かを、勘付いたのか。「ちょいと悪い。外出でくるな。」

と言い阿笠家を出た。

そして、その路地裏に行き止めてあつた黒のシボレーを発見しため息をつきながら

その黒のシボレーに向かつて運転席の窓をコノコノと軽く叩いた。

すると、窓が開き一ネット幅を被つた男が「よひ。良べ此処が分かつたな。」

と一ヤリと笑つて夏美を見て言つた。

夏美「何となくですよ。秀さん。」と続け様に「んで?此処で何を?」

この男は赤井秀一。

FBIの捜査官で夏美の知り合いの男。

それを聞いて赤井「いや・・何、仕事、や。」と続け様に「お前は、あの阿笠家で

龍崎ミレイの、悪夢、話を聞いていたんだろ?」

夏美それを聞いて再びため息をもらし赤井を見て

「、盗聴、ですか。相変わらず、趣味、悪いですよ。秀さん。」

赤井「仕方あるまい?、仕事、なんだからな。」

夏美「FBIは、仕事、で盗聴なんかするんですか。」

赤井「それは、アチラ、も同じだろ?、夏美。」

赤井が言ひ、アチラ、とは勿論黒の組織の事。

夏美それを聞いて只黙っていた。

と同時に赤井「どうやら…。お前も、‘奴’の所から逃げ出したみたいだな。」

夏美「別に…逃げた訳じゃないですよ?」

赤井それを聞いて顔を顰め「まさか…。」

夏美「違いますよ。勘違いしないで下さい??.別にミレイをあの男^{ヒト}の所に

連れて行くわけでは無いですから。只…私も一応仕事でね。‘ワカバ’の。」

赤井「成る程な。で?、奴、に言わなかつたは?」

夏美苦笑いをし「もしかしたら、‘反対’されるかも知れなかつた。
からですよ。秀さん。」

と続け様にまた何かを、勘付いた、のか「ソロソロ、退いた方が良
いですよ?

‘誰かが見ていますから’。

赤井フツと笑い「そつをせてもらおう。」と続け様にタバコに火を
灯し

「‘奴’、もお前を‘連れ戻そつと’、している十分気をつけろ。」

夏美「『』と笑い、「、」忠告せりゆつむ。」

そう言い赤井は夏美に軽く挨拶をしその場を後にした。

夏美頭をかき「やれやれ。ある意味、面でー（めんべくわざ）」事になつたわね。」

そう、赤井が言つていた、奴、とはジンの事。

実は、夏美自身、FBIとつるんでこるワカバと言つ組織の女リー
ダー兼幹部でもあり

何と、ジンの、恋人、もある。

それ故、ジンも夏美自身をミレイと同様に、追つて連れ戻そつと、
している。

夏美チラシと後ろを見て「・・・どうやら、近くに居るみたいね。
私もとっと

‘退いた方が、よそそつね。’ そつ抜きまた阿笠家に戻つて行つた。

それを見たジンタバコに火を灯しニヤリと笑い「まさかな。お前に
まで、此処で会えるとは

なあ。とても嬉しいぜ?’俺の夏美。’と続け様に’ミレイと同様
にお前も、俺の所に連れ戻

してやるよ。’と言つた。

一方、夏美自身もジンの声が自分自身に聞こえた様に思つて「・・
ジン。’と呟いた。

第7章ミレーヌの夢の話と黒のシボレー。
完。

第7章。ミレーヴの夢の話と黒のシボレー。（後書き）

此方もお付き合いでござつありがとうござります。

今日はですね、ミレーヴの夢の話を中心として

書かせて頂きました。

次回はですね。此れは予定ですが、多分ミレーヴの

過去話が、夏美達の事を書きたいと思います。

そちらもまたお付き合いで頂ければ幸いです。

下は毎回へのオマケです。

「見になりたい方はどうぞ。

夏美「どうやら、私しゃあの事少しほど何者か

「勘付いた、みたいだね。」

「赤井さんと知り合いで……んでもって、

ジンの兄貴様の恋人だといつ……。」

夏美「ハハハッ。ある意味？凄い事になりそうだ

よ。」

ジン「何だ？夏美。わたくし赤井秀一と一緒に

居た所を見たが？此れは一体どういつ事だ？」

そう言ひにベレッタを出す。

夏美「……ジン……ジン？！何時の間に？？」

ジンニヤツ「つこわつきだ。」

夏美「あ・・・そう。ってか、赤井さんとは単なる

‘知り合いよ’、し・り・あ・い！だから、別に

寝返つた訳じゃないのよ。」

ジン再びニヤリと笑い「ほう。そうか。」

夏美「だ・・だから。お願ひよ。そのベレッタ

しまつて頂戴。ね？？お願いよ。」

ジン「しょーがねえな。」

と続け様に「おい……作者……」

赤井「作者なら、自分の、身の危険を察知したらしく

て、何時の間にか逃げて行つたぞ？」とニヤリ。

ジン「赤井秀一。てめえ何時の間に・・。」

赤井「つい先程からいたぞ?ジン。」

ジン「フン。まあ良い。ウォツカ。」

ウォツカ「へイ。兄貴。」

ジン「作者を探して俺の所に連れ出せ。」

ウォツカ「了解。」

N

何かやばいことになってきたな(笑・)

第8章。//レイの過去（前書き）

此方には//レイの過去を書かせて頂きたいと思いま
す。度々書かせて頂きますが・・物語が進むにつれ
長くなる恐れがあります。やぢりもやぢりでござ理解
ごして頂きたいと思います。

第8章。ミレイの過去。

アレから、夏美は阿笠家に戻ってきた。

ライカ「お帰り。相棒。」と続け様に「どうした？急に外なんか行つて。」

夏美タバコに火を灯しフツと笑い「只今。相棒。何・・单なる、気分転換さ。」

ライカそれを聞いてニヤリと笑い「どうせ・・知り合いのあの男が居たから会つて來たんだろ

う？」と小声で言った。

夏美ギクリとなり「・・ハハツ。ばれたか。」と小声で換えした。

それを他所に服部はミレイに「なあ。龍崎の姉ちゃん。一つ聞いてもええか？」

「ハーベー、答えてくれる範囲、なに限こよ。」

服部「じゃ、質問するで。あの・・黒ずくめのジンカラの野と龍崎の姉ちやさんじて

知つあつたん?」と続け様に「まわか・・」の少ひじて姉ちやさんと同じ組織を脱走したん

「うわー。」

コナン「おこおこ。服部。」

服部「・・あ。」と焦る。
コナンが服部をなだめる。

ミレイフツと笑い「別に構わないよ。新一。」こんな質問が来るのは大体予想していたから。」

と続け様に「でも、良いのかい？ 答えても？」

服部「ああ。よろしくう頼むで。」

ミレイ一つため息をつき「まあ・・・多分長くなるだろうけど・・・。
」ヒリヒリ

左腕を服部達に見せた。

コナン「な・・・」の刺青はつ?-.-」

服部「紅の龍！…」と続け様に「も・・もしかして…！姉ちゃん！…あの・・・！」

ミレイフッシュ苦笑いをし「そ・・・。あの闇の始末人、赤龍。セキロン」

と続け様に「ジンの兄さんとは・・・。私がまだ・・10代の頃かな？」

会つたんだ。あの時、組織は香港に一時期拠点を置いていたみたいなの。

だけど、組織の方の命で撤退命令が出てね。その時に偶々私も
‘仕事’でね。香港に

居たのや。香港のとある組織の連中を始末してくれと言つ内容でね。

」

夏美タバコを吸いながら「それは、黒の組織からの依頼だったのか
？？」

ミレイ首を横に振り「いや・・・別の依頼人だよ。」

コナン「なあ・・・その依頼人って？」

ミレイ一時期考え込むように」確かに・・・メイラン、つて女だった
かな。」

コナン「え？メイランって・・・あのワカバと対立しているあの・・・
‘広州’の

女ボス？！」

ミレイ「お咎答ーー」

夏美、ミレイからその名を聞いて一瞬憎悪が見えた。

め・・メイランだと?!

あ・・あの女!…まだ!!

ライカ、夏美のその様子を見て「…まあいな。」と呟いた。

そう・・・。

夏美の前ではそのメイランの話は禁句だった。

夏美自身もメイランの事・・そして広州関連の事になると今は明かせないが

落ち着く事が出来なくなるのである。

哀「・・・夏美さん?」

と夏美の様子が可笑しい」とに付くが再び//レイの話を聞いていた。

服部「で？何で？そのメイランがうるさい女に香港のある組織の連中を潰す依頼を

自分にしたん？」

ミレイ「、広州、の香港支部の発展の為つて言つた方が良いのかしら？」

その為に邪魔な芽を紡ぎたかったのよ。メイランは・・。

「ナン」「成る程。んで？仕事は？」

ミレイ「案の定、ギリギリの所で何とか成し遂げた。だけど・・私も、
私でその代償に

体中怪我負つてしまつてね。それで、何を逃げられたその組織の残党に運悪く追つかれられて

それで奴等に見つからないよつて・・路地裏に逃げた訳。そうしたら・・・」

夏美「其処で・・ジンと出会つた。そつだろ?」

ミレイ頷き「(名答)夏さん。」と続け様に「最初はね。物凄い怖かつたんだ。

片手にベレッタを握つて銃口をこちらに向けている。別に、私は元々、闇に生きる人間、

別に、死、なんて、怖くなかった。寧ろ・・のまま朽ち果てても良かつたと言う

そんな感じだったの。そして、一歩ずつ、一歩ずつ、兄さんが此方歩いて来ただ。

その姿を見て私は、ああ。うう・・此処までか。と諦めたのだ。
けど・。・

「ナン」「だけビッ向だ?」

ミレイ「気が付いたら何時の間にか、兄さんがベレッタを懐こしま
つたていたのみ。」

それを聞いて哀驚いた顔で「え?あのジンが?」

ミレイ「そ・。んで。私がね、殺さないの、?と聞いたら、兄さ
ん一ヤリと笑い

私の左腕の紅の龍の刺青を見て、お前、赤龍だろ?。」と続け様に

「ええ。そ、う。よ。、でも・・今はこんなにボロボロだから使い物にならないわよ。」

と更に続け様に「そ、うした、ら、行き成り兄さんが私の腕を掴んで、それでも構わん。

着いて来い、お前は此処ではくたばるには惜しい奴だ。」と言つて私を連れ出したんだ。」

コナン「成る程な。」と続け様に「じゃ・・何でお前あの時、断らなかつたんだ、?」

ミレイ「出来るわけないわ。だつて・・・だつて・・・。そつく

り、なんだもの。

ジン兄さんと・・私の実の兄さん。雰囲気がね。」

哀「え?・ミレイさんってお兄さんいたっけ?」

ミレイ「ああ。でも・・・もう、死んでしまって居ないんだけどね。」

」

哀「え?・やうなの?」

ミレイ顔を「殺されたんだ。志保。あなたの姉さんと同じくね。」

哀「まさか？ジンに？」

ミレイ首を横に振り「いや・・・それは、私の、姉貴分、だつた女の
方。

私の実の兄さんを殺したのは・・玲愛蘭レイアーラン」

ライカ「な・・・！レ・・・玲愛蘭だと？！」

服部「なんや？ネアンの姉ちゃん知ってるん？」

ライカ「あ・・いや。」

言えねえよな・・うち等がワカバの人間だなんて。

FBIとつうるんと尙且つ広州の連中と対峙しているなんてな。

今は・・まだ。と焦りながら呟いた。

すると夏美「構わんぞ。相棒。」

ライカ「な・・夏美！」

夏美「仕方ないさ。だって・・・」の女の名が出た以上。私しゃあも話すしかないだろ？よ。」

ライカ両手を挙げ「わ～たよ。」と続け様に「その女は広州の女幹部の1人で

しかもエリート組つて奴だな。」

コナン「え？ 何故・・オメーらそれを？！」

夏美「新！ 悪いね。私たちの事は後だ。今はまだミレイの過去話が終わっちゃ居ない。」

コナン「・・あ。悪いい。」

ミレイ「続けるよ？それでね・・その女が兄を殺した事により私は、
‘表’でなく

‘闇で生きようと決めたんだ。’元々・・兄自身も私の何代目か分
からないけど・・

赤龍をやっていたから。」

「ナン」「そうか。じゃ・・お前は兄さんの意思をついだつて訳か。」

ミレイ頷いた。

と同時に「私は・・あの女を許せない。兄を・・そして・・知らぬ
間に私の・・・

両親を奪つたのだからーー。」

「喪」・・・//「喪」。

ミレイフシヒ笑ニタバコニ火を灯し「とまあ・・大体ここんな感じだ
ね。私の過去話。」

服部「自分・・色々と辛い思いしてたんやな・・。」

喪「じや・・・//「喪」。私からも一つ良いかしきへ.

「マニア」向?・志保?・

喪「//「喪」。貴女・・ひょつとして今でもジンの事を・・。?」

ミレイは再度フツと笑い外を見に窓に行つた。

その様子を影でジッヒジンが見つめているとも知らずに・・。

第8章。ミレイの過去。完。

第8章。//レイの過去。（後書き）

第8章もお付き合いくださり誠に有難いござります。

さて・・次回は夏美の過去について・・

そして、彼女達がワカバの人間だつて事を話す

と書ひ予定で書かせて頂きます。

今日は・・オマケは都合上・・

時間が出来次第書かせて頂きます。

それでは・・今回ほこの辺で失礼致します。

第9章 夏美達の正体。（前書き）

此処では、夏美とライカの正体が明らかになります。
ではまた長丁場となりますがどうぞじゅうくり。

第9章 夏美達の正体。

ミレイ窓側に立ちながら「さて・・私が此処まで、口を割つたんだ。
、夏さん達も、ソロソロ

あね、？」

と夏美達を見てニヤリ。

ライカハア～とため息をつき「・・相棒。話すか？」

夏美「ああ。だつて・・前に言つたんじやんーー」

ライカ頭をかきながら「参つた、よ。ミレイ、降参、だ。」

と続け様に「実は・・私等、その広州と対立しているワカバつて組
織の一員なのさ。」

コナン「え？ そつ・・そつなのかな？」

夏美苦笑いし「ああ。私しゃあは、リーダーとして相棒が副リーダー。

んでもつて・・序に幹部も勤めさせてもらつていてるんだ。」

哀「へえ～。貴女達が。」

コナン「・・あのワカバの？ つて・・何で、隠していた、？」

夏美再び苦笑いをし「悪いね。一応、極秘任務、つてやつでね。誰にも、言えなかつた

んだ、。

コナン「成る程な。」と続け様にコナン、夏美的首に掛けた黒の四角い十字架の

ネックレスを指差し「なあ・・・夏美。此れって、誰かの貰いもんか?」

といやり。

夏美「ふえ? ! なつ・・・何言つてるんだよ。コナン。」と苦笑い。

と続け様に・・・。

言える訳ないわ。

ジンからの貰い物だなんて・・・汗。

更に続けて服部「その・・・極秘任務」については、教えてくれへんのか？」

夏美「それ言いつと・・・極秘」では無くなっちゃいますよ。平さん。

「

夏美が服部に敬語を使う理由。

それは、昔、大阪に居た時何か知らないが事件に巻き込まれ大阪府警本部長である

服部の父と服部に助けられた事があったからだ。

それ以来夏美は何故か年下なのに敬語を使うようになった。

服部「ヤリと笑い「なあ・・俺と橘の姉ちゃんの仲やんけ。話してくれへん?」

夏美慌てて「い・・幾ら、平さんの頼みでも此れだけは、『勘弁を

』。

と苦笑いして言った。

服部「ほお~。わつか。なういちにも考えあるで~言わんかった
ひ・・。

大滝ハンに調べて探りを入れてもらひだけや。」

ライカ苦笑いし「・・夏美。この人を欺く事は出来んよ。」と続け
様に「こうなら

此れも、言つしかない、んじゃない?」

夏美「馬鹿野郎。そんな事したら後でアジト（本部）に戻つてもし
ばれて兄様に

どやされるのはうつち等なんだぞ?」

（夏美が言つ兄様とは、後に出てくるワカバの首領。
チエン
陳オウガ。の
事。

夏美達はオウガの妹分でもある。）

ライカ再度苦笑いをし「・・あ。そっか。」

服部「あ・・それよかは大丈夫。さつきワカバのアジト（本部）に連絡したら

偶然にもオウガハンが出てな。平次君には夏美を助けてもらつた借りがあるから

別に聞いてもええよ。つて許可もろひたから。」と再度ニヤリ。

それを聞いてライカ「え？マジ？」

夏美「ちょ・・ちょっとー！兄様ああああああ。」

もう、勘弁してくれよ。

コナン横田で「ハハハッ。」と苦笑い。

と続け様に服部コナンを見て「なあ・・・工藤。お前も聞きたいやろ？」

コナンニヤリ「ああ。」

哀も「同感ね。」と続け様に「此処まで話してくれたんだから・・・最後までねえ？」

「ワカバのお2人、さん？」と夏美達を見てニコリと微笑んだ。

夏美ため息を付き、「分かりましたよ。平さんお話すれば良いんです
ね？」

服部「最初からそう素直になれや。橘の姉ちゃん。」

夏美「・・しつ、仕方ないですよ。兄様の『許可』がなかつたらお話
する事なんて

出来なかつたんですから。」

コナン「それだけ、やばいのか、？」

ライカ「極秘・・・に関してはね。まあ・・・普段の、任務、内容だつたらうち等も簡単に

‘話す事’が出来るんだけどね。」

コナン「成る程。」と続け様に「なあ・・・ライカ。物は序だが、どうして夏美の奴

服部に敬語使ってるんだ?」

ライカ今まで吸っていたタバコを持つてきた携帯灰皿に押し付け消し真新しいタバコに火を

灯し「ああ。アレはね、新さん。夏美・・・昔、野暮用があつて大阪に行つていた時が

あつてね。其処で案の定事件に巻き込まれ怪我覆つたんだ。その時に服部さんのお父さん

と服部君に助けられたって訳。だから・・・まああいつことって彼は、命の恩人、なんだろ

う。それ以来、彼と会つたんびに敬語使つていろよ。」「

「ナン納得し再度」・・・成る程ね。」

一方、夏美は「今回の私等の、極秘任務、はハレイを広州の連中から守る事。」

服部「成る程な。でも何でそれが、極秘何や、?普通の任務でもえんぢやつ?」

夏美吸い終わったタバコを携帯灰皿に押し付け消しライカと同様に

また新しいタバコに

火を灯す「そう、普通は思うでしょ？平さん。それが・・・そうも行かないんですよ。」

服部「何でや？」

ライカ「下手に事を起せば、周りの一般市民も巻き込んでしまう恐怕もある、

しまいにはミレイはある日本でも世界でも有名な、闇の始末人、赤龍。そんな事が

表でもし・・知るようになり、一般市民が逃げ回ってしまい一般市民の事が広州の連中にも

知られた場合・・・」

夏美「多分、‘大惨事’になる可能性も否定出来なくはない。」

と続け様に「だからこそ・・今回の任務は、‘極秘’なのですよ。平さん。

我々、ワカバは一応、広州とは違い、表、ですから・・その事を表の世界の方に

悟られないようにするのが主な任務ですからね。」

(表は正義)

(裏は悪)

コナン「しかし・・・何故また？その広州つて連中が、ミレイの事を？」

ライカ「此れは、新さん。私の考えに過ぎんが多分・・ミレイのそ
の、闇の腕の力、

がメイランの奴が、欲しがつてゐる、からだと思つよ。それに私の
勘がもし正しければ・・

メイランはミレイに、誰か、を始末させる氣だ。」

服部「な・・何やと？！」と続け様に、「それほんまか？ネアンの姉
ちゃん？」と続け様に

「メイランちゅう女が始末しようとしている、標的、は誰や？」

ライカ領き「ええ。」と続け様に「申し訳ないね。服部さん。其処
まではまだ・・。」

服部「さよか。」

そして夏美「・・だからこそ！です！平ちゃん！－！

此れだけは！－！阻止せねばッ！－！ワカバの・・リーダーのそして幹
部の名に

かけて！－そして・・橘の、本家、の人間として！－！」

もう・・・。

‘あの時と、・・・。

同じ・・事は絶対に・・。

させないわ！――！

必ずや！――！

止めてみせぬ！――！

だから・・・。

父さん、母さん見ててね。

私、‘頑張るよ’。

と心にある決意を秘めて。

その様子を見て

ライカ「・・夏美。」

と呟いた。

と同時に、大樹さん、楓さん。

びつやう・・また貴方方の娘さんは、無茶を、しちつですよ。

と続け様に心の中で呟いた。

第9章。夏美達の正体 完

第9章 夏美達の正体。（後書き）

夏美「おこおこ・・・。うち等ばれてんじやんー。」

此方も此方で最後までお付き合いくださり有難ひ
いります。遂に、夏美とライカの正体がばれました
(笑;) 次回はですね。夏美の過去について書く予定
でございます。ですが・・あくまでも予定ですので
もしかしたら変更があるかもしだせんので
「」理解と「」承頂きたいと思います。

オマケ取りあえず。

前回オマケ出せませんでしたので

ライカ「だね～！」

夏美「アとため息を付き「だね～！じゃ無いよ～！」

相棒「これじゃ・・・任務が・・・。」

ライカ「所でお前さん。大丈夫なのか？」

夏美「何が？」

ライカ「何がじゃないよ。あの男^ミ_トレイの

序にお前さんも見つけてしまったようだよ。」

夏美「・・・そうみたいだね。」

ライカ「その様子だと……黙つて、」
戻ってきたんだね？」と一矢口。

夏美「だつて……しゃべらないやんけ！もし・・

あの男に反対されたかもしけないんだも

の。「泣き笑・・

ライカ「ははっ。」

つて・・話す所違つよな（笑・）

まあ・・良いか。

と続け様に服部「次回もどうぞ宜しうつー！」

夏美「つてー平さん！……何時の間に？ー！」

これ以上長くなるので以下省略（笑・）

第10章。夏美の過去。（前書き）

此方は、夏美の過去についてのお話です。
後半には若干ですが・・・ジンの兄貴様が
出でます。

第10章。夏美の過去。

哀その様子を見てライカに「夏美さん。やけにその広州つて組織に執着’しているよう

ね。
」

ライカタバコを吸いながら語き「ああ。無理もないさ。だつて・・。

」

哀「だつて？」

ライカフツと笑い「いや・・止めておひへ。この話はあいつ・・基本的に、1番嫌がる、話

だからや。」

それを聞いた哀只両腕を組み黙っていた。

コナンも黙つて夏美とライカそして哀を見て居た。

と続け様に「なあ。服部。」

服部「ん？」

コナン「あいつの過去、・・・お前知っているか？」

服部首を横に振り「いいや。それが・・俺も知らんねん。あいつ余
自分の事話したがらない

んや。」

コナン「…そつか。」

と続け様に服部「只な。上藤。あこつ！」両親おりさりしこんや。」

コナン「何？それ本当か？」

服部領も「ああ。確か……事故で、両方とも上へくなつたやうや。」

「

ミレイそれを聞いて「いいえ！事故なんかじゃないわー！あれは、やつ等、が

のせこよー。やひでしょー。一夏わざー。」

(やつ等は広州の事)

ライカ「おこー上めぐるー。」「ライカー。」と少々怒鳴りながら声を上げた。

ミレイハツと我に戻り「・・」めん。夏わん。私・・。

夏美フツと笑い「構わんよ。」「へ。お前さんが別に氣に入る」とも無い。」

と続け様にライカを見て「相棒。私は大丈夫だからさ。」

ライカ「・・・でも。」と夏美を心配そうな顔で見る。

と其処で服部「なあ・・・。橘の姉ちゃん。もし、良かつたらや。この龍崎の姉ちゃんと

同じ様に話してくれへん?何が・・・過去にあつたのか」を。」

夏美「・・・平さん。」

そして、ため息をフツとつき「分かりました。平さんが其処まで仰るのなら

お話ししましょう。」と続け様に「実は、私の両親もワカバの人間で

した。

父の名は橘大樹。母の名は橘楓。2人共、ワカバの幹部であり格闘隊の一員でも

ありました。」

服部「その時から自分、ワカバの団員だつたんか？」

夏美「・・・はい。と言いましてもまだ末端でしたけど・・。」

と「ナン」「橘大樹と橘楓は確か・・。あの伝説の拳法の使い手だったよな？」

夏美「ナンを見て「ああ。父はある伝説の拳法の4代風拳の一つである雷風拳。

で、母が火炎風拳の伝承者。」

哀「で？何で貴女のご両親亡くなってしまったの？」

夏美頭をかき「アレは・・私がまだ10代の頃。兄様のご命で父と母は私を連れて

広州のアジトに潜入捜査という形で入ったんだ。私達、ワカバの情報が入ったフロッピーが

何処にあるかをね。それで・・情報部にある事が分かりそれを奪還した。その時に・・

案の定、広州の侵入者警報が鳴り、父は先に私達を外に逃がそうとその場に残り私は

母と共に外に出た。出たのはよかつた物も。其処には広州の討伐隊つて部隊が待機していて

そのリーダーがチヨンランって言う女なんだけど・・そいつが厄介でね。」

コナン「何で、厄介なんだ?」

夏美「あの女は、‘標的’を滅ぼす為に常に‘死の槍’を持つているのよ。」

コナン「死の槍?」

夏美頷き「あいつの槍の内部には、猛毒、が仕込まれていて投げられて一歩でも刺さつたら

もう・・待ち受けているのは確実なる、死、それで・・その、死の槍、が私に襲い掛かったの

でも、私は刺さった感覺も、それに、痛みも、なかつた訳。

と更に続けて「私は、一応覚悟田を開けただけど・・だけど・・・。

私は、助かった。そして・・私が田を開けたら・・・。」

哀「開けたら?」

夏美悔しそうに「私の田の前に、私を庇つて、あの女の、死の槍を、食らってしまった

母の姿だったんだ。」

それを聞いたコナン達は驚き思わず固まってしまった。

ライカは、撥が悪そうに顔を顰めた。

と繽々に夏美「序に話しておると、私達ワカバの人間は、「仲間達」の気を感じる事が

出来る。だけど・・あの時、父の‘氣’も感じる事が出来なかつた。

其処で私は悟つたんだ。‘父さんは死んでしまつた’。とね。序に、アレから

私を庇つた母も私の中で息絶えた。そして、私は、両親の拳法を受継ぎ私自身も

‘ワカバ’にこれからもずっと仕えよう。そう決めたんだ。’

と続け様に「ナンよいつやへ口を開き「んで? そのメイランつて奴は・
・。

お前と何か、関係、があるのか?」

夏美「あの女は・・・。嘗ての私の、姉貴分、だつた女だよ。新。

」

「ナン」「な? -お・・・お前の、姉貴分、だつた奴だと? !」

夏美頷き「だが、広州設立に当たり・・私の左肩に銃弾を浴びせ、
捨てたよ。」

と続けて「ま・・・・こんな所かしら。これ以上は・・ちよいと勘
弁ね。」

服部夏美の側によつて「良く・・話してくれたな。お前も。俺とて
も嬉しいねん。

お前・・‘あの時も、余話してくれへんかったから。」

夏美フツと笑い「・・‘私の暗い過去なんか’、話しても何も得にならんと思いましてね。

それに、私の過去なんかよりも・・ミレイの方がずっと‘重い’で
すよ。」

と続け様にライカを見て「すまん。また・・外出てくるな。」

そう言い夏美外に出て行つた。

ライカ「・・・夏美。」

やっぱ・・・気まずくなつたのか？

相棒。

服部を始めコナン達も夏美が外に出たのを只見送つたが・・・次の瞬間ミレイが震え始めた。

コナン「おこー・!!レイー・どうした?..」

ミレイ「…し、新一…早く夏さん連れ戻した方が良い。このま
まだと…」

‘あの男^{ヒト}が夏さんに接近してくるつーー。’

哀「あの男^{ヒト}って？」

ミレイ「ジン兄さんよつーー。」

哀それを聞いて「ーーー。」

ジ・・ジンがこの近くに居るつ？！

と続け様に「ライカさん！…急いで夏美さんに連絡を…！」

ライカ領き「あ・・ああ。

夏美の携帯に連絡を入れる。

すると夏美「あいよ！私！」

ライカ「あ・・。相棒か？私だよ。」

夏美「ん？相棒どうした？」

ライカ「外に出た途端ですまんが、大至急こっちに戻つてくれ！」

夏美「良いけど・・どうかしたか？」

ライカ「ミレイが・・あの男^{ヒト}の気配を察知したらしいんだよ。」

夏美苦笑いをし「・・そつか。分かったよ。戻る絡まつてな。」

ライカ「ああ。待ってる。」

そう言い携帯の電源を切り阿笠家に戻ろうとした次の瞬間。

「よう。何処に行くつもりだ?『俺の夏美』。」

と低い男の声がした。

あ・・・・。

夏美

「う、この声は・・・。

まさか？

と心の中で呟いた。

第10章。夏美の過去 完。

第10章。夏美の過去。（後書き）

今章もお付き合いくださいありがとうございました。

今章は夏美の過去編についてお送りいたしました。

さて、次章はですね。

何と・・先に、ジンの兄貴様と夏美が会つてしまいま

さて、彼女はどうの場を、乗り切るのでしょうか、

?次章もお付き合い頂ければ幸いです。

す（笑・）

オマケ・・。

夏美「おいおい汗。どうなってるんだ？」

この小説の主役はミレイだるー（笑・）

何で、私しゃあが？

Ｚ「だつて・・ヒロインが早く窮地きゆうぢに

立たれるのもじつかと思こまして・・。」

夏美「でもなあ・・。」

ジンニヤリ「見つけたぜ？2人共。」

夏美「あ・・ジン。また見つかっちゃったわね。」

笑・」

Ｚ「あ・・後は、夏美さん宜しくです。」

逃亡とうぼう」を図りつとするがウォッカに捕まつた（笑・）

第1-1章。夏美と漆黒の闇との再会。（前書き）

今章では何と、ミレイより先に夏美がジンの兄貴様に再会してしまいます。

そして・・ジンの兄貴様は夏美に自分の下に戻るようになります。

やつ語られた夏美自身が出した答えとは・・?

第1-1章。夏美と漆黒の闇との再会。

アレから自分の過去話をした後、気まずくなつたのか夏美は再び外に出た。

そして、相棒であるライカから緊急に戻るよつに携帯で言われ、阿笠家に戻ろうとした

その時「よう。何処に行くんだ?『俺の夏美』。」と低い男の声で声を掛けられた。

夏美その声に見覚えがあつた。そして・・・その声の主の方に振り向いた。

其処にはジンが居た。

夏美「・・・ジン。」

そつまるで何事も無かつたのかのよつて呟いた。

ジンニヤリと笑い夏美に近づいてきて「久しぶりだな。会いたか
たぜ。」

そつ言い夏美の頬に触れる。

夏美フツと笑い「ええ。久しぶりね。私も・・・会いたかったわ
ジン。」

そつ言いジンの久しぶりの、ぬくもり、に触れた。

と続け様に「良く・・・此処が分かつたわね。」

ジン再度ニヤリと笑い「盗聴器を忍ばせたんだよ。お前の・・・そのコートにな。」

と続け様に「以前にミレイを此処で見つけた時に偶然にもチラつて
だが、お前が

相棒と共に居たのを見えたんだよ。」

夏美「流石ね。貴方は欺ける事は相変わらず出来ないみたいね。」

ジン「ミレイは何処だ?」

夏美「さあ・・・でも、貴方ならもう、分かっているんじゃなくて
'?'

ジンタバコに火を灯し「フ・・・そうだな。」

夏美「ねえ・・・ジンお願ひがあるの。」

ジン「何だ?」

夏美「もうじばらへ・・・ミノイをやつとじつおおこいやつて欲しい
の。彼女は

広州の連中に狙われているから。下手に事を起せば恐らく大惨事に
なりかねない。」

ジンフツと笑い「・・良いぜ~お前の頼みならな。」

夏美「・・有難う。」

すると、ジン「但し、条件がある。」

夏美「何?」

ジンニヤツと笑い「お前が、今直ぐに・・・俺の下、に戻つてくる事だ。

そりすれば、ミレイの奴の事当分ほつておいてやる。」

夏美首を横に振り「こめんなさい。その条件は飲めないわ。」

ジン「何故だ？」

夏美「ワカバの、極秘任務、があるからよ。今回の任務は、私と相棒に任せられたから。

今直ぐにと言ひ訳には行かないのよ。」

ジン「ほう。そうか。」

そういう長いロングコートのポケットに入っている愛用のベレッタの安全装置を外す。

夏美

や・・ヤバイ。

もしかして、怒りせめやつた、か？

夏美身の危険を感じ「まつ・・・待つて？！ジン！」

そう言ひジンに抱きつき「この・・ワカバの、極秘任務、が終わつてワカバの仕事が

ひと段落したら・・昔の様に、ちゃんと貴方の腕の中に戻るから」。

だから・・・今は・・ね？お願いよ……」

必死にジンに頼み込んだ。

その姿を見てジンクッと笑い愛用のベレッタの安全装置を元に戻し
夏美の顎を挙げ夏美に

キスをした。

ジン「良いぜ、？その代わり・・ちゃんと、約束、守れよ？」と
ニヤリ。

夏美頷き「・・ええ。分かってる。」と続け様に「」めんなさい。
もつ、「戻るわ」。

やつ言いジンから離れ阿笠家に再度戻りつとしたその時「夏美。」

夏美「何？」

ジン「お前に1つ聞きたい事がある。」

と続け様に「シェリーの奴の居場所何処か分かるか?」

夏美その事を聞いてハツとしたが冷静を装い

「さあ・・・ごめんなさいね。私は組織の人間では無いから分から
ないわ。」

と続け様に「組織には関係しないよつてしているの。私は、あくま
でも

「ワカバの一員、だから。また、会いましょう。ジン。」

そう言い今度こそ阿笠家に戻つて行つた。

ジン|夏美の姿が見えなくなるまで夏美を見続けていた。

と同時に「お前・・・まさか。広州の野郎を、一人、で潰す気なん
ぞ・・

ねえだろ?」と彼らしくなさそうに呟いた。

第11章。夏美と漆黒の闇との再会。完。

第1-1章。夏美と漆黒の闇との再会。（後書き）

今章もお付き合いくださりありがとうござります。

次章では、幾分コナン達が屯してくる家の主

阿笠博士が出てくる予定です。

それでは、次章も今章と同様にお楽しみ頂ければ
幸いです。

オマケ・・5番目？

阿「皆さん。こんばんわ。此処では初めまして

じゃな？ワシが天才発明家である阿笠博士じゃ。」

「ナン」「おこおこ・・。博士。自分で言ひなよな。」

と呆れ顔。

阿「仕方あるまい？他に言つてくれる人がおらん

のじやからな。」

哀「・・はいはー。」

此方も此方で呆れ顔。

と続け様に「次回は・・遂に博士の『登場のよつよ。

』」まで読んでくれて有難う。」

N

・・私の出番が（笑・・・）

・・たまには良いか（笑）

第1-2章。博士。(前書き)

今章では、遂に博士が出てきます。

とまあ・・出番が少ないとは思われますが・・・

お楽しみ頂ければと思います。

第1-2章。博士。

夏美は、アレカラジンと別れ再び阿笠家に戻った。

すると、1人の老人が出迎えた「お帰り。夏美君。久しぶりじゃの
お。」

夏美「あ、博士。お久しぶりです。」と一礼。

この老人の名は阿笠博士。ヒロシ通称阿笠博士はがせ

コナンと哀の正体を知る人物の1人でもある。

夏美「今までどうされていたんです？」

阿笠「すまんのお。ちよつと野暮用が余つて出かけておつたのじや。

」

と申し訳なさそうに話し続け様に「何か、ワシが居たら話せそいつな内容でもなかつたから

・。」

それを聞いてミレイ「悪かつたね。博士。氣を使わせてしまつて。」

と申し訳なさそうに言つた。

阿笠「何・・・構わんよ。ミレイ君。何せ、此処には「ナンハ瓶や袁君があるんじや。」

皆で話さないと出来ん話でもあるじゅうまい。」と微笑んで言った。

と続け様に服部、夏美を見て「んで?すぐこの床のひきりぬいて自分で遅くなつたん?」

夏美分が悪そつな顔をして「こやはや。。。うよこと、トライブルに、巻き込まれてしまつ

て。」

服部「トライブル?何の?」

夏美苦笑いをし「や・・・其処まで言わないと駄目ですか?平さん。」

服部「当たり前やんけ。どんだけ心配したと思つてゐる?」

と続け様に「それとも・・自分、言えないと?」ヒーヤリ。

夏美ギクっとし心の中で焦りながら苦笑いをし・・。

・・・言へるわけ無いじゃない。

ジンヒ会つたあつたなんて。

と続けて哀「ねえ。夏美さん。」

夏美「何? 哀ちゃん。」

哀「貴女・・ひょっとして、ジンと、会ったんじゃ、ないの?」

夏美それを聞いて「いや・・・、会っていないよ。」

コナンニヤリと笑い「夏美。嘘はいけねえよ。おめえ、ジンと会つて遅くなつたんだわ?」

すると、夏美のもつ片方のパートのポケットから盗聴器を取り出しつつ、夏美を見せた。

夏美それを見て驚き「何時の間に?」と続け様に「分かつた・・。
降参だ!」

と両手を上げた。

「ナン」「お前・・、ジンと、恋人同士、だつたんだな。」

夏美「ビンゴ。話しぐれていたんだ・・・。」

「ナン」「ああ。おめえが何時までたつても戻らないから心配になつてな。」

夏美「悪かったね。新。」

と続け様に「ナン」「奴は、灰原の事まで聞いてきたんだろ?」

夏美、哀を見て「ああ。だけど・・・言わなかつたよ。言つたら
大変だからな。」

哀それを聞いて安心した。

夏美「只ね、哀ちゃん。余安心しない方が良い。あの男はまた再び
君を

「探して来る」と思つよ。」と続け様に「博士。これからも哀ちゃんの事頼みます。」

阿笠「ああ。任せておけ。」

すると、夏美の携帯が鳴った。

夏美「ちょっと失礼。はい！橋！！」

すると男の声がした「あ・・・夏美の姉御？！俺！！雷外！-！」

その声の主は夏美とライカの弟分でありワカバの一員でもある李雷外^{ライガイ}

夏美「おーー雷外か?どうした?！」

雷外「姉御。大変だ！米花町に広州の搜索隊が来ている見たいなんだ！」

夏美「何？！それ本当か？！」

雷外「ああ。俺の兄さんからの情報だ。間違いないと思つよ。」

雷外の兄の名は、李ライフエイ。オウガの幼なじみでワカバの情報部の部長を務めている。

夏美「んで？今、場所分かるか？」

雷外「多分・・4丁目か5丁目辺りだと思つ。」

夏美「了解した。んで・・奴等の狙いは?」

雷外「多分・・・ミレイの姉御だと思つ。」

夏美「そうか。よし!今から私が探しに行く。また何か分かり次第。
連絡をしてくれ。」

雷外「了解!」

そう言い携帯を切り、「ライカ！！」

ライカ「あいよー相棒！！」

夏美「これからちょっと米花町の4丁目と此5丁目辺りを捜索していく。

奴等が居る可能性があるからな。お前さんは、此処でミレイ達を匿つておいてくれ。」

ライカ再びタバコに火を灯し「了解した。だが、お前さん一人で大丈夫か？」

夏美フツと笑い再びタバコを取り出し「大丈夫さ。相手は奴等の搜索隊、主に搜索するのが

任務。下手に物事をお越しはしないさ。」火を灯し言った。

ライカタバコ吸いながら「だと・・・良いんだかね。」と続け様に
「もし、何かあつたら

連絡してね。」

夏美ニヤリと笑い「了解した！」と続け様にミレイニ「良いかい?
ミレイニから出ひや駄目

だよ?皆と一緒に居るんだ!良いね?」

ミレイ領セ「夏さん。気をつけたね。」

夏美「ああ。」

そつ言い再び阿笠家を後にし黒ベンツに乗り込んだ。

阿笠「しかし・・・夏美君一人で大丈夫かのあ？」

コナン「大丈夫だつて！博士！」と続け様に「あいつには悪いが・・・
・実は、

あいつの愛車である黒ベンツに発信機と盗聴器を仕掛けたんだ。いざとなれば俺が

行つてやるからよ。」

服部「工藤。俺だけちやうやう、俺等やう？」ヒーヤリ。

「ナンそれを聞いて呆れ笑いをし「お前も来んのかよ。服部。」

服部「当たり前やんけ！－あいつは、俺に取つたりやあもつ、家族、みたいな存在やからな！」

あいつに何かあつたらまた助けに行く！」

コナン「・・服部。お前・・。」

と続け様に心の中で

お前にとつて・・夏美は其処までの、存在、なんだな。

と呟いた。

それを聞いてライカ「有難う。服部さん。其処まで相棒を思つてくれて。あいつ・・

大樹さんと楓さんが亡くなつてから余・・・自分の事、話さなくなつたからな。

それに・・本家に戻つても本家の皆が心配してくれて色々と接してくれているんだけど

中々ね。多分・・あいつの事だから心配掛けさせたくないと思つて自分の中に留めている

と思つんだ。だけど・・それが返つて周りから心配させられるていると言つね・・。

「

服部を始めコナン達はそれを黙つて聞いていた。

そして、服部一之と笑い「いやはや・・。俺は別に心配掛けているとは思つても

あらへんで?寧ろそいつは大歓迎やからな。」

ライカ「・・服部さん。」

なあ・・。

相棒。

お前さんは「んだけ、お前さんを思つてくれている仲間、が居るんだよ。

だから、余ミレイの様に一人で背負い込むな。

そんな姿を見るのが一番心配なんだからな。

そして、皆・・お前さんの帰りを待つてているからな。

ちやんと帰つて来いよー。

相棒！

と夏美に語りかけていた。

第12章。博士。完。

第1-2章。博士。（後書き）

今章もお付き合いくださり有難うござります。

さて・・次章では、登場人物についてちょっと

書きたいと思います。（此方も此方で遅くなりました

が・・汗）と言ひ事で特別章と言ひ形でお送り

したいと思います。此方も是非お読み頂ければ
と思います。

オマケ6・・?

夏美「次章は何かオマケみたいだね？相棒。」

ライカ「そつみたいだな。と書つことは・・

話はお休み？」

哀「まあ・・・そんな所になるかしら。」

と続け様に「此れからも色々な新キャラが出るヒ
思つけど楽しんで頂ければ嬉しいわ。」と続け様に

ミハヤ「今後ともどうぞ宜しく。」

特別章。登場人物。（前書き）

此れは、前半章に出てきた登場人物紹介です。

後にまた増える恐れがありますが、そちらは、

また別個で紹介したいと思います。

特別章。登場人物。

龍崎ミレイ。

米花女子大学に通う2年生で学科は一応国文科。

訳ありで留年をした。と同時にその正体は日本と海外で名を白めた

‘闇の始末人’赤龍（セキ

ロン）性格は穏和かで優しい性格だが、仕事になると仕事に対して
厳しい？性格になる。

黒の組織の幹部の一人であるジンの妹分である。が、ある日にジン
達の取引を目撃してしまい

その現場で闇に堕ちる前から心底敬愛していた姉貴分をジンに殺さ
れる所を目撃してしまいました。

その日からジンの所から逃走し、米花町に潜り込んでいる。ジンに
今でも追われている。

因みに、赤龍の名の由来は左腕に紅の龍の刺青が施されているから
だ。

と同時に、身内は一切不明、（今の所?）である。

沙江島真理恵

さえじままりえ

ミレイの大学の友達。であり幼なじみ。20歳。

学年はミレイより一ヶ月上の3年。学科は国文科である。

常に、ミレイの事を気に掛けている。優しい性格。

しかし、彼女は、ミレイがあの赤龍と言つ事は知らない。

沙江島財閥のご令嬢でもあり、後から出てくる予定の鈴木財閥のご令嬢である

鈴木園子とも友人同士である。

前川カノン。

真理恵の幼なじみでありながら・・ミレイの幼なじみでもある。

大学は真理恵達と同じ。で、年齢20歳。

性格は、若干天然が入つて明るい性格。

此方も信じた外が・・あの沙江島財閥と同じ有名財閥である前川財閥のご令嬢。

ジン。

黒の組織の実行部隊のリーダー格であり幹部の1人であり、ミレイの兄貴分。でもあり

ウォッカの兄貴分もあり、夏美の恋人。

性格は冷酷無慈悲と言われるが、ミレイと夏美の事になると彼は彼

なりに優しさを見せる。

が、裏切り者やミスする者にはかなり厳しい。

それ故、今でもシェリー・事宮野志保を追っている。と同時にレイ
や夏美を自分の下に

連れ戻そうとも企んでいる。因みに愛車は黒のポルシェ356A。

ウォッカ。

黒の組織の実行部隊の一人でありジンの弟分。

常にジンと行動する事が多い。

任務にも冷静沈着と同時に冷酷にこなすが・・心慮深さ?等に掛け

るのかたまに兄貴分で

あるジンに注意を受ける。

阿笠博士。

コナン（新一）の近所に住んでいる自称天才発明家。

と同時に「コナン」と哀の正体を知っている数少ない1人。

で「コナン達に取つてはとても頼りになる人。

江戸川コナン。

見た目は子供だが、その正体はあの有名な高校生探偵工藤新一。

幼なじみの毛利蘭とのトロピカルラングのバー中に黒の組織を追跡し取引現場を

目撃するが、ジンに頭を殴られ氣を失い。口封じの為に組織の毒薬を飲まれ

体が小学生の体になってしまった。それから、蘭の家である毛利探偵事務所に居候し

黒の組織を追っている。今は帝丹小学校の1年生。

灰原哀。

見た目は子供だが、その正体は組織の科学者で新一が飲まれた毒薬の研究者でもある

宮野志保。コードネームシーリー。

唯一の身内だった姉、宮野明美をジンに殺された後、毒薬を自ら飲

み小学生の体になり

組織から逃走。今は、阿笠博士の家で居候し其処で解毒剤を研究中。

今は、コナンと同じ小学校に通っている。

小島元太。

コナン達の同級生。

性格は明るい所もあるが、若干短気な所もある。

自称少年探偵団のリーダー。

歩美の事が好き。

円谷光彦。

彼もコナンと哀の同級生。

で、性格はしっかりとした性格？

両親が学校の先生の為言葉遣いが丁寧。

歩美の事が好き。

少年探偵団の物知り？

吉田歩美。

彼女も、コナンと哀の同級生。

性格は好奇心旺盛な性格。

でコナンの事が大好き。

少年探偵団のマドンナ的存在？なりしい。

橋夏美。

ワカバのリーダー兼幹部の一人。でジンの恋人。でもあり対立している広州の女ボスである

メイランの嘗ての妹分。

で、4代風拳の2つである火炎風拳と雷風拳の伝承者であり、

先代の伝承者である橋大樹と楓の娘である。

性格は仲間思いで心優しき性格。その為仲間を傷つける奴は許せない。

年齢21歳。タバコはピアニシモワンとペイテルワンを愛用している。

愛車は黒のベンツ。

ライカ・ネアン。

夏美の相棒でありワカバの副リーダー兼幹部の1人でもある。

と同時に「死業一家」と言われたネアン家の娘。

であり夏美の幼なじみでもある。年齢21歳。

性格は夏美と同じ様な性格。

タバコはマルボロのウルトラメンソール四パックを愛用している。

今は出ていないが車も持っている。愛車は赤のベンツ。

赤井秀一。

黒の組織と対立しているFBIの捜査官。であり、灰原の姉の宮野明美の恋人でも

あつた。夏美の知り合いの男。

性格は・・・読めない？性格。

愛車は黒のシボレー。

服部平次。

西の高校生探偵であり、大阪府警本部長の服部平蔵の息子。

新一のライバルであり、親友同士でもある。

彼も新一の正体を知る人の一人。

性格は熱血漢？

それ故に両親に心配される？

夏美が嘗て大阪で何故か知らないが事件に巻き込まれその時に傷だらけの夏美を助けた。

夏美からは「平さん。」と呼ばれている。

陳オウガ（チエン・オウガ）

ワカバの首領であり、夏美やライカの兄貴分。と同時に考えられないが・。

ジンの古くからの友人もある。

性格は心優しく真面目な性格で、後から出てくる予定のライカの実の姉でワカバの副首領

であるレイカの恋人でもある。

年齢24歳。

李雷外
リ・ライガイ

ワカバの幹部の1人でもあり、李ライフェイの実の弟であり夏美やライカの弟分である。

2人の事を「夏美の姉御。」「ライカの姉御。」と呼び本当の姉の様に慕つている。

年齢は18歳。

性格は夏美達と保々一緒の性格。

李ライフェイ(リ・ライフェイ)

ワカバの幹部の1人であり、情報部の情報部長も務めているオウガ

の幼なじみ兼相棒であり

雷外の実の兄。性格は雷外とほぼ同じ性格。年齢24歳。

(後から出演予定のキャラ)

マイラン。

ワカバと対立する広州の女首領であり、夏美の嘗ての姉貴分だった女。

性格は、昔は心優しい性格だったが・・広州設立後にその性格も曲がっていき

その当時の夏美が止めようとしたが夏美の左肩に銃弾を浴びせ夏美

を捨て、しまいには

夏美の両親を‘死に’追いやる命令をした張本人でもある。

それ故、夏美は彼女の事を憎んでいる。

しかし、捨てたにも拘らず夏美への執着が凄く、夏美自身をジンと同様に自分の下に

置きたいと思つている。年齢23歳。

玲愛燐
レイ・アイリン

愛蘭と龍湾の実の姉で広州の女スナイパー。

性格は愛蘭とほぼ似たような性格。

年齢23歳。

玲愛蘭レイ・アイラン

広州のエリート組女幹部の一人。であり、ミレイの実の兄を殺した女。それ故、ミレイはこの

女憎んでいて、今でもミレイは追っている。性格は、仲間以外だつたらどうなつても

構わないと云う冷酷な性格。それ故にメイランからの絶対的な信頼を得ている。

年齢21歳。

玲龍湾（レイ・ロンバン。）

愛燐と愛蘭の実の弟。

マイランを物凄く敬愛している。

性格は姉達と似たような性格。

年齢19歳。

レイカ・ネアン。

ライカの実の姉でありワカバの副首領でありオウガの恋人でもあり
夏美の姉貴分。

性格は物凄く優しい性格。

年齢23歳。

宇津川雪音
うづがわゆきね

ミレイが闇に墮ちる前から心底敬愛していたミレイの姉貴分。

だが、とある日のジン達の取引現場でジンの手によつ殺された。

と同時にミレイがジンの所から逃亡する理由も此れが原因だった。
だが、この女は後から分かつたが、広州の末端だった。

性格は、心優しく基本的に誰にでも面倒の見の良い性格。年齢20歳。（享年）

チョンラン。

広州の幹部の1人で討伐隊の隊長でもある。

と同時に過去に夏美と有理の両親を、死に追いやった、張本人でもある。

性格は広州の仲間以外には無慈悲冷酷な性格。

年齢22歳。

常に武器である、死の槍、を持っている。

橘大樹。

夏美と有理の父であり夏美の先代の雷風拳の伝承者。

ワカバの幹部の1人でもありオウガの友人でもあった。

性格は夏美と似たような性格である。

享年40歳。

橘楓。

夏美と有理の母であり夏美の先代の火炎風拳の伝承者。

性格はまじめで心優しい性格。

まだ、末端だった夏美を庇つてチエンランの死の槍を浴びて死んで

いつた。

それ故に夏美は両親が死んだのを‘自分のせいだ’と思い込んでいた。

享年37歳。

橘有理。

夏美の実の妹。

性格は心配性で心優しい性格。

常に今のたつた一人である身内の姉夏美を心配している。

年齡
19歲。

特別章。登場人物。（後書き）

今章は、特別章として登場人物をまとめてみました。

次章は、夏美が広州の搜索部隊を追う所を書きたいと

思います。

それでは此処までお付き合いくださり

ありがとうございました。

何時ものオマケは今回これがオマケみたいな物ですか

らなし」と言つ事で「了承ください」。

「ナン」と哀れやんの性格の事に関しては申し訳ありません・。

ちょっと作者の方では読めない部分もありまして・・・（笑・・・）

省かせて頂きました。

今後とも物語りが進むに連れてキャラが増える恐れもあります。

その時はまた・・追加する予定です。ご覧頂ければと思います。

第1-3章。広州の捜索隊追跡（前編）。（前書き）

今章では、夏美と弟分である雷外のやり取りが主になります。

雷外は香港出身なので広東語を少しだけですが、入れさせて頂きました。

しかし・・当方広東語分からないので

夏美のお礼の部分は日本語にさせて頂きました

（笑：：）

その辺は『ア承ぐだわい。

でも・・広東語個人的に好きなので・・

何となくどうしても入れたかったのです（汗）

第1-3章。広州の捜索隊追跡（前編）。

アレから夏美は、弟分である雷外からの連絡を受け1人で愛車である黒のベンツを走らせ

広州の捜索隊の追跡に向かつていた。

すると、米花町4丁目の交差点で赤信号で止まっていた所、青のクラウンを見かけた。

夏美タバコ吸いながら「あの青のクラウン。まさか…奴か？」

と其処に夏美の携帯が再び鳴った。

そして、ディスプレイを見た。

相手は雷外だった。

夏美「おうー私だつ！」

雷外「あ・・姉御？俺だけど。」

夏美、信号が青になつた事を確認し黒のベンツを走らせた。

「んで？何かアレから、分かつたのか、？」

雷外「ああ。って、姉御1つ聞くけど・・今米花町の何処走ってる
？」

夏美「今か？米花町4丁目の交差点を走っている。それがどうかしたか？」

雷外「実はわ…俺もボスの『』命でさ。奴等の搜索隊、を追っているんだ。」

夏美「そうか。で？お前さん今日は車？それとも電車？」

雷外「いや…タクシーだよ。」

夏美「で？お前さん今何処居る？」

雷外「姉御と同じ米花町の4丁目の交差点の左側。」

夏美「そうか。なら、私しゃあも今丁度其処通るから拾おうか?」

雷外笑顔で「え?良いの?」

夏美笑い「ああ。一人より・・2人の方が良いだろ?」

雷外「ああ。つて、所でライカの姉御は?」

夏美「あいつには、阿笠博士の家でミレイ達の保護を頼んでる。しかし、もし、緊急事態

になれば連絡入れる予定だ。」

雷外「了解した。あ・・・。姉御の車見えたよ。今行く！」

夏美「あーよー！」

そつ言い携帯を切り道路の脇にベンツを止めて雷外を拾つた。

雷外後部座席に座る。

と同時に「多謝ーー（ドーチュ）（有難う。）姉御。」

夏美「いやー構わないさー雷外。シートベルト締めた?」

雷外頷いた。

夏美「じゃ・・出すよ。」

そつ言い車を走らせた。

と続け様に「雷外。」

雷外「はいよ。」

夏美「携帯で話したんだが、青のクラウンを見かけてな。」

雷外「その青のクラウンの車体番号分かる?」

夏美「いや・・悪いが一瞬だつたから其処までは・・。」

雷外「そうか。でも、421だつたら。多分あの女。」

夏美「そつか。玲愛蘭。」

雷外頷いた。と続け様に「姉御。」

夏美「ん?」

雷外「わざわから……。後ろに一台の車が付いてきているよ。」

夏美「何? 何の車?」

雷外「一台は黒のポルシH。一台は……多分黒のシボレー。」

夏美「なあ……。その黒のシボレーの車体番号は分からんが、黒のポルシェは

356Aじゃないか?」

雷外「多分そり。」

夏美心中で苦笑いをし

ジンだ。

もしかして、尾行しているのかしら？

と呟いた。

第13章。広州の捜索隊追跡。（前編）完。

第1-3章。広州の捜索隊追跡（前編）。（後書き）

今章もお付き合いくださり有難いござります。

さて、次章はですね。今章の後編を書く予定で居ます。次章も今章と共に日々お付き合いくて頂ければ幸いです。

オマケ6?

夏美「よひやく・・お前さんの出番が来たな。

雷外。」

雷外「そつだね。姉御。」

と続け様に「次は奴等と会うのかな?」

夏美「さあな。作者次第だと思つよ。」

雷外「成る程ね。」と続け様に「では、次回もどうぞ

宜しく！」

雷外。

第1-4章。広州の搜索隊追跡（後編）。（前書き）

今章では、前章の続きをとして書かせて頂きました。

此方は、主にワカバの首領であるオウガと夏美と

やり取りが多いです。

第14章。広州の搜索隊追跡（後編）。

夏美は、弟分である雷外と合流し米花町の4丁目を走っていた。

すると、雷外から「一台の黒い車の尾行を受けていると報告を受けた。」

「一台は黒のポルシェ。」

「一台は黒のシボレー。」

夏美はその事を聞いて苦笑いをした。

多分・・。

黒のポルシェは356A

自分の恋人の愛車だからだ。

すると、夏美「ん？」

雷外「どうしたの？姉御？」

夏美「前見てみな！雷外！また、あの青のクラウンだ。」

夏美の黒のベンツの前にその青のクラウンが止っていた。

と同時に車体番号を確認する。すると、421Bだった。

雷外「あ・・本当だ。姉御。」

夏美領き「ああ。今わつ毛車体番号確認したよ。そしたら、421Bだった。」

雷外「じゃ・・・。」

夏美タバコを灰皿に押し付けそして新たなタバコを取り出し火を灯しながら「ヤリと笑い

「ああ。多分・・奴の愛車だろつた。玲愛蘭のね・・。」

すると、携帯を取り出しアジトに連絡を入れた。

すると1人の男が出た「はい！此方！ワカバ！」

夏美「あ・・ライフェイ？私だ！」

その声を聞いてライフェイと言う男が「おうー夏美か？お疲れさん
！どうした？」

夏美「お疲れさん！唐突で申し訳ないけど・・今、兄様お時間大丈
夫かな？」

ライフェイ「ん？ オウガ？」 そつ言いオウガをちらと見る。

オウガOKサインを出す。

ライフェイ頷き「ああ。 大丈夫だそうだ。」 と続け様に笑いながら。
。

「しかし、 良く俺がオウガの部屋に居るつて分かつたな。」

夏美笑い換えしながら「お前さんが居る場所ならたいてい見当付いてるよ。」

ライフェイもそれを聞いて笑い返し「そうか。」 と続け様に「じゃ。
・ オウガに代わるな。」

そう言い電話をオウガに渡した。

オウガ「代わった！俺だ。」

夏美「兄様。夏美です。お忙しい中申し訳ありません。」

オウガ「何、構わんさ。それより、アレから、何か奴等動きあつたか？」

夏美「ええ。多少は・・。」と続け様に「現在、雷外と共に米花町4丁目を走っているのです

が、偶然にも奴の愛車を見つけました。」

オウガ「玲愛蘭のか？」

夏美「はい。」と続け様に「情報によると・・奴は今回来る予定は
なかつたはずなんですが

・・。

オウガそれを聞いて「大方、メイランの命令で奴も此処に来たのだ
ろう。多分・・

目的場所は米花港だ。其処で、奴等は・・仲間と遭遇し、ミレイを
奪う、為の作戦を

練るのだろう。」と続け様に「お前・・阿笠さんの家に最近出入りしていただろ?」

夏美「はい。」

オウガ「実は・・あそこ元、うちの他の連中を何名か張り込ませたんだ。

そうしたら、広州の連中共も偶然見つけて阿笠さんの家を張り込ませてあつたらしい。」

夏美それを聞いて驚き「え? それって、本当ですか?! 兄様?！」

オウガ頷き「ああ。後・・・赤井の奴どジンの奴も密かに張り込んでいたらしいから

多分・・・奴等も馬鹿ではそんなに馬鹿ではない。もし・・・それが、
マイランの耳に

入っているとしたら・・・。」

夏美「もつ、ばれてくる可能性がある・・・と何事でしょつか?」

オウガ領き「その可能性は否定出来ない。もしかしたら、奴も現れるかもしれません。

夏美・・出来るだけ慎重に頼む。」

夏美「了解致しました。兄様。」

オウガ「じゃ・・・また何かあつたら連絡頼む。」

夏美「はい。それでは。」

そう言い携帯を切った。

と同時にタバコを吸いながら「・・・ある意味、一面でー（面倒）
事になった。」

それを聞いて雷外領き「ああ。そうだね。姉御。」

そして、青のクラウンは米花港方面に向かい始めた。

夏美それを見て「・・・逃がさないよ、ー」と続け様に「雷外。悪いね。ちょっと

スピード上げるよー。」

雷外頷いた。

そして、スピード上げ青のクラウンの追跡を再度始めた。

一方、夏美達を追跡している黒のポルシェの中では・・。

ウォッカが運転していた。

ウォッカ「兄貴。」

ジン領き「スピード上げる。ウォッカ。巻かれるな。」

ウォッカ「了解！」

そう言いスピードを上げて夏美達を追つ。

それを見た黒のシボレーもスピードを上げて夏美達を追つた。

第14章。広州の搜索隊追跡。（後編）完。

第14章。広州の搜索隊追跡（後編）。（後書き）

今章もお付き合いくださり有難うござります。

次章はですね、米花港に夏美達が潜入する場面を

書かせて頂く予定です。

それでは、次章も今章と共にお楽しみ頂ければ

幸いです。

オマケ・・?

ミレイ「夏さん。大丈夫かな?」

ライカ「大丈夫だろ? あいつを信じじよつ。

私等があいつを信じじてやれなくて・・・一体誰が

「あいつを信じてやるんだ？」

「ミレイ」・・・そうだね。」と続け様に

「玲さん。次章もお楽しみに。」

第15章。夏美達、米花港に潜入（前編。）（前書き）

今章では、夏美達が対立している広州の捜索隊が
潜んでいる米花港へと潜入する話を書かせて頂きました。
長くなると思いますので此方も前編と後編に分かれて書かせていただきます。

第15章。夏美達、米花港に潜入（前編。）

アレから、オウガへの報告を終えた夏美達は、広州の搜索隊が居ると思われる

米花港へと向かっていた。

夏美

・・・今度こそーまた、「掴んでやる、そして・・。」ハーベイを、奴等から

「サッテヤルーー」と心の中で強く決めていた。

と同時に、父さん達の一の舞もね・・。

雷外その様子を見てうすうす感じていた。

夏美が何を思つているのかを・・。

と同時にチラッと後ろを見て苦笑いをし「姉御?」

夏美タバコ吸いながら「ん?何だ?雷外。」

雷外「サイドミラー見てみなよ。黒のポルシェと黒のシボレーがまだ俺達を付けてるよ?」

「どうすんの?」

夏美笑いながら「構わないわ。」のままで。「

雷外「え？ 良いの？」

夏美頷き「多分、あの黒のポルシーやジンの車だよ。気になつて尾行してきたんだからや。」

と続け様に雷外「へ？ ジンの兄貴さんなの？」と更に続けて「じゃあ、あの黒のシボレーは？」

夏美苦笑いをし「多分・・秀さんの車だよ。」

雷外それを聞いて「・・黒の組織とFBIか・・。何かある意味
‘やばくなりそう’だよ？」

姉御。」と苦笑い。

夏美「…同感だ。」と続け様に「…ドンパチにならない事を願うしかないね。」

そう言い米花港へと段々入つて行く。

と同時にジンとウォツカ・・そして、赤井は盗聴器で夏美達の会話を聞いていた。

すると、夏美「なあ・・。雷外。」

雷外「はいよー。」

夏美「さつきから何か、気にならないか、？」

雷外領き「多分・・姉御。そいつは、ノイズだ。」

夏美それを聞いて辺りを捜索すると・・。

夏美「ハハハッ。‘やられたよ’。」

雷外「ん?何か、オマケ、があつたのかい?姉御?」と笑いながら
言った。

夏美、小型盗聴器付きの発信機を一台見つけて雷外に見せた。

一つは、黒。

もう一つは、赤。

雷外「ハハツ。ヒツ」とは・・。あの男達か。

夏美「・・多分ね。」

雷外「んで? ビツさん?」

夏美「まあ・・広州の面子の仕業じやないって事が分かつたから取りあえずこのままって

事で・・。

それを聞いて雷外若干呆れ笑いをし「姉御・・・。相変わらず、そういう所に関しては

‘呑氣’だし・・警戒心がないね。」

夏美「ほつとけつ！！」と笑い換えした。

と続け様に再度心の中で・・・。

しうがないじゃ～ないの！

だつて・・。もし、此れ壊したら・・。

もし今度、再度ジンや秀さんになつた時に、どやされぬ、んだから・。
。

特に、ジンの、どやされ方、は・・・。

ある意味マズイんだもの・・（汗笑・）

と呟いていた。

第15章 夏美達、米花港に潜入（前編。）完。

第15章。夏美達、米花港に潜入（前編。）（後書き）

今章もお付き合いくださり有難うござります。

次章はですね、今章の続きを書かせて頂きたい

と思います。

次章もお付き合いくだされば幸いです。

オマケ・・8?

雷外「何かある意味、やばい事、?になつてきたね。

夏美の姉御。

夏美「そうだな。雷外。」

と同時に心の中で苦笑いをし、

「ハヤと涼ちゃんが追われている気分かつた仮がある
よ。今回書こうじゃー次章も宜しくねー。」

第16章。夏美達、米花港に潜入（後編。）（前書き）

おはようございます。

今章は、前章の後編です。

此方も此方で夏美と雷外のやり取りが主になります。

第16章。夏美達、米花港に潜入（後編。）

夏美達は、あれから広州の搜索隊に勘付かれなによつて、夏美的愛車である黒のベンツを

誰にも気付かれない部分に止めて降りた。

そして、歩き始めた。

一方、ジンとウォッカも黒のポルシェをばれない所に止め降り夏美達の後を追つた。

しかし、赤井は黒のシボレーの中に居た。

ジン達との接触をあえて今は避ける為だ。

そして、歩き続けると・・。

一つの倉庫から物音と声がした。

夏美達は其処で足を止める。

雷外夏美を見て小声で「姉御。」

夏美頷き小声換えして「ああ。多分・・・この声と言ふにこいつ事
するのは・・・

「奴等しか、居ないだろ?」

と続け様に「倉庫番号確認して。」

雷外領き「D - 123。」

そして、メモを取った。

と続け様に「はい。姉御。」

夏美、雷外からメモを受け取り「じゃ・・兄様に報告だ。」

雷外「了解。つて・・姉御！・あ、あれあれ！・！」

と道路の方に指をさした。

あると、其処には赤のベンツが通っていた。

と続け様に「こっちに向かってくるよーー！」

夏美軽く舌打し「こっちに来るって事は恐らしく、あの女、だ。」

(夏美が言つあの女とは広州の女首領。メイラン。)

と続け様に「隠れるよー取りあえず、今は隠れて様子見だつ！』

雷外領きばれなさそうな倉庫のコンテナの死角に隠れた。

そして、聞こえない程度に夏美、アジトに連絡をしオウガに報告した。

と同時に赤のベンツはその夏美達が睨んだ倉庫の前で止り運転手が後部座席のドアを開け

其処から1人の女が出てきた。

運転手そして・・・広州の捜索隊らしき1人がその女に一礼した。

雷外小声で「やつはな。あいつだ。メイランだ。」

と呟いた。

そして、夏美、アジトへの報告を終え携帯を切った。

雷外「姉御。終わった？」

夏美頷き「ああ。念の為つちの連中も何名か此方に向かわせて下さるらしい。」

雷外「んで？俺等はどうすんの？？」

夏美前に吸っていたタバコをばれないように携帯灰皿の上で消し、
そしてまた

タバコに火を灯し「一先ず・・・待機。もし、ばれそう・・・また、動き、があり次第

動けとの事だ。」

雷外それを聞いて「了解した。それまで・・・此処ね。」

夏美、雷外を見て頷いた。

と同時に、密かに、ジンとウォッカが夏美達に近づいていた。

第16章。夏美達、米花港に潜入（後編。）（後書き）

今章もお付き合いくださり有難うござります。

さて、次章は、広州の連中の動きについて書く予定でございます。もしかしたら、変更等も考えられますのでその時は「」で承願います。

オマケ・・・。9?

夏美「遂に・・広州の搜索隊の目的が明らかに?？」

雷外「かもだよ。姉御。」

夏美「何で？」

雷外「・・・だって、あの作者・・・氣まぐれ者、だも

の。
」

ライカ

おいおい（笑：）

と続け様に「次章も宜しく。」

第17章。ワカバと広州と漆黒の闇（前編）（前書き）

今章は夏美達が遂に広州の女首領であるメイランと会います。因みにメイランは夏美的事を中国語で呼びます。

昔・・作者自身が中国語翻つていた事もありますので遊び半分で入れてみました（笑）

第17章。ワカバと広州と漆黒の闇（前編）

すると、雷外、ふとジン達の、気配、を感じたのか。

「・・姉御。」

夏美苦笑いをし、「近づいている、？」

雷外頷いた。と同時に「ねえ・・ソロソロ、奴等の所に、乗り込む
？」

夏美フツと笑い「・・そりだな。」そう言い携帯灰皿に静かにタバコを消し

「行くよー雷外！」

雷外「あーよー！」

そう言い2人して広州の捜索隊等が居る倉庫に乗り込んだ。

その様子を見てウォッカ「兄貴。どうやら夏美さん達、俺達の事勘付かれた、みたい

ですぜ？」

ジンニヤリと笑いながらタバコに火を灯し「どうやら。その様だな。
ウォッカ。」

ウォッカ「で?」これからどうします?」

ジン「そうだな。広州の連中も気になるからな。夏美達が潜入した倉庫に俺達も

潜入するとしよう。」

それを聞いてウォッカ「了解！」

そう言い2人して夏美達の後を追つた。

此処は、広州の搜索隊等が居る倉庫の中。

メイラン「『苦勞様。お前達。』

広州のメンバー一同（搜索隊も含め）

「はっ！メイラン様！」

とメイランに一礼する。

と続け様に「愛蘭。」

愛蘭「御前に。メイラン様。」

とメイランに一礼する。

メイラン「赤龍と夏美^{シャアメイ}は見つかったの？」

愛蘭「はい。此處米花町の阿笠家にいらっしゃいます。」

メイランそれを聞いて微笑んで「そう。良かったわ。『探す手間』
が何とか省けたわね。」

愛蘭「それで？」の後いかがなさいます？我が主様。

メイラン「・・そうね。あの子達をいえ・・赤龍だけを、あそこから連れ出しましょう。」

愛蘭「え？ 赤龍だけをですか？」

メイラン領き「ええ。」と続け様に「だつて・・・あの子、はむつ、此処に居るんですけども

の」。と更に死角の部分に隠れている所を見て「そうでしょ？ 夏美

シャアメイ

私の、可愛い妹。」

すると、夏美が雷外と共に出て來た。

夏美軽く舌打「もつ・・・バレたんかい、？早いな・・・。」

と苦笑い。

雷外警戒をする。

すると、メイラン雷外を見てクスッと笑い「あら・・。あのライフエイ所の弟君まで

来ているの？」

夏美フツと笑い「悪い？だつて・・今回は、‘仕事’出来たんだか

いや。

メイラン、姉さん、。

それを聞いてメイランフツと笑い「そう、仕事でね。その辺は相変わらずね。

夏美
[シャアメイ]

夏美タバコに再び火を灯し「此れでも・・あんた所の対立している
‘ワカバ’の一員

だからさ。」と続け様に「赤龍はあんた達、広州なんかに渡さない
よ！！」と続け様に

「‘彼女’は私の‘大切な人’の大事な‘妹分でも’あるからね。」

と続け様に後ろを見て「そうでしょ？ジン。」

すると、後ろからジンがウォッカを連れて出てきた。

第17章。ワカバと広州と漆黒の闇（前編）完。

第17章。ワカバと広州と漆黒の闇（前編）（後書き）

今章もお付き合いくださり有難うござります。

さて、次章は、この続編を書く予定でいます。

次章もお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ・・・10?

雷外「お疲れ〜！姉御。」

夏美「お疲れ〜！弟よ〜！」

ミレイ「・・何か・・私の出番が最近少ないような

気が・・・。（泣）」

ジンニヤリ「なら、俺が作者に頼んでやるつか？」

元々はお前が主人公だからな。」

ミレイ「本物? ジン兄さん?」

ジン「ああ。」

ミレイ「やつた ジン兄さん大好き~」

ジンに抱きつく。

ジンミレイの頭撫でて「おい。作者。」

Natsu 探す。

夏美「彼女なら・・またどつか行つたみたい。」

と苦笑い。

ライカ「やつ言えば・・・明日、テストだつて言つてた
なあ。」

夏美「あれ？作者さん学生？」

ライカ領き「大学4年らしい。」

夏美「・・・成る程ね。」

これ以上長くなる恐れがあるので以下自粛（笑・・・）

第18章。ワカバと広州と漆黒の闇（後編。）（前書き）

今章では、前章の後編です。

雷外が撃たれそうになりますが、逆に夏美が雷外を

底い撃たれてしまいます。

第18章。ワカバと広州と漆黒の闇（後編）

ジンニヤリ「良く、俺達、が此処に居るつて事が分かつたな？夏美。
」

それを聞いて夏美フツと笑い「雷外の奴が薄々、勘付いて、居たの
ぞ。」

と続け様にウォッカを見て「久々だね。ウォッカ。」

ウォッカ夏美に一礼し「お久しぶりです。夏美さん。お元気そうで
何よりです。」

夏美「ウォッカもね。」と微笑んだ。

そして、メイラン再度クスと笑い「あらあら・・しばりく見ないう
ちに、随分と、

たちの悪やうな、お友達、ヒツのむよひになつたのね。**夏美**^{シャアメイ}？」

夏美「・・あんた達とつるむよつけはある意味、随分とマシな方だ
と思つがね。」

と悪戯笑みを浮べて言つた。

ジン夏美の側により「悪いな。メイラン。こいつは、ダチ、ではね
えんだ。」

それを聞いてメイラン「あらっ。だつたら・・」の子は貴方の、何
？」

ジン再度にヤリと笑い、「こいつは俺の、女、さ。」

と続け様に「・・・昔からな」。

と続け様に雷外メイランに向かって「あんた!」あの時、夏美の姉御を、捨てたんだろ

う、? ! なのに・・なのに・・今更何さつ! ! 今更つ ! ! 姉御の姉貴面してんじやねえ ! !

と怒鳴った。

すると、広州の搜索隊のメンバーの一人が「貴様つ ! ! メイラン様に向かつてなんて事を ! !

「 そう言い雷外に飛び掛ってきた。

だが・・何時の間にかジンの側から離れた夏美が雷外を庇っていた。

と同時にその雷外に飛び掛ってきたメンバーに「・・私の、相棒、達（仲間の事）に手出し

したらこの私が許さないよ。」とひと睨み・・。

メンバー「クソッ！ 夏美様！ 貴女様まで、ワカバ、に味方を？！」

夏美前吸っていたタバコを携帯灰皿に再び消しそして真新しいタバコに再び火を灯し

「、勘違いしているんじゃないよ？、私は元々最初から、ワカバの一員。」

それは、昔も、今も、変わらないんだからさ。」

メンバー「クツー！」

そして、メイラン「戻りなさいーーー！」

メンバー「・・・ですが。」

メイラン「、戻りなさい、ーーーと言つてゐるのーーー分からぬの？」

メンバー納得しない顔しながらもメイランに一礼し下がった。

すると、メイラン夏美を見てフウとため息をつき、「、その辺は変わつていねいのね。」

夏美。
シャア
メイ

夏美「・・・あんたは変わつてしまつたよ」。

と悲しそうに呟いた。

すると、倉庫に銃を構える音がした。

ジン「ん？」

ウォツカ「・・兄貴。」

ジンニヤリと笑いタバコを下に落とし踵で踏みつけもう一本に火を
灯し

「ああ。‘どつかに’、こいつ等の他に、仲間、が潜んでいるようだ。

」

雷外「・・姉御。」

夏美領を「ああ。じつやう、良い展開、ではなさそつだ。」と笑つた。

メイラン「・・・残念だわ。夏美^{シャアメイ}。貴女なら、分かってくれる」と

思つたのに・・・と再度クスッと笑い「死んだご両親と、同じ道
」を歩んだ事後悔すると

良いわ。」と同時に「貴女に、教えてあげる。ワカバに付いてしまつた事がどんなに

「愚か、だつたって事を。」

夏美「何？」

すると再び、何かを感じ、「伏せろっ！－！雷外っ！－！」

雷外「え？」

すると、一発の、銃声、が響いた。

そして・・。

雷外が撃たれた・・はずだつた。

が・・。

雷外「…え？」

其処には再び雷外を庇つた夏美が左肩を抱えて立っていた。

そして・・序に左太もも撃たれていた。

夏美の左肩と左太ももから血が滴れる。

雷外「・・な、夏美の姉御つ！！」

と続け様にジン夏美の側に駆け寄り、夏美を支える。

夏美少し息切れしながらも雷外を見て微笑んで「・・け、怪我ない
か？雷外。」

雷外頷き「ああ。有難う。」

メイランは信じられない顔をしていた。

と続け様に「どうして？庇うの、？別に、私は、貴女を傷つけようとした訳じゃ

ないのよ？」

夏美フツと笑い「そいつは・・愚問だよ。メイラン。」

と続け様に「別に・・・ワカバ、や私しゃあの、大切な人達、を守
れるんだつたら

こんな傷、‘軽いもんさ’。

そう・・・

嘗て、母が、あの時、私を庇ってくれたように・・・

死なせはしないわ！

もう・・誰一人も。

それが、‘今の私に与えられた使命。’

と同時に倉庫周りが車の音がし始めた。

それと同時に外に待機していた広州のメンバーの1人が入つて来て
「メイラン様っ！」

メイラン「何事？！」

メンバー「ワカバ、です！」「ワカバ、の面子がこっちまで嗅ぎ付
けてきました！」

メイラン「何ですって？！」

と同時に再びビリして、といつ顔になった。

それを見てジン再度一ヤリと笑い「・・・悪いな。こいつが銃撃受ける前に俺が

ワカバに連絡しておいたのさ。」

夏美、ジンを見て「・・・ジン。有難う。」

ジンフツと笑い夏美を見て「・・何。気にするな。オウガにも俺から言っておいたから、

多分・・・」

夏美「兄様自ら態々お出に?」

ジン「ああ。来るだろ? よ。」

そして、緑のベンツやら・・

様々な車が止り

ワカバのメンバーとして、何と服部とコナンまでもが降りてきた。

夏美それを見て「・・なつ? !」

平さん！それに・・・新！！

ビリして此処に？！

そして、それを見たジンは再びニヤリと笑い「ほう。西の探偵のガキまで出て來たか。」

と続け様にコナンを見て「ん？あのガキ・・・。」

誰かに似ているな。

と心の中で呟いた。

そして、服部血相を変え、「夏美！……何処やつ？一何処にあるんやつ？」

と珍しく下の名前を呼んで倉庫の中に入つて行つた。

コナンそれを見て「おいつ！待てつ！服部！」

そつ言い服部の後を追つた。

第18章。ワカバと広州と漆黒の闇（後編。）（後書き）

今章もお付き合いくださり有難うござります。

さて、次章は、ワカバの総メンバー？が

倉庫に大集合する予定です。

此方も前編と後編に分けて書く予定で居ます。

と繰り返しこの前編、後編シリーズは

後もうしばらく続く予定でも居ます。

では、次章も今章と同様にお付き合いくだされば

幸いです。

いつものオマケ。

オマケ・・10?

雷外「・・姉御。」

夏美「ん?」

雷外「・・『めんね。本当に・・。』」

夏美フツと笑い「気にするな。」

と雷外の頭を軽く撫でた。

と続け様にジン「ま・・夏美も大丈夫そудだし、

取りあえず安心だな。」と更に続けて

「次章もよろしく頼むぜ。」

第19章。ワカバと東西（高校生）（名）探偵登場。（前編）（前書き）

おはようございます。

今章では、平次君達がワカバと共に乗り込んでしまいました

と言ひつつ・・先に平次君が乗り込んでしまいました

けど・・（笑・・）

では、今章もどうぞお読みください・・。

第19章。ワカバと東西（高校生）（名）探偵登場。（前編）

服部「夏美～！何処や？…何処にあるんや～！」

そう言ひて倉庫の中を駆け回つた。

コナン「服部！」

そう言い服部を追い続けた。

すると、メイランクスと笑い「あらあら・・・懶々、こんな所、まで来るとはね。

何と物好きな探偵坊や達事。」と続け様に「でも・・此処に来られたら、只じゃ帰せない、

わね。」と更に「彼らこなはりつと、痛い目、に合わせた方が良さそうね。」

そう言い格闘隊を出させた。

そして、「夏美！！」

と服部夏美の所に現れた。

夏美「へつ・・平さん？…ビーハして此方に」？…」

服部「お前がいつまでたつても連絡来んから・・心配になつて來た
んや！」と続け様に

「あの・・ボウズが仕掛けた盗聴器付発信機を頼りにな。」

夏美「・・そうでしたか。」心配おかけして申し訳ありません。」
と続け様に

「ですが・・もし、平さんの身に何かあつたら・・私、平さんのお父さんに顔向け出来ませ

ん。此処は危険です！早々にあそこへ戻りください！」と促す。

服部「怪我している奴を見て誰がほっとくんかい！俺も、やるで、
？」

と続け様に「もし・・お前にまた何かあつたら・・俺もお前の、『
両親』に顔向け出来へん

ねん。」と苦笑い。

それを聞いて夏美「・・へ、平さん。」

と続け様に雷外「ねえ・・・姉御。お話中横入りで申し訳ないんだ
けど・・。」

夏美「どうした? 雷外?」

雷外「服部君つて・・一体? ?」と続け様に「服部君のお父さんつ
て・・・? ?」

夏美納得した顔で「ああ。お前さん。あまり平さんの事詳しく知ら
なかつたな。」

と続け様に「平さんが西の高校生探偵って事は・・・多分お前さんも知っているよな?」

雷外頷いた。

そして、更に続けて「平さんはね・・あの大阪府警本部長である服部平蔵さんの息子さん

なんだよ。そして・・昔私が、大阪で何が原因で起きたかは知らんけど・・。

事件に巻き込まれんでもって・・大怪我追いそれを助けてくれたのが・・

この服部親子つて訳。」

ジンそれを聞いて

・・大阪府警本部長の咲か、ある意味、面倒な、奴だな。

と心中で呟いた。

雷外「成る程ね。姉御が、服部君に向となく、敬語、使っている理由分かった気がしたよ。」

夏美フツと笑い「おしゃべりは・・此処までだ。どうやら、奴等の格闘隊、が現れた

と言つ事は・・やうやく、つもつらじて。」

と夏美が立ち上がるゝとしたその時「お止めくださいっ！・姉者！
！」

と男の声が聞こえた。

第19章。ワカバと東西（高校生）（名）探偵登場。（前編）完。

第19章。ワカバと東西（高校生）（名）探偵登場。（前編）（後書き）

今章もお付き合いくださり有難うござります。

さて、次章はこの後編に付いて書かせて頂く予定で

す。

次章も今章と同様お楽しみ頂ければ幸いです。

と同時に今まで書き忘れてましたが・・

平次君の関西弁にはひょっとしたら変な部分も

あるかもしません。それに関しましては

当方が、関東人なので・・その辺に関しましては

ご了承くださいますよ!にお願いいたします。

オマケ・・11?

夏美「・・まさか平さんまで乗り込んで来られるとは

・・・。」

雷外「・・予想外だつたね。姉御。」

夏美「・・ん? そつだな。」

N

まるで・・かつてのソフトバンクのCM見たい?

(笑:)

服部「まあ・・何はともあれ・・此処まで読んで

くねておねがい。またおひこね、うー。」

夏美「……く・・平やすーこの間ひへー。」（笑）

第20章。ワカバと東西（高校生）（名）探偵登場（後編）（前書き）

今章は、前章の続きです。

後半にはオウガ様が出てくる予定です。

第20章。ワカバと東西（高校生）（名）探偵登場（後編）

夏美その声に聞き覚えがあつた「ら・・・雷龍か？！」

その男の名は李雷龍^{リ・ライロン}。夏美の実家である橘家本家の使用人でも

ありワカバの一員でもあり夏美の弟分でもある。

雷龍「はい。俺ですよ。雷龍です。姉者あねじやもつすぐ他の我々のメンバーも来ます。

ですから・・申し訳あつませんがもうしばらく、『辛抱を』。・と
更に続けて

「お怪我なさつていりのに・・。『無理は、禁物ですよ。もし・・姉者に何かあつたら

俺・・旦那様方に顔向け出来ません。」

夏美苦笑いをし「それ・・・平さんにも言われたよ。と言つても似た
ような事だがな。」

と続け様に「・・・ツ！」

顔しかめ撃たれた左肩の傷を手で押さえる。

すると、ジン「大丈夫か？夏美。」

夏美フツと笑い「ええ。平氣よ。」

・・あの女に、撃たれた過去の銃弾の傷、がこんなにも今になつて
‘疼いている’なんて

・・。と心の中で呟いた。

と同時にジン「夏美。お前は自分の車の中に戻った方が良いんじゃ
ねえか？」

」のまま此処に留まることも危険だしそう。

其れを聞いて夏美「・・・でも。」

服部「その男の言つ通りやで。夏美。此処は俺らに任せたお前は自分の車の中に戻り休みや。」

夏美「・・平さん。」

そして、ジン、ウォッカを見て「夏美を」二つの愛車の中に連れて行つてやれ。」

ウォッカ「了解。」と続け様に「夏美さん。立てます?」

夏美頷き「ええ。大丈夫よ。」そう言い立とつとしたその時倉庫の中に再び銃弾が鳴った。

しかし、その音は外されてその銃弾を放った広州の仲間の1人はサッカーボールで

氣を失わされていた。

メイランその状況を見て「だつ・・誰？！サッカーボールを蹴り飛ばしたの？！」

すると「俺だよ。」

その声の主を必死で探すメイラン「何処？！何処に居る？..」

「此処だよ。」

そして、マイランその声の主の前に手をやつ、「・・なつ・何者なの
?・!あんた!」

すると、「ナンがキック力（強化）シューズの電源が入ったまま歩
いて来てニヤリと笑い

「江戸川コナン!探偵さつ!」

マイラン「た・・・探偵?!」

まさか?こんな坊やにあいつはやられたの??

メンバーの一人がコナンに気を失われたメンバーの確認をして「メイラン様。どうやら・・

この少年に・・^{アイリン}愛燐はやられたそうです。」

と信じられないさそつな顔をして報告した。

メイラン「・・なつ?!

コナン「へえ・・あの女人、^{アイリン}愛燐って言つんだ。僕・・知らなかつたな

雷外

・・おいおい。

新の兄さん。マジかよ？

あの・・広州の中でも凄腕のスナイパーである愛燐の奴を糸も簡単
に・・。

それに・・この女愛蘭の実の姉貴だぜ？

つて・・此れは関係なかつたか。と苦笑い。

ジノ」「ヤツ」と笑い「・・あのガキ。ひょっとして・・。」

俺が前にぱらしたはずの・・

「工藤新一、じゃねえのか？」

普通の小学生のガキがこんな事しねえだろ？

とコナンの事疑っていた。

と同時にコナン「ヤツ」と笑い「どうする？マイクはセレブ？」のまま
何もしないで只

ボーッとしていると、那人、が来るよ？」

あの人とはオウガの事。

メイラン「坊や！大の大人をなめてはいけないわ！奴が来る前に・・・

何としても片付けて・・・。」

すると、男の声で「俺が・・・どうかしたって？」

メイランその声を聞いて再び驚き「な・・・」つーこの声は・・・」

まさか？！

もつ来たの？！

と心の中で呟いていた。

第20章。ワカバと東西（高校生）（名）探偵登場（後編）完。

第20章。ワカバと東西（高校生）（名）探偵登場（後編）（後書き）

今章もお付き合いくださり有難うござります。

さて・・次章もまだまだ当分長く？なりそつなので

このまま多分（前編と後編）に分けて書かせて頂けり
と思つております。

それでは、次章も今章と同様にお楽しみ頂ければ

幸いです。

オマケ・・12??

夏美「・・・いよいよか？」

雷外「んだね？俺らワカバと広州の対立。」

夏美「だけど・・私しゃあは、車ん中戻されるんだろ

?笑

雷外「れあ・・どうだろ? 作者の氣まぐれだからね。」

『ナン

・・おいおい。笑・・

「次章もどうぞよろしくお願ひしますー。」

第21章。ワカバの首領オウガ登場、ワカバ対広州第1戦（前編）（前書き）

今章では、ワカバの首領であるオウガが登場し

ワカバと広州の戦闘を書かせて頂きました

此方も（前編）（後編）に分けて書かせて頂きます。

第21章。ワカバの首領オウガ登場、ワカバ対広州第1戦（前編）

メイランがその声の主を見て「お・・・お前は――」

すると、其処には紺のスーツ姿をした男が出てきた。

ジンニヤリと笑い「よひ。やつとお出ましのようだな。オウガよお
！」

オウガフツと笑い歩き出して「久々だな。ジン。この度は連絡感謝
する。」

夏美「・・・あ、兄様。」

オウガ、傷だらけの夏美を見て「『』苦労さん。夏美。大丈夫か？」

夏美フツと笑い「・・平氣ですよ。此れ位の‘傷’どうつて事も。」
と続け様に

「私は、‘自分が傷つく事’よりも、‘相棒達が傷つく方が、余程。
・ ‘痛いんですよ。’」

とオウガに言った。

オウガ「・・夏美。」

そして、大樹、楓・・。

お前達の、魂、まじめに着々と娘に、受け継がれてこらめたんだ。

と呴いて前を見て「・・久しぶりだな。メイラン。この度は、俺の妹分達、が

世話をなつたようだ。」

メイランクスと笑い「いいえ。でも、大して世話しないけど、。

」

と続け様に「でも、ワカバの首領ら懲らしきりに巡回してくれるとはね。

「歓迎しなきや、ね。お前達つーーー。」

すると、一斉に倉庫内に居たメンバーがメイランの所にやって来た。

メイラン「やつておしまこ……」

やつておしまこメンバー一斉にオウガに向かつて突進してきた。

夏美「兄様！！」

と続け様に「雷龍！……そして……。」

「マイメイ
雷明居るか？」

すると、夏美の所に1人の少女がやつて来て「はつー姉上様。此處に。」

彼女の名は李雷明

リ・ライメイ

雷龍の実の妹。

夏美「頼む。」

雷明「御衣に！兄上様！」

雷龍領き雷明と共にオウガの前に出てメンバーを一斉になぎ倒した。

と同時に夏美の一斉掛け声によりワカバの待機していた他のメンバ
ーも一斉に広州の

メンバーの連中を打倒して来た。

ジンその様子を見て「ほつ。奴等中々やるじやねえか。」

といやり。

すると、予想外にも「コナンく~ん！」

「平次～！」

服部とコナンその声を聞き「な？」

ら、蘭？！

か・・和菓？！

其処に居ないはずの・・。

‘2人の最愛の女ヒトテ’が居た。

夏美「・・なつ？！」

メイランその声を聞きクスと笑い「愛蘭。彼女達も、歓迎してあげなさい。」

愛蘭「仰せのままに。我が主。」

そう言いナイフを取り出し蘭達に迫つて来た。

夏美「・・野郎！！」

そう言い火炎風拳の技の一つである火炎風回復波を使い撃たれた所を修復し

「危ないよ！蘭さん！それに和葉さん！－！」 そう言い蘭達の所に走つて行つた。

雷外「姉御つ－！」

夏美フツと笑い「あれ使つたから、もう大丈夫！其れよりかお前さんは、皆の‘サポート’

を頼む！！！」

雷外其れを聞いて頷きニヤリと笑い「了解！俺も・・・やられてばかりじゃ、納得出来ない

からな。」

夏美其れを聞いてニヤリと笑い返し蘭達の下に向かい「やめりつ！愛蘭つ！――！――！――！」

この私が相手だつ！――！」そう言ひて愛蘭の下に突進して行つた。

第21章。ワカバの首領オウガ登場、ワカバ対広州（前編）完。

第21章。ワカバの首領オウガ登場、ワカバ対広州第1戦（前編）（後書き）

今章もお付き合いください有難うございました。

さて、次章は今章の後編を書かせて頂く予定です。

次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ・・13??

雷外「姉御。遂に俺らのボスもお見えになられた

よ。」

夏美タバコに火をともし「ああ。だが、兄様が

血ひぬ出しになるとは・・此れは予想外だったな。」

雷外「・・俺もだよ。笑」

雷明「何は、ともあれ・・次章もビックりよろしく

お願い致します。」二口と笑い一礼した。

第22章。ワカバの首領オウガ登場、ワカバ対広州第1戦（後編）（前書き）

1日? ぶりですか?

更新しました。今回は前章の後編で書かせて頂きました。と同時に次章は多分第2戦田を書かせて頂きたいと思います。夏美が若干? 暴れています。（笑）

第22章。ワカバの首領オウガ登場、ワカバ対広州第1戦（後編）

愛蘭其れを聞いて「シャアメイ夏美様。危ないのでお下がりください。」と続け様に

「もし、貴女様の身に何かか起こつてしまわれたら我が主であるメイラン様に顔向け出来ませ

んから。」ニコリと微笑んで言った。

夏美その事を聞き怒りが増した「だから……私しゃあはもうメイランの、妹分、じゃ

無いって言うの……！」と続け様に「平さん達の、大切な女ヒトの身に何か起こつたら

「私……此れから平さん達に顔向け出来ん……！」と続け様に「いいからー！私と

「戦いな!!」ワカバのリーダー兼幹部として・・此処は、やらな
あや、私しゃあが

「収まらない、!!」

愛蘭フウとため息をつき「・・・本来なら」ひ貴女様には、手荒なま
ね、したくはありますんが

・・・致し方ありませんな、。」

そつ言いナイフを取り出し夏美に突進してきた。

蘭「夏美さんっ!!」

和葉「夏美つーーー！」

夏美、蘭達を見て微笑んで「大丈夫です。其れよりか・・此処に居ては危険です。

早くお戻りを。」

蘭「でも。コナン君を置いて逃げる訳にも・・・。」

和葉「あたしもやで。平次置いて行けへんもん。平次のお父ちゃんに無事に大阪に連れ戻せ

と呟きながら尋ねる。「

夏美「え？ 平蔵さんにもですか？ ？？」

和葉頷き、「せや。」と続け様に、「だから・・あたしも、逃げる訳に
もいかんねん。」

一応、いつ見ても大阪府警刑事部長の娘やからな。」と微笑んだ。

夏美「・・蘭さん。 和葉さん。」

2人とも、親が居て、

そして・・・帰りを待つてくれている。

でも・・・。

私にはもう、待つてくれる親は、・・・居ない、。

だから・・・蹴り付けないと、いけない。

本家で待つてくれている、妹、の為にも。

楓死に様に・・。

一 夏美、これからも有理をずっと・・・ずっと、宜しくね、-

そう託した。

だから！私は、生き続けなきやーー！あの子（有理）の為にもーー！

そう言い戦闘態勢になり、愛蘭を向かえ撃つ為再度突進しかけた。

夏美「ハアアアアアー！！！火炎風拳！！！火炎風爆龍拳ーー！」

其れは龍の様に舞そして・・爆風をもたらした。

愛蘭「・・クツ！！」

こつ・・・此れは橘楓の・・・。

どうして？！

夏美様が？！

オウガメンバーに指示を出しながら「夏美の奴、久々に、熱くなっ

ているな'。」

と笑った。

と続け様に雷外「し・・しかし、ボス。下手すりや・・・姉御暴走を引き起こすかも

しれませんよ?何せ・・相手はあの愛蘭と同時に広州のメンバーですし。」

と若干慌てながら言つた。

オウガ「・・そうだな。」と続け様に「楓の拳法火炎風拳は、大樹の雷風拳とは違ひ・・・

元々、復讐、の拳法だつたからな。楓はそう簡単に、暴走に、飲み込まれていなかつたが

夏美の場合・・・広州に、対する復讐、もあるからな。」

その事を隣で聞いていたジンがタバコに火を灯し「どういふことだ
？オウガ。」

すると、オウガ「ジン。お前・・夏美の両親知つてるよな？」

ジン頷き「ああ。大樹と楓だろ？昔、お前ん所で会わせてくれた
じゃねえか。」

と続け様に「奴等は?」

オウガ悲しそうな顔をして「・・・死んだよ。昔ワカバの任務中に・
・広州のアジトに

行つた時に・・広州の手にかかるてな。」

ジン「な?奴等が・・・死んだ、だと?!

オウガ領き「ああ。だから・・・夏美は、ワカバに、残つた。両親の使命を、

今度は、自らが果たす為、にな。」と続け様にジンを見て「だから・。お前には

‘言えなかつたんだよ。’俺は、お前と共に‘幸せな道’を選ぶ事を進めた。

だが・・あいつは、‘父さん達が残した任務’、そして・・。‘宿命を’残して

‘私だけ・・’幸せには、なれないですよ。兄様。’と言つたんだ。

と続け様に‘この事は、彼には言わないでください。おそらく、反対’すると思つんで。

いつかは分かりませんが・・・広州の戦のすべて、が終わった後私は、‘彼の腕の中’

に戻ろうと思ひます。とな。ワカバの任務の‘危険性’が高いと言ふ事は昔・・・

大樹達の任務を見てあいつはあいつなりに痛感したんだろう。」と更に続けて

「あいつは、お前に心配をかけさせたくなかつたんだううさ。」とも付け加えた。

其れを聞いてジンコンクリートの床にタバコを落とし踵で消し「・・・・ツ！あの、馬鹿が。」

ウォッカそのジンの様子を見て「・・・兄貴。」

そう呟くしかなかつた。

そして・・ワカバと広州の戦は続いて行つた。

夏美の攻撃を間一髪で交わす事が出来た愛蘭はナイフで夏美に攻撃をした。

夏美避け切れずに左腕に軽く傷が付けられた。

夏美「・・ツ！」

夏美の左腕から血が垂れる。

と同時に夏美次々と拳法の技を繰り出し愛蘭を追い詰めていく。

一方、蘭達は他に潜んでいた広州のメンバーと対立していた。

第22章。ワカバの首領オウガ登場、ワカバ対広州第1戦（後編）
完。

第22章。ワカバの首領オウガ登場、ワカバ対広州第1戦（後編）（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うござります。

次章も今章と同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ・・14??

雷外「お疲れ様で～す！作者さん。」

「お疲れ様です。雷外。」

雷外「んで？？レイの姉御いつまた再登場？？」

「…後もつづけば？？先の予定です。」

夏美「早めに頼むよ？作者さん？」

と続け様に「ミレイ再出番心より待ち望んでいた

んだから。」タバコ吸いながら二口。

「う・・・がつ、頑張ります！笑・・・」

夏美「皆さん。誤解をせて頂かない様予め申し上げておきますが、この物語の主人公はあくまでミレイです。その辺を理解して承頂きたいと思います。」

と続け様に「其れでは、次章も宜しくどうぞ。」

第23章。ワカバ対広州第2戦。（前編）（前書き）

今章は、前章の続きみたいな物です。

ワカバ側に蘭達がついています。

尚・・。

ワカバ対広州編は後もうしばらく？続く予定ですので
今しばらくお付き合いで下されば幸いです。

第23章。ワカバ対広州第2戦。（前編）

あれから、ワカバの助つ人のように現れた蘭達。

そして、彼女達も広州のメンバー達と対立する羽目になつた。

すると、メンバーの1人が軽く舌打ちし、「女2人かよ。」と呟いた。

蘭其れを聞いて「女だからってなめてると、痛い目に、あつわよ？」

和葉も「せや！あんた等の相手はあたし等がしたるさかい……かかつてきいや……」

そしてメンバーも「フン！後で後悔しても知らねえからな。」

そつとくい仲間達と一緒に蘭達に襲い掛かつて来た。

蘭「アアアアアアアアアアアア！」 気合を一気に溜め込み上段蹴りを広州のメンバーに食らわす。

一方、和葉も襲い掛かつたメンバーの腕をつかみ「ハツ！」と投げ飛ばす。

投げ飛ばされたメンバー「な・・・こいつ、合気道使いか？？」

驚きながら体勢をすばやく立て直した。

一方、服部とコナンはその様子を見て口相変わらず驚いてばかりいて。。。

服部小声で「なあ・・・工藤？毛利の姉ちゃん、ものす」く強つなつてへんか？」

其れを聞いてコナン囁き小声で「ああ・・・俺もそつ思つたよ。」

と続け様に「後・・・和葉ちゃんもな・・。」

服部「あの2人は、怒らせない方が、身のためやな。」

と続け様に「ナン」「あちらは、蘭達に任せて大丈夫そうだ。」

服部「せやな。俺等は・・すでに、戦っているワカバのメンバーの皆と合流し

加勢や・・。

コナン再びキック力増強シユーズの電源を入れながら「ああ。そうだな。」

服部倉庫にあつた棒を持ち「じゃ・・そろそろ俺等も行くで?準備はええか?」

コナン領きそして・・雷外達の所に加勢しに行つた。

一方、ジン達は只その戦いの様子を見ていた。

広州の連中もジン達の、恩讐した、は噂で聞いていた為下手に手出しあつては出来なかつた。

するとウォッカ「・・兄貴。俺達此れかひびつじやす?」

ジン再びタバコに火を灯しニヤリと笑い「まあ・・燒てるなよ。しばらく様子見だ。

もし、ワカバの連中がやばそつになつたら・・俺達も、加勢、だ。

ウォッカ「了解！」

一方夏美は、愛蘭と未だに対立していた。

愛蘭「シャアメイ 夏美様。戦いの最中で申し訳ありませんが・・・一つお伺いしても

宜しいですか？」

夏美「何だい？」

愛蘭「何故・・・貴女様が、嘗て橘大樹と楓の伝承した、拳法を使えるのですか？」

夏美フツと笑いタバコに火を灯し「愛蘭。私しやあの、苗字、忘れたのかい？」

愛蘭其れを聞いて思い出した。

「橘・・・。まさか？」

夏美タバコ吸いながら再度フツと笑い「ああ。そうさ。私しやあの
‘苗字’は橘。

橘大樹と楓の娘。であり、有理の姉さ。」

と続け様に「私しやあはね、‘両親の使命’そして‘無念’を晴らす為に両親の‘拳法’

を伝承しワカバの団員になつたのぞ……」と続け様に「さて……。
‘おしゃべり’も

此処までだ、蹴りをつけようじや、ないの！愛蘭。そして……。あ
いつ（ミレイ）の

実の兄の‘仇討’もかねてな……。」

其れを聞いて愛蘭只黙つていた。

そして……。

シャアメイ
夏美様が、あの橘大樹と楓の娘……。

言われて見れば雰囲気が似ているわね。

と心中で呟きそしてフツと笑い、「その為に、貴女様は、ワカバの一員になられたのです

ね。」と言い再びナイフを構え「貴女様の、お気持ち、が済むまで・。
・。私が良ければ

何時までも、お相手致しますよ。」と言つた。

其れを聞いて夏美携帯灰皿にタバコを揉み消してしまい再び戦闘態勢に入った。

第23章。ワカバ対広州第2戦。（前編）（後書き）

今章もお付き合いで下さり有難うござります。

さて次章は今章の後編について書く予定であります。

次章もお付き合いで下されば幸いです。

尚、私事で恐縮ですが、マミ様初めてまして。

この度は応援メッセージ有難うございました。

とても励みになりました。

返信をせて頂いたと思つたのですが・・

上手く行かなかつた為此方でお返しする事を

どうぞお許しください。

今後とも出来る限り時間がありましたら早めに

更新するように勤めます。

(今月いっぱい、そして、来月の中旬辺りまでは
多分時間が取れるので更新出来ると思いますが、
作者は大学で今年4年の為卒研等もありますので
来月下旬からは多分、更新率が低くなる恐れも
ございます。その辺は『理解』了承を頂きたいと
思います。)

オマケ・・・18??

(数が分からなくなってきた笑・・・)

「ナン」「なあ・・・服部。」

服部「何や? 工藤?」

「ナン」「・・頼むからよ。ミレイ達以外でもやみに

俺の事、工藤、って呼ばねえでくれるか?」

服部苦笑いして「すまんなーつい癖で・・・。」

「ナンハア」とため息をつき「頼むからいい加減

慣れてくれよ。」

服部「・・善処するわ。」

と続け様に「次章もビツビツ宜しゅう!」

第24章。ワカバ対広州第2戦（後編）（前書き）

お久しぶりです。

今章は、前章の続きです。

第24章。ワカバ対広州第2戦（後編）

あれから、着々と広州のメンバーをなぎ倒して行くワカバ勢。

その勢いも止まらなかつた。

しかし・・。

夏美はと言つと、愛蘭と戦つてゐる最中に1人の男の、妨害、にあ
う。

ドカツ！！

夏美壁に勢い良く壁にぶつかつた。

雷龍その様子を見て「姉者！……！」

夏美顔を若干しかめてそして笑い「だつ・・大丈夫だつ！…只、壁にぶつかっただけだ。」

雷龍「し・・しかし。」

とかなり心配そうな顔をして夏美を見る。

夏美「大丈夫だ！」と続け様に「お前は、お前の妹として・・ワカバの相棒達と共に

「己の今与えられた任務、を果たせつ！！」

雷龍その事を聞き「・・・御衣に。姉者。」

そつ言い自分の持ち場に再び着いた。

愛蘭若干不服そうに「ちょっと・・邪魔しないでくれない?」

龍灣ロングワン

「。

彼の名は玲龍灣。

愛燐と愛蘭の実の弟。

龍灣「申し訳ないです。愛蘭姉さん。しかし・・・個人的には

合点が行かない部分、

もありまして。」と続け様に「何故？メイラン様を、裏切った奴、の相手愛蘭姉さんが

しなくてはならんのです？？」と更に続けて「、ワカバなんかに、身を投じている

「この女に、？」と不服そうな顔をして夏美を見て言った。

夏美その事を聞いて若干心が痛んだ。

何故？

私を裏切ったのは・・・メイランの方、

私じゃない！！

だけど・・・。

だけど・・・。

こんなに・・・。

いや・・・。

若干、心が痛むのは、

何故？？？？

すると、左肩に痛みが走った。

夏美「・・ツ！！」

右手で左肩を抑える。

すると、ウォッカが来て「な・・夏美さん？ーだ、大丈夫ですかい
？！」

夏美微笑んで「ああ。大丈夫。」

過去に・・。

メイランに捨てられる時に付けられたあの銃口の傷が未だに、痛む
'なんて・・。

そんなの言えないわ。

すると、ジンも夏美の側に寄つて来て、タバコをコンクリートの床
に落とし踵で消し

龍灣を見て「・・・てめえ。余程、ばらされたい、らしいな。」

とベレッタを突き付けそして睨みながら言つた。

その様子を見た夏美「駄目よつーージンつーー！」

ジン、夏美を見て「こいつに、情けかけるつもりか、？」

夏美「いいえっ！別に、広州の連中に情けかけるつもりなんかいわつ！！！」

ジン再びタバコを取り出し火を灯しながら「だつたら・・何故だ?」

夏美「此れは・・私の!-いえ!-ワカバの戦い!-手出しが無用よ!-」
と続け様に

「別に、貴方の、手を煩わせる、までも無いわ。」と微笑みながら
言った。

ジンフツと笑いベレッタを懐にしまい「・・分かった。だが、「無
理は禁物だぜ」?

お前の死んだ両親も多分そんな事望んじゃいねえよ。」

夏美フツと笑い返し「ええ。善処させてもうつわ。」と続け様に「
ジン。」

ジン「何だ？」

夏美「出来れば・・・。」この戦いが終わるまで此処に居て欲しいん
だけど・・

‘駄目かしら’？

ジン其れを聞いて再びフツと笑い「別に構わぬえぜ？」と続け様
にウォッカを見て

「」の後仕事ねえんだし。平氣だろ？」

ウォツカ「へイ。兄貴。」

と頷いた。

夏美「有難う。」

と続け様に龍湾を見て「私が・・メイランを、裏切った、?馬鹿言
うんじやあ無いよーー！」

龍湾「何？」

夏美更に続けて「その、逆さ。私が、メイランに裏切られたんだ
よ、一広州設立する

時に私の、左肩に銃弾を浴びせてな、……」

龍湾其れを聞いて「う・・嘘だつ！…あのメイラン様がそんな事するわけないっ！！」

夏美首を横に振り「本当だ。なら、証拠、見せてやるよー。」

そう言い羽織つていた黒の上着を脱いだ。夏美的戦闘服（チャイナ（ノースリ））

状態になった。

龍湾、夏美的左肩を見て「んな？！」と驚いた。

其処には銃弾の傷がしつかりと、残っていた。

ジンもウォッカも其れを見て驚いた。

夏美「…私は、この、銃弾の傷けずりと共に、今日、まで生きて来たんだ。」

龍湾「…そんな、俺達に、優しいメイラン様、がそんな事する訳が無いつ！！」

夏美其れを聞いて、「其れは、あんた等に、限つて、だよ。」と続け様に、「無能、

だと思った時ときで、今のメイラン、は、仲間を捨てる、。やう言つ女なのぞ。」

龍湾「嘘だー！嘘だつー！メイラン様を、侮辱するな、ーーー！」

夏美「私は、‘事実を’ 言つたまでだ。」

龍湾「黙れっ！！’平和ボケの’、そして、正義すらしたワガバの団員に成り下がつた・・。

貴様に何がメイラン様の何が分かる？ー」と続け様に「お前の両親がそのワガバの下らない

‘正義’なんかの為に我ら広州に刃向かい！そして・・死んで行つたんだ！」

とも付け加えた。

夏美その龍湾のその言葉を聞き「・・・ワガバの’下らない正義’だと？！」

と繋け様に「お前にその言葉に似たような言葉を返させてもらひつよ
！お前等・・広州は‘汚い

連中’だ。己の私利欲の為に・・仲間を捨て・・そして、邪魔者は排除。

私達、橘家の本家、の人間は元々、ワカバに使えるのが使命、！私は・・・父さん達のは

‘意思を、継ぎ！そして・・己の道として定めた！－なのに・・貴様は父さん達を‘侮辱’

し、ワカバを・・・」そう言い再び戦闘態勢に入り「私達、‘ワカバの人間は’一人一人

‘己の使命’に誇りを持っている！その‘誇りを汚す者’は私が許さん！」

そして‘ワカバの文句は！－私に言えつ－－’と更に続けて‘他の

広州の連中も許せんが・・

玲龍湾！…貴様だけは、断じて許さん……この借りは倍にして返してやるよ…！」

そう言い龍湾に突進して行つた。

龍湾「後悔させてやるよ…！ 橘夏美…！」

そう言い夏美に突進して行つた。

愛蘭はその様子を只頭を抱えて呆れていた。

第24章。ワカバ対広州第2戦（後編）完。

第24章。ワカバ対広州第2戦（後編）（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うござります。

さて、次章ですが、ワカバ対広州ではなく、

龍湾と夏美の対立となります。

前にも述べさせてもらいましたが、ここしばらく？

ですがワカバと広州の戦い編が続く予定です。

ので、その辺はご承頂きたく思います。

それでは、次章も今章と同様にお楽しみ頂ければ

幸いです。

オマケ・・19?

雷外「・・チイ！あの龍湾つて男、余計な事、

してくれるぜ！」

雷龍「……雷外。姉者。大丈夫だろうか？」

雷外「……多分。大丈夫だろう。雷龍。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しく。」

第25章。玲龍湾対夏美。（前編）（前書き）

おせよ、いじめます。

今章では玲龍湾と夏美の対戦となります。

と同時に夏美の実の妹が出てきます。

第25章。玲龍灣対夏美。（前編）

すると、1人の少女が倉庫内に入ってきた。

長髪の黒髪そして・・オレンジ色のチャイナ服、青のデニムに青のカンフー靴を履いていた

少女である。その少女は、夏美の姿を発見しそして心配そうに・・。

「・・姉さん。」と呟いた。

セツヒの少女の名は橘有理夏美たちばななみつじの実の妹である。

彼女自身もワガバに属していた。

性格は常に姉思いで仲間思いで心優しい性格。そう、その性格は亡き母楓の性格にも

‘似ていた’。

ジン、有理に気づき「・・楓??」「と呟いた。

そう有理の姿はまるで楓とほぼそっくりになっていた。

そして、広州の連中を大体片付け終わったワカバのメンバーそして
オウガがジンの側に来て

オウガ「ジン。ありや・・楓じゃない。夏美の妹の有理だ。」

ジン其れを聞いてタバコを吸いながら「ああ・・。昔、夏美に良く甘えていたあの小さな

嬢ちゃんか。」

オウガ領き「そうだ。」

ジンフツと笑い「それにしても・・楓に似てきた。一瞬あいつかと思つたぜ。」

オウガも其れを聞いて苦笑いし「ああ。俺も・・久しぶりに会ったらそう思つてビックリ

したぜ。」

「…有理。」

オウガの目に映つたのは必死で姉が無事に戻る事を祈つてゐる有理の姿だつた。

一方夏美は、龍湾と対立し続けていた。

氣を丹田に集中させて一気に技を放つ。

龍灣「甘いわつ！！」

水を出した。

夏美軽く舌打し「こいつ・・・水使い、か。」

龍灣フツと笑い「そつそー俺は、水使い、一と言ひよつとも俺達玲
家は代々水使い！」

先祖代々からこの、能力、を受け継いだのぞ。」

と同時に「炎使いの拳法であるお前には、俺に勝てないよ」。

一方、その様子を見ていたワカバのメンバーの1人

「おいおい！あ・・あれじゃ・・なつさん。不利じゃねえか？？」

其れを聞いたもう1人のメンバー「大丈夫だつて！チエンワン。だつて・・

あの龍湾つて奴、夏姉ねえがもう1つの拳法受け継いでいる事を知らないんだ。」

チエンワンと呼ばれた男思い出して「ああ・・そうか！・・あれか！・・シユウワイ兄（に

い）！」

この男達はリヤン・シュウワトイリヤン・チョンワン。

この2人もワカバの団員である。

龍湾「我が水よ・・・。大波になり橘夏美を飲み込みそして壁にぶつける!!!」

そう言い放ち己の手から放たれた水が大波になりそして夏美に向かつて行つた。

龍湾笑いながら「メイラン様を馬鹿にした罪その波で思い知るがいい!!!」

雷外其れを見て「危ないっ……姉御つ……」

するとい、夏美左腕を叩き「拳法変換術！……！」

そして、炎の紋章から雷の紋章へと変化して行き「雷風拳……雷風
防御波……！」

龍湾「な……何つ？……ばつ……馬鹿な……！」

夏美の体は雷風の防御でその場をしのいだ。

だが、夏美はあまりにもその大波の威力がすごかつた為持ちこたえられずに壁に激突

してしまつ。

雷外「姉御つ！」

雷龍「姉者つ……」

有理その様子を見てすばやく夏美の所に駆け込んで「姉さんつ……」

そのぶつかつた壁から夏美が出てきて「……だつ、大丈夫だ。有理。

「

と心配そうな顔をして自分を見ていた妹の頭を撫でた。

有理その様子を見て一先ず安心する。

そして、夏美「有理。まだ、終わっちゃ居ない、此処は危険だ。さつきの場所に戻つてろ。」

有理「・・・でも。」

夏美フツと笑い「、大丈夫だ」。有理。姉さんを信じろ。必ず、戻るからさ。」

そして、服部、「ナンも夏美の側に行き「夏美っ！…」

夏美「平さんに「ナン。」

服部「自分大丈夫か？」

夏美領さ「ええ。大丈夫ですよ。平さん。」心配なく」と微笑んだ。

「ナン「本當か？夏美。」

夏美「・・あ。」と続け様に「コナン。頼みがある。」

此処にはジンとウォッカも居る為あえて夏美は「コナンの正体を新一
だって知りつつも

あえて「コナン」と呼んでいる。

「コナン」「・・ん?」

夏美有理を見て「平さんと共に悪いが・・私といこうつの戦いが終わ
るまで妹を頼む。」

「ナンニヤ」と笑い、「お、任せおけ！」

そしてコナン服部を見て「そういう事だ。服部。」

服部頷き「お、任しておきやーー」と続け様に「けど・・無茶はあかんで?..」

夏美再度フツと笑い「善処しますよ。」

そう言い有理の頭を軽くポンと叩きその場を後に再び龍灣の所に行き「ヤリと笑いながら

タバコに火を灯し「、残念だったね。、私しあの拳法は、炎、だけでは無かつたんだな。」

と続け様に「‘雷’の拳法使いでもあるんだよ。」

龍灣其れを聞いて軽く舌打をした。

第25章。玲龍湾対夏美。（前編）完。

第25章。玲龍灣対夏美。（前編）（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うござります。

さて、次章は今章の（後編）となります。

次章もどうぞよろしくお願ひ致します。

オマケ。

有理「・・姉さん。本当に大丈夫かな？」

服部「大丈夫やつて！・姉ちゃんを信じな。」

と微笑む。

有理「そうですね。平次兄さん。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しくお願ひします。」

第26章。玲龍灣対夏美。（後編。）（前書き）

今章は前章の後編です。

第26章。玲龍湾対夏美。（後編。）

あれから、龍湾は夏美とぶつかり合っていた。

龍湾「我が水よ！我の命に従い水の槍とかし、夏美を突き刺せ！」

そう言い水は槍化とし夏美に襲い掛かる。

夏美交わし「雷風拳！雷風連弾拳！－！」

夏美から放った拳は雷を纏い龍湾を迎撃つ。

その様子を見たオウガ「・まるで、大樹に、そっくり、だな。」

と呟いた。

すると服部「なあ・・オウガハン。」

オウガ「ん?」

服部「何で・・夏美は」両親の拳法両方受け継いたんや?」

オウガ「ああ。あれはね・・平次君。あいつの、あいつ自身の意思
’でもあるんだ。」

本来なら・・妹にもつて言つ考へもあつたんだろうが・・。その時
は夏美しか

大樹達の側には居なかつたし、夏美自身も・・・有理には受け継がせたくない

思つたんだらう。あまりにも、危険、と感じたからな。」

服部其れを聞いて黙り込んで夏美へと田をやつた。

メイランも愛蘭と共に只見ていた。

と同時に愛蘭「！」のままだと・・・弟には悪いけど・・・夏美様には

「勝てないわ。」と呟いた。

すると、今度は龍湾水を鎖に変化させ夏美に放つた。

夏美其れも交わすがあえなく捕まりそのまま床に叩き落されてしまう。

夏美「キヤアアー！」

と同時に床にもろに討たれたのか背中に痛みが走る。

オウガその様子を見て「もう良いッ！…止めろッ！…夏美ッ！…！」

夏美痛みをこらえて立ち上がり首を横に振り「兄様。あに此處で…。止めたら

私・・・父と母に顔向け出来ません。」と続け様に微笑んで「大丈夫です。そろそろ蹴りつけ

ますから。申し訳ありませんが其処今しばらく待つていてください。

「

其れを聞いてオウガ「・・・だが。」

ジン、オウガの右肩をポンと軽く叩き「あいつの好きにさせちゃね。オウガ。」

オウガ「・・・ジン。」

そして、ジン夏美を見て「、くたばつちまつたり、許されねえぜ？」

といつ。

夏美フツと笑い、「ちう簡単」、くたばらない、わ。安心してよ。」

と言い再び龍湾の所に向かい直り「先ほじは、よくもやつてくれたわね。」

と続け様に「この借りは、倍にして返してあげるよ。」

「龍湾フンと笑い「もう一度、同じ田、二合わせせんよ。」

そう言い再び水の鎖を放つた。

夏美「雷風拳！雷風分身術！！」

すると、夏見の分身が現れた。

龍湾「な・・何？！」

と同時に軽く舌打し、橘夏美の分身術はちょっと厄介だからな。さて・・・どうするか？

と心の中で呟いた。

と同時に心に、迷い、が現れたのか考え込み始めた。

そして、夏美、龍湾の隙を見つけて龍湾の上に飛んで「隙ありつ！
！雷風拳！雷風空中

脚！！」と空中で蹴りを放つた其れが見事龍湾に届いた。

そして、龍湾氣を失つた。

そして、夏美床にストップ降り立つた。

ワカバのメンバー其れを見て一斉に「ヤリイーーー！」と喜んだ。

夏美フツと笑い「・・ビ、ビ! やら、蹴り付いた様、だ・・。」

そう言い氣を失つた。

有理「ね、姉さんツーー。」

慌てて夏美に駆け寄る。

雷龍も側により「」心配なく。姉者は、氣を失われてゐる、だけです。おそらく、

広州のメンバーの他メンバーとも前に戦つたのでそれのお疲れが一気に出たと思われます。」

有理其れを聞いて「本当？雷龍？」

雷龍頷いた。

と同時にオウガ辺りを見渡し「おや・・いつの間にか。奴等も引き上げたみたいだな。」

と続け様に「よし！夏美の戦いも終わった事だし！撤退だつ！！」

と続け様に「雷龍。」

雷龍「ハツ！オウガ様！」

オウガ「夏美をこいつの愛車中に連れて行つてやれ。」

雷龍「畏まりました。オウガ様。」

そう言い夏美を連れて行こうとしたその時「オウガ。」

オウガ、ジンを見て「どうした?ジン。」

ジン「こつには悪いが・・そいつ俺に運ばせてもうえねえか?」

雷龍オウガを見て、オウガ「お前の好きにすれば良い。」

雷龍、ジンの所に来て「姉者をよろしくお願ひいたします。」

と夏美をジンに引渡しそして・・ジンはウォッカと共に夏美の愛車である青のベンツに

連れて行つた。

とその後ワカバのメンバーはアジトへ。

平次とコナン達は阿笠博士の家に戻つて行つた。

此れで・・一先ず広州との戦は終わった。

に見えたが、此れから起つる事を彼女達は知らない。

第26章。玲龍湾対夏美。（後編。）完。

第26章。玲龍灣対夏美。（後編。）（後書き）

今章もお付き合いで下さり有難い「」やることあります。

さて、次章は、夏美達が阿笠家に戻った所を

書く予定です。

次章もお付き合いで下されば幸いです。

オマケ。

「ナントカ」とため息を付き、「慌しかったな。」

服部「まあ・・ええやんけーとつあえず無事やつた

んやか「」。

「ナントカ」「まあ・・ええやんけーとつあえず無事やつた

と続け様に「次章もどうぞよろしくお願いします!」

第27章。夏美、阿笠家で田代める。（前書き）

おはようございます。

今章では夏美達が阿笠家に戻つて来ます。

第27章。夏美、阿笠家で目覚める。

あれから、龍湾との戦いを終えた後夏美は倉庫の中で氣を失つて阿笠家のソファーに

寝そべつていた。

そして・・。

夏美「・・う、ん。」

夏美曰が覚める。

すると、ライカ夏美の所に駆け寄り「気が付いたか?相棒。」

夏美、ライカを見て「・・ラ、ライカ?」

ライカ領き「ああ。私だよ。」

夏美、辺りを見渡し「此処は・・。」

「ナン」「博士ん家だ。」

夏美コナンから其れを聞いてソファーから起き上がり「そつ、か。
あれから龍湾との

戦いの後私しゃあ氣失っていたんだな。」

すると、哀麦茶を台所から持ってきて「はい。夏美さん。」

夏美「ああ。悪いね。哀ちゃん。」と哀から麦茶を受け取りライカ達を見て

「あれ？皆は良いのかい？」

「ナン領き「俺達はやつも夏美と同じように麦茶をもらひたからよ。

」

夏美「そつか。」と言い麦茶を飲みながらタバコに火を灯し「んで
？誰が・・・・・。

私をあれから此処に？？」

其れを聞いて服部「橘の姉ひやんを運転まで連れて行ったのは・・・
お前の彼氏であるジン。せんじん

んでもつて・・此処まで姉ひやんの愛車を運転してたのはあの雷
龍つて奴やな。」

夏美「・・・んひ。」

と続け様に心の中で。

じゃ・・今度再び再会した時こでも今回の事お礼言わなきゃいけないわね。

ジン。

と咳き更に続けて「それはそいつと、平さん。あれからひさの連中どうしました？」

服部「あれから・・ワカバの連中はアジトへ戻つたで？もちろん。オウガハンもな。

後・・お前の妹の有理もそして・・雷龍と雷明つて奴も戻つたで。」

コナン「んで。戻る前に雷龍が「目が覚めたら姉者によるしくと共にあまり」無理なさうな

「よしお伝えください。」と言つていいたぜ。」

夏美「ハハハハツ。」と苦笑いし「あいつ何処まで、硬まじめ、なんだ。」

其れを聞いてライカタバコに火を灯し「それだけ・・お前さんが、大切、で

‘心配、なんだろ。」

其れを聞いて夏美は只フツと笑った。

そして、ミレイ「んじゃー夏さんも目覚めた事だし。ちょっと気晴らしに散歩行って

くるわ。」と言い玄関に向かつた。

その時、哀「ミレイさん。くれぐれも、氣をつけてね」。多分、彼等まだ・・・

下手すればこの町に、潜んでいる、みたいだから。」

ミレイへ頷き「有難う。哀。」

と同時に「ナン」「何かあつたら・・すぐ連絡しやうよ。」

ミレイ再び頷き「じやね。」

やつは阿笠家を出た。

すると、いつの間にか雪が降っていた。

ミレイ「・・雪か。 いつなるんだつたら、傘持つてくれればよかつたわね。」

そう言ひ歩き始めた。

そして、電柱の後ろから女の影が見えた。

「クス。‘赤龍’。見つけ。」

と続け様に「今度こそ・・メイラン様の元に。」

とミレイの姿を見て言った。

一方、此処は再び阿笠家。

急に夏美、「何かを感じ取ったのか、窓を見始めた。

第27章。夏美、阿笠家で目覚める。完。

第27章。夏美、阿笠家で目覚める。（後書き）

今章もお付き合いで下さり有難うござります。

さて、次章は・・//レイを中心として書かせて頂きたいと思います。

次章も今章と同様にお付き合いで下されば幸いです。

オマケ。

ライカ「んまあ・・あれだ。相棒が無事で

何よつだよ。」

夏美「一瞬じうなるかと思つたけどな。」

雷外「でも、夏美の姉御無茶しそぎだよ。」

夏美笑いながら「そうか？」

雷外頭抱えて「そつだよ。」と苦笑い。

コナン横目で「ハハハッ。」

と続け様に「次章もどうぞよろしくお願ひします！」

第28章。ミレイに迫る広州のメンバー。（前書き）

今章では、ミレイが中心となります。

第28章。ミレイに迫る広州のメンバー。

あれから、ミレイは夏美が目が覚めて安堵したのか散歩をしに阿笠家を出た。

外は雪が降っていた。

ミレイ「・・・雪か。」と呟きそして・・・以前見た、夢を、思い出した。

ジン。

‘平和ボケも終りだ。’もうじき、夢の偽りの世界が終わり、お前自身が再び

お前の本当の世界に戻る時が来た’。

さあ・・・迎えに来たぜ? ミレイ。

ミレイその事思い出したら固まつた。

そして・・。

心の中で、私は、‘どちら側の人間’なんだろうね?

雪音姉さん。

そして、ミレイの頭の中で木靈する、闇の声、。

オマエハ、ヤミ

オマエハ、ショセソモテテイキルコトハテキナイ。

,

ヤミヘシマジニ、ヤキロノ。

ヤミノナカテイキ、ヤミトトモニアム。

ソレガ、オマエノサダメ。

ソレガ、オマエノウンメイ。

ソレハ、カワラナイ。

コンゴトモソウ。

オモテデイキルヨリ。ヤミデイキタホウガオマエノタメ。

ドウセオマエハ、‘イズレカナラズジンノテニヨリヤミニシレモド
サレル。’

ミレイタバコに火を灯し「……闇の人間か。」とも呟いた。

ねえ・・・。

姉さん、私・・・。

これからどうしたら良いの??

教えてよ?

ねえ・・。

お願ひだから・・。

答えが自分で、見つからないの、。

すると、1人の女が「貴女は所詮、闇の人間、表では、生きられな
いわ。」

と笑いながら言った。

ミレイ「誰つ？！」

すると、電柱の所から1人の女が出て来て「久しぶりね。とも言つ
べきかしら？」

赤龍事、龍崎ミレイ。」とクスリ。

ミレイその女を見て「あなたは、確か広州の幹部の一人。

王明杏

オウ・メイアン

明杏「ご名答。

ミレイタバコを吸いながら「何故・・あなたが此処に?まさか?」

明杏再びクスと笑い「・・そう。 そのまさかよ。 メイラン様の『命
により貴女を

捕まえに来たの。」

其れを聞いてミレイ頭をかきながら呆れて「相変わらず、しつこい
女ね。あんたん所の

ボスは。」

明杏「そう?でもね。貴女は我々広州にとつて、必要な人材、ジンから逃れた今

横取りする絶好の機会だと思つてね。」

ミレイタバコの煙を出しながら「んで?もし···断ればどうする?」
トニヤリ。

明杏フウとため息を付き「手荒なまねは出来るだけ避けたいのよ。
無謀な、戦いも、

好きじゃないしね。」

ミレイタバコを加え直してフジと笑い「そうかい？あんた等広州は
‘暴れ好き’

と聞いていたがね。」

其れを聞いて明杏再びクスと笑い「それは、一部の連中、だけど、
私は基本的に

‘暴れ好きでは’ないわ。」と続け様に「さあ・・返事を聞かせて
もらおうかしら？？」

ミレイ再びフジと笑い「‘断る’…もし、あんた等の所に行くんだ
つたら、もうしばらぐ

この表の世界で暮らすわ！」と更に続けて「もしかしたら気が変わり……兄さん、の所

に、戻るかも、しれないからね。」そう言い、「じゃね。私はわ、基本的にプライベートは

‘邪魔されたくないのね。’

そう言い明杏から離れた。

すると、明杏「ミーハイッ！…貴女はきっと、我々に付かなかつた事、後悔すると思つわー。」

セーハイに向かつて叫びその場を後にした。

ミレイその事を聞き「……後悔、か。むしろ、あんた等に付いたら私はもつと

‘後悔した、だらうや。」そう呟き再び外を散歩していた。

そして、路地裏入ったその時

ミレイ何かを発見したのか「！－！」と驚いた。

第28章。ミレイに迫る広州のメンバー。完。

第28章。ミレイに迫る広州のメンバー。（後書き）

今章もお付き合いで下さり有難うござります。

さて、次章もミレイが中心となる予定です。

それでは、次章も今章と同様にお付き合いで下されば

幸いです。

第29章。ミレーテ黒のポルシH。（前書き）

おせむりじゅごます。

今章もナリノレト中心となります。

第29章。ミレイと黒のポルシェ。

あれから、広州の女幹部である王明杏と遭遇し何とか切り抜けたミレイ。

そして、その後とある路地裏に入った。

その時ミレイが驚き彼女が曰いたのが何と、黒のポルシェだった。

「ミレイ……く、黒のポルシェ。」

そつ言い黒のポルシェの所に少しずつ歩いて行き車体番号を見た。

ミレイ其れを見て驚いた。

何と・・案の定!!レインヒートは悪い事だった。

356A。

ジンの愛車だった。

ミレー

まさか?!

ジ、ジン兄やさがい、レの近くで倒れるの?!

そして車の中を見た。

ミレイハアとため息付き「・・良かつた。誰も居ないわね。
」

と駆きその場を素早く後にした。

そして、ジン、ウォッカと共に黒のポルシェに戻つて来た。

ジンタバコを吸いながら「ん？」

と続け様に「車の周り雪がやけに荒れてるな。
」

ウォッカ「きっと、物好きな奴が来て見てたんじゃないですかい？」

兄貴の車珍しいから・・・。」

ジンニヤリと笑い「フン。ドイツのアマガエルも偉くなつたもんだ。

」

そして、黒のポルシェにウォッカ共ども乗り込もうとしたその時

「ん?」

黒のポルシェの所に小さな赤い龍のイヤリングが落ちていて其れを
ジン見つけて拾い

ジン

小さい赤い龍のイヤリング・・・？

ウォッカ「兄貴?ビうじたんですね?」

ジンそのイヤリングを「ホールの右ポケットにしまこいやつと笑へ」
「落し物さ」。

そう言い黒のポルシェに今度こそ乗り込みその場を後にした。

ジン再び「ヤリと笑い・・。

まさか。お前自ら懇々、出向いてくれるとほな、・・・。

「大歓迎するぜ」？

ミレイ。

一方、ミレイはあれから阿笠家に戻りお手洗いに行き洗面所で手を洗つていて

鏡を見た所「あら？」

左耳についていたイヤリングがない事に気づく。

「……どうしたんだ君。」

と続け様に「まさか？！　あの時に？！」「

ど・・・・どうも？！

も・・もし、あれがジン兄さんに拾われたら……。

完全に、自分の場所、教えてくるようなものじゃない！！！

と焦った。

一方、リビングでは、コナン達が戻つて居てそして蘭と和葉も来て
いた。

「ナノン領き」「ああ。あれから結構時間たつてるぜ??.」

まさか?!

もう、彼に??

すると、コナン話題を変えて蘭達に「所で、蘭姉ちゃん達はどうしたの?」

蘭「あ、実はね・・コナン君。」

何かの話をし始める。

そして「コナン」「え？！ワ・・・ワカバに入つた？！」

蘭領き「うん。」

和葉「せや。けど・・・高校生という事で準メンバーって形やけどな。」

コナン夏美の所に行き小声で「おい。どうなつてるんだよ？何で蘭達が？？」

夏美小声換えして「んな事言われても・・私しゃあだつて、相棒から聞いて分かつたんだ

からな。」と苦笑い。

と続け様に「蘭さんの空手と和葉さんの合氣道が兄様の田に留まりたらしき・・・。」

コナン頭抱えてハアとため息付いた。

すると、和葉「コナン君? どないかしたんか?」

コナン苦笑いをしながら首を横に振り「ううん。何でもないよ。和葉姉ちやん。

只・・考え方していただけ。」

和葉「ふ〜ん。」と続け様に夏美とライカを見て「ちゅう詫や。此れからよろしく頼むで?」

夏美ちやんに「ライカちゃん。」

夏美「…」解致しました。和葉ちゃん。」

ライカ「ええ。」ヒーロー。

あいと、夏美

けど・・・。

蘭さんはともかく、もし・・・和葉さんに何かあつたら・・・

刑事部長に・・・。

と内心焦っていた。

と続け様に服部「ああ・・・。もう一つ言い忘れていたわ。俺もワ力
バの準メンバーに

なつたから。夏美よろしくうな。」と笑いながら言った。

夏美「へ?一平さんもですか?!

服部「おひ。」と続け様に「大丈夫!親父にも和葉のおひちゃんにも
毛利のおひちゃんにも

話したいたさかい。3人とも容認してくれたで。」

夏美「そ・・そつですか。」

と苦笑いした。

そして、ミレイお手洗いから浮かない顔をして出て來た。

第29章。ミレイと黒のポルシェ。完。

第29章。//レイと黒のポルシH。（後書き）

今章もお付き合いでトモツ有難うございました。

そして、次章は「ナン達と//レイのやり取りが主になると思こます。

其れでは、次章も今章と同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ・・。

哀「あれから・・//レイさん。様子おかしいわね。」

「ナン」「ああ。」

と同時にあいつ何かあつたのか？

と続け様に「次章もどうぞ宜しくお願ひします!」

第30章。//ノードとフレーム（前編）

今章も//ノードが中心となります。

第30章。ミレイと魔女

あれから、ミレイはお手洗いから出て来た。

「ナンミレイを見て、大丈夫か？」

ミレイ「ん？ ああ。平気だ。」

と続け様に服部「なあ・・・龍崎の姉ちゃん。」

ミレイ「何？」

服部「何で、ジンちゅう男から逃げ出したん？」

コナン其れを聞いて「お・・おご。服部。」と小声でなだめた。

ミレイフシヒ笑いコナンに向けて〇〇~~ス~~しなこどとロパクをする。

そして、ミレイ「いこよ。服部君話すよ。実はね、私がまだ、闇から抜けていない、頃

とある日に出かけていたんだ。その時ことある倉庫に居てねその時にジン兄さん達の

取引を目撃してしまったんだ。」

服部「んで? その時の取引内容と相手は? ?」

ミレイ「取引内容は残念ながら覚えていないんだけど・・相手なら覚えてた。」

服部「さよか。で? その相手は??」

ミレイタバコ再び火を灯し「私の、姉貴分だった、宇津川雪音^{うずかわゆきね}。」

夏美「な・・宇津川雪音だと?..」

ミレイ頷き「夏さん。知ってるの?」

夏美「しつ、知っているの何も・・あの女は広州の末端だった女だよ。」

ミレイ其れを聞いて驚き「嘘ツ……雪音姉さんが？！何で？！」

其れを聞いてライカ「あれ？//ミレイお前さん知らないのか？」

ミレイ頷いた。

と続け様に「だって……雪音姉さん。そんな事一言も言つていなかつたんだもの。」

夏美「いや……、言いたくても、あいつの場合、言えなかつたのさ
」。

ミレイ「どうして？ 夏さん？」

夏美も再びタバコに火を灯し「あいつの」。心配掛けさせたくないと思ふ。

‘言えなかつたんだらう’。あいつ自身だつて好きで広州の末端になつたわけじやないから

ね。」と続け様にミレイの所に行き小さな小包を出した。

ミレイ「此れは？」

夏美「お前さんの姉貴分からのプレゼントだ。お前さんが、成人した時に、渡すつもり

だつたんだろ？」。そう言つてミレイに小さな小包を渡した。

ミレイ 夏美から小さい小包を受け取り中を見た。

ミレイ「うひ、此れは・・・」

小さな青のダイヤモンドのネックレスが入っていた。

夏美タバコ吸いながら「雪音の奴から聞いたよ。それ・・・お前さんがまだ中学生の頃か?

雪音と一緒に宝石店を見に行っていた時にお前さんが其れを食い入る様に見ていたつてな。

その時に、約束したんだろ?お前さんが成人になった時にプレゼントすると。

まあ、あこつ自身から手渡すと言つ願つは叶わなかつたけどね。」

ミレイ黙つて夏美の話を聞いていた。そして、手紙が入つていて
事に気づき

ミレイの手紙を開けた。

そして・・その内容にミレイ思わず驚き「そ・・・そんなん。」

手紙の内容。

親愛なる私の可愛い妹ミレイ。

大変に遅くなつてごめんね。此れは成人祝いのプレゼントです。

今は、広州の監視下にありながらこの手紙を書いています。

実はね、私は貴女には言えなかつた事があつたの。

此れは、多分いづれ分かると思うけど・・・

私は、広州の末端です。

貴女に言えなかつた訳それは・・・昔広州の依頼をされ尚且つ今でも
広州に追われている

貴女に、嫌われたくなかった、事とそして、貴女と今後とも、姉妹
分、であり続けて

居たかつたつて事。それだけだったの。

本当は、広州を抜け出したかった。だけど、私の恋人である日向真樹

と実の姉である宇津川真紀を人質に取られてしまっていた為に

広州に留まる事しか出来なかつたの。

そして、あの時のジン達の取引現場に行くよつに命じられたの。メ
イラン様の命令は

‘絶対、刃向かえばどうなるか分からぬ’

恋人と姉を救う為にも私はこの命令に従い続けるしかなかつた。

相手がジンだという事は多分、死、が待つてゐる事。

其れはすでに覚悟は決めていた。

だけど・・貴女に会えなくなるのはとても寂しい。

と同時にあの取引後・・・多分私はもう、この店へこまぬないでし
ょ。

だから、昔からお世話になつて居る友達の夏美に此れを託します。

最後に、マレイ。とても楽しい時間を有難う。

姉さん、貴女と出会えてとても嬉しかったし、貴女と過ごした時間
は私にとって

とても大事な宝物よ。これからも体に気をつけて過ごしてね。

最後になるけど・・・。

元氣で。

雪音。

その手紙を読み終えた頃には、レイのタバコもかなり短くなり、レイは無言のまま

携帯灰皿にタバコを揉み消しそして・・・・いつの間にか、涙、が出ていた。

哀「・・・」ノレトイセヨ。

そして、ミノイがくッと両膝を突き、「・・・雪音姉さん。姉さん。姉さあああああん!!」

と続け様に「どうしてだ？！何で？！あのとても優しかった雪音姉さん、死ななきや、

ならんッ？！－！何でだああああああ－－－－－！」と呟んだ。

夏美「後これは、言いくらいんだが雪音の奴がジンに殺された後…すでに、もう

雪音の姉と恋人は広州の奴等に運が悪い事に、始末されてしまつて
いた、んだ。」

ミレイ「な・・・・！其れ本当？…夏さん。」

夏美頷き「ああ。実は、私しゃあも氣になつたつてうちの情報部に
調べるよう依頼したん

だ。」と続け様に「そしたら…末端の場合広州の連中は、捨て
駒」と言ひ考へが

あるからな。その、捨て駒、を利用し終わった時に、人質、もむつ
‘用済み’

つて訳なんだよ。」

其れを聞いて蘭「・・酷い。」

和葉も黙つて驚いていた。

其れはコナン達も同様だった。

そして、ライカ「広州の連中は・・そう言つ、連中、なんですよ。」

と続け様に「広州では、捨て駒、にされたくなかったら・・幹部
に上るしか

方法はないんですよ。まあ、Hリート組みの話だけに限定されるけ
どね・・。」

ミレイその手紙を握り締めて「・・広州め！・・絶対に許さない！・・
！私の手で・・・・・。

姉さんの仇を！――！」

と怒りの顔になっていた。

其れを見て夏美「・・・ミレイ。お前さんまさか？」

と呟いた。

第30章。ミレイと露面。完。

第30章。ミレイと雪原。（後書き）

今章もお付き合いで下さり有難うござります。

さて、次章はミレイとジンの兄貴様が再会する

所を書かせて頂く予定となつています。

其れでは、次章も今章と同様にお楽しみ頂ければ

幸いです。

オマケ

哀「・・・ミレイさん。大丈夫?」

ミレイ「うん。何とかね。有難う哀。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しく!」

第31章。ミレイ自身へ戻る。（前書き）

連続ですみません。

今章もミレイ中心です（笑・・・）

と同時に赤井ちゃんと軽く遭遇します。

第3-1章。ミレイ自宅へ戻る。

あれから、夏美から姉貴分の手紙を受け取ったミレイ。そして・・密かに姉貴分と実の兄の

仇討を決意する。

ミレイ時計を見て夕方の5時過ぎだと確認し「・・んじゃ。そろそろお暇するか。

明日大学だしね。」

哀「一人で平気??ミレイさん?」

ミレイ頷き「まあ・・何とか大丈夫だよ。哀。」と続け様に「あんたも、‘氣をつけな’? ?

兄さん未だにあなたの事も探しているみたいだから。」

哀「ええ。 // レイさんも髪をつけて。」

ミレイフジと笑い「ああ。」と続け様に「じゃ・・私は此れでお暇
あわせむづくよ。」

博士。長い間悪かったね。」

阿笠「何。 かまわんよ。」

「ナン」「何があつたらメールするんだぜ?いいな?」

ミレイ「OKー。」

そう言い夏美達に軽く挨拶をし阿笠家を出て自宅へと向かった。

と同時に夏美「所で、平さん方? 大阪にお戻りにならなくていいんですか??」

服部「うちの高校、しばらく先生方が長期出張で今月いっぱい休みなんねん。

だから、しばらく此処に厄介になるちゅう訳や。」

夏美「…成る程。で?」両親はこの事ご存知で?」

服部「んああ。夏美ん所行くつちゅうつたら親父もおかんも許可してくれたで。」

夏美「そ、そいつですか。」

と続け様に和葉「なあ。夏美ちゃん。」

夏美「はい。何でしょう? 和葉さん。」

和葉「ひょつとして、アジトに戻るんか?」

夏美頷き「ええ。アジト戻つてそして血圧に戻れたら戻りつと思つ
んですが、

どうしましたか?」

和葉「いや・・オウガ様にならくなじ」挨拶もまだ出来てへんから
挨拶しようと思つてな。」

夏美「そうですか。なら・・此れから行きます? アジトにはライカ
が事前に連絡いれた

みたいですし・・。」

和葉「うん。宜しゅう頼むわ。」と続け様に「平次。あんたも行く
んやで?」

服部「分かつてゐがな。」と続け様に「夏美。自宅に戻る予定つてわつわ言つたやうへ。」

夏美「は、はー。」

服部「何なり・・急で悪いんやけビ俺達じぱりへの間泊めてくれんかな?」

夏美「べ・・別にかまこませんけど?」

服部「おおそれじや・・日が暮れそいつかあひだりか。」

和葉「そやな。」と続け様に「蘭ちやんも行くやうへ。」

蘭「うん。」と続け様にコナンに「『めんね。コナン君私これから
ワカバのアジトに行つて来

るね。」

コナン「うん。分かつた。気をつけてね。蘭姉ちゃん。」

蘭「うん。」と続け様に「あ、今日お父さん麻雀仲間と小旅行に行
つてるから冷蔵庫に

一応たらこスパゲッティ作つといたから其れ食べてね。」

コナン「はい。」

と続け様に夏美コナンの所によりつ小声で「という事で、悪いな。新。

「ナン小声換えして、何、構わなねえよ。」と続け様に「くれぐれ
も蘭達の事頼むぜ？」

夏美領を「また、近い内にメール入れる。」

「ナン領いた。」

そして、ライカ「おーい！相棒！そろそろ戻るついでー。」

夏美「ああ。今行くよ！相棒！」

と続け様に「ナンに「じやな。」

「ナノ、『おひこ』」

そして奥に軽く挨拶をしたとして博士に一礼しライカ達と共に河笠家を出た。

もちろん、服部達も軽く博士達に挨拶を済ませた。

一方、ミレイは皿せんに向けて歩いていた。

「あひこ、『おひこ』」

今度は黒の長い車を直撃する。

あれはもしかして、黒のシボレー。

その持ち主は多分昔ジン兄さん聞いた事がある

赤井秀一の車。

と呟つことば・・多分彼も来ているのね。

そつ心の中で眩き閑わらない方が良いと感じたのかその場を素早く
後にする。

一方、赤井は車内の中で運転席の窓を開けミレイを確認していた。

赤井「・・龍崎ミレイか。」と呟いた。

そして、ミレイ自身があるマンションに着きの階までエレベーターで行き着き自宅のドアに

鍵を差込開けた。

と同時に洗面所に行き手洗い等を済ませソファーに座り再びタバコに火を灯し

「今週は、色々と、あり過ぎたわね。」と呟いた。

そして、ソファーから立ち上がり窓を見て「まだ、雪、降っているのね。」

「雪は・・・嫌な場面、も思いで出でてしまつ。」とも呟きソファーの近くにあるテーブル

の上にある灰皿にタバコを消し「それで、明日の大学の支度でもするかな。」

そう言い自分の部屋に戻った。

その様子を一人のブロンド髪の女が見ていた。

そして女クスと笑い「ミレイ。自宅に戻ってきたみたいよ・ジン。」

と電話で報告していた。

ジン「そうか。」苦労だったな。ベルモット。」

と続け様に「あいつ何してん?」

ベルモット「明日の大学の支度しているみたい。何せ・・彼女一応
大学生だから。」

と続け様に「どうするの?」

ジンニヤツと笑い「まだ、しばらぐの間、様子見だ。」

ベルモット「了解。」

そつ言い携帯を切った。

と同時に「さて、貴女は一体この、追いかけっこ、に耐えられるか
じつっ。」

楽しみね~!!レバ。

一方、ミレイは何か、不穏な気配、を感じたのか。

大学の支度を終えた後急いでリビングに戻り窓を見た。

ミレイ「んな？！」

あ・・あのブロンド髪？！

ま・・まさか？！

ベツ、ベルモット姉さん？！

と驚いていた。

と同時に。

不味いわね。ベルモット姉さんまで動いていたなんて。。

びつめら、あまり、良くない、展開が待受けているような

そして「あああーもうー明日ー限から3限までだつつのーーーん
な事考えていたら

切が無い!! シャワー浴びてタバコ吸つて寝よつツーーー」

そう言こシャワー室に入りシャワーを浴びタバコを吸つて灰皿にタ

バコを消し

寝室に入りベットの中入つて寝た。

そして、再びミレイに、悪夢、が忍び寄る。

第31章。ミレイ自宅へ戻る。完。

第3-1章。ミレイ自身もく戾る。（後書き）

今章もお付き合いで下さり有難うござります。

さて、次章は、多分ワカバを書く予定でいます。

次章も今章同様にお付き合いで下されば幸いです。

オマケ。

ミレイ「…なんかやな予感するな。」

ニ「だ・・大丈夫ですか…ミレイさん。」

ミレイ「だ、だつてわ・・。あのベルモット姉さんも

動き始めたんだよ？」

ニ「…そっ、そうですね。汗」

と続け様に「じ・・次章もどうぞ宜しくお願ひ致しま

す！」（一礼）

ベルモットその様子をクスと笑い見ていた。

第32章。ワカバのアジト。（前書き）

おはようございます。

今章では主にワカバが中心となります。

第32章。ワカバのアジト。

此処は、米花町にある。ワカバのアジト。

蘭達をワカバの準メンバーとして受け入れてそして連れて来た夏美とライカは

オウガの部屋に蘭達を連れて行った。

オウガ、蘭達を見て「この度は懇々ご協力感謝する。そして、君達をワカバの一員として

受け入れる事が出来てとても嬉しく思つ。まあ、俺はボスだが呼び方は自由でかまわんよ。」

と微笑んだ。

すると、蘭一礼し「此方こそ今後とも宜しくお願ひします。オウガ様。」

そして和葉と平次も一礼する。

オウガ再び微笑みながら「いや、此方こそ宜しく頼むよ。」と続け
様に

「君達の場合、まだ高校生と言つ事もあり、学業優先でかまわんか
ら。

仕事も出来る範囲で構わないよ。」と更に続けて「で?早速配属な
んだが、蘭さんは

夏美達同様此方のアジトに所属してもらおつ。

平次「んで?俺等は?」

オウガ「君達は、大阪にもうちの支部があるから其処に配属しても
いいつ。

頻繁に此方に来てもうつけにも行かんからな。交通費等馬鹿に出
来んから。」

と苦笑い。

平次「了解した。でも、此処にも一応、配属、とさせてくれへんか
な?」

俺、あのメガネのボウズにもたまに会つし……。」

オウガ領き「ああ。分かった。だが、基本的に君達は大阪支部配属
という事で

宜しく頼むよ。」

平次達頷いた。

そして、オウガ夏美達を見て「まあ・・そういう事だ。宜しく頼む。
夏美、ライカ。」

夏美領き「了解いたしました。兄様。」

ライカも同様に頷いた。

と続け様に「よし！解散！また何かあつたら連絡くれ。」

と同時に蘭達を見て「今日は、お疲れの所懃々挨拶しに来てくれて有難う。

夏美の家がこの近くだと思つから今日の所は夏美に休ませてもうつてくれ。」

と続け様に夏美を再び見て「そう言ひ事だ。すまんな。夏美。」

夏美頷き「構いませんよ。兄様。」と続け様に「平さんにも既に頼まれていましたから。」

オウガ「そつか。」

そして、夏美ライカを見て「相棒も来るか？」

ライカ「んああ。 そうさせてもいいつよ。」

そして、蘭達を連れてオウガに一礼しアジトから夏美の自宅へと向かつた。

第32章。ワカバのアジト。完。

第32章。ワカバのアジト。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は再びミレイを中心には書かせて頂く予定

です。多分、再び、夢の話、になると思います。

次章も今章と同様にお付き合い下されば幸いです。

オマケ。

雷外「ワカバもにぎやかになつたね」。

ライフェイ「そだな」。

と続け様に「次章もどうぞ宜しくな！」

第33章。ミレーの‘闇の夢再び’。（前書き）

今章は、再びミレーに‘闇の夢’が迫つて来ます。

第33章。ミレイの、闇の夢再び。

一方、ミレイは自宅に戻りあれからベットで寝ていた。

そして、再び‘夢を見た’。

外は、また雪。

たまたま大学の友達と共に帰宅途中だった。

そして、対抗歩道からジンが歩いて来た。

ミレイその様子を気づかない振りをしながら急いで友達と共にその場を後にじよつ

とすると、既に友達はミレイの周囲には居なくミレイが只一人だった。

そして、二つの間にか路地裏に追い込まれていた。

ミレイはロボとの場から逃げようとした。

が、「やつと、会えたな」。ミレイ。

ジンの声がしてその場から連れ去られた。

そして、ミレイベットから勢い良く起き上がった。

ミレイ頭カリつとかじて「なんつづ夢だ。」そして「うう」と最も近そんな、夢、

ぱっかり。

そして、時計を見たまだ、夜中の4時だった。

ミレイハア～とため息付き「あんな、夢見たら、再び眠れやしない。

」

しかし、そのまま起きてこるのはあれかと思いつ。

ミレイ再びベッドの中に入った。

すると、その時何者が侵入しそうとばれない様に、小型カメラ付き
盗聴器、を

仕掛けその場を後にした。

ミレイその事に一切気づいていなかつた。

その仕掛けた相手が・・・

自分の兄貴分だと知らずに。

第33章。ミレイの‘闇の夢再び’。完。

第33章。ミレイの、闇の夢再び。（後書き）

今章もお付き合いで有難うござります。

さて、次章はミレイの大学生活について再び

書く予定で居ます。

其れでは、次章も今章同様にお楽しみ頂ければ

幸いです。

オマケ。

ミレイ「何で・・・」んなんばつかつ?..?」

「いやいや・・・の方はミレイさんを

追って詰めるのが好きならしいですね。」

コナン「其れを書いているのはあんただろ?」

N

ギクッ！

と続け様に「じ・・次章もどうぞ宜しくお願ひいたし

ます！」

とその場を後にする。

コナン

逃げたな笑。

第34章。//マーの口算。（前書き）

今章も//マーを中心とした頂いておつます。

第34章。ミレイの日常。

そして、朝が来てミレイは日が覚めた。

すると、自分の部屋の物の位置が若干違う事に気がつく。

ミレイ辺りを見渡し、まつ、まさかね。

そう言い洗面所に行き洗顔等を済ませそしてリビングに戻り朝食の準備を済ませる。

すると、携帯が鳴った。

ディスプレイを見ると沙江島真理恵となっていた。

ミレイ「はー。龍崎。」

真理恵「あ、ミレイさん? おはよ。私は。」

ミレイ「ああ。沙江島か? おはよ。どうした?」

真理恵「実はね、今日の1限の書道先生が急遽出張が出だらしくて休講になつたの。」

ミレイ「あ・・・やうなんだ。んで? 今日の後の授業一緒だつたよね?」

真理恵頷き「ええ。そりゃ。後の授業は通常通り。」

ミレイ「了解した。」

と続け様に真理恵「あ・・・そう言えば今口うちの学科に編入生が来るらしいわ。」

ミレイ「ふえ？編入生？？」

真理恵再度頷き「ええ。なんにせよ。日本の文化等に興味あるかと言ひ事で。」

ミレイ「じゃ・・・外国人なのか？」

真理恵「ええ。アメリカ人らしいわ。名前は・・・。確か。クリス・ヴィンヤードって。」

ミレイセの名を聞いて驚き

ク・・・クリス・ヴィンヤードだと?・?・?・?・?

一瞬その名を聞いてブロンズ髪の女を思い出した。

真理恵「ミレイセさん?ミレイセさん?」

ミレイ我に戻り「ああ。わ、悪い。」

真理恵「大丈夫?そのクリスさんに覚えがあるの?・?・?」

ミレイ「いや。。。特に。」と続け様に「じゃ。。。2限の時に。」

真理恵「ええ。では。」

そう言い電源を切った。

そして、朝食を済ませた。

その後何時もの様にタバコに火を灯し、「。。。クリス・ヴィンヤード。」

まさか。

あの女か？！

ミレイが囁つあの女とはベルモットの事である。

ミレイ「…迂闊に、下手な事、出来ないわね。」とも呟いた。

すると、小型の黒い物体を見つける。

「な・・・…！」

「…されば…・・・まさか？！」

とつ 盗聴器？！

しかも、黒と青いJとは・・・。

ジン兄さんが此処に？！

そして、小型の黒の盗聴器を見て更に頭を抱えて「し、しかも」
寧に小型カメラも

ついでいるし・・・。」

わては、 もう・・・。

先程の沙江島との会話も・・・

そして私が起きた時の行動も・・・。

‘見られていたって、訳ね。

だから・・・。

あの女ヒトをもしかして・・・。

大学へと、編入させた'。

私を、‘追い詰め’、そして‘連れ戻す為に’。

すると、ミレイフツと笑い「・・・考えすぎか。」

だつて、もし、其れが、本当だとしたら、私の周りに、不穏な気配
、がたつて来る

はずだもの。

そつ眩き灰皿にタバコを揉み消した。

すると、一匹の黒猫がいつの間にか入つて來た。

ミレイ驚き「く・・黒猫？」

と続け様に「何時の間に入つてきたんだらつへ」

そして、その黒猫はミレイに近づき壊した。

ミレイ恐る恐るその黒猫の頭を撫でた。

その時黒猫はミレイの顔を確認した後その場を出ていった。

黒猫、そして以前に見た黒のカラス。

黒は、不吉、を思われる。

そう思いながら、ミレイ時計を見て9時20分過ぎだと呟つ事を確認し

「あ・・いけない！もつとお出なきや！2限に間に合わん。」

そう言い大学の鞄を持ちリビング等確認し戸締りを閉め大学に向かつた。

その様子を黒のポルシェと黒のシボレーが別々に分かれて見ていた。

ミレイはその事を気づかず居た。

第34章。ミレイの日常。完。

第3・4章。ミレーヌの日常。（後編）

今章もお付き合いで下さり有難うござります。

ベルモットの本名は本来ならシャロン・ヴィンヤード

だそうですが・・・。

此処ではあえてクリスとさせて頂きました。

生徒に扮する為にね。（笑・・・）

さて、次章は、米花女子大学のメンバーを久々に

出したいと思います。

其れでは、次章も今章と同様にお楽しみ頂ければ

幸いです。

オマケ。

コナン「おいおい。ミレイの奴大丈夫か?」

哀「あの様子だと大丈夫じゃなさそうね。」

夏美「・・確かに。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しく!..」

第35章。米花女子大学。（前書き）

今章では、久々に米花女子大学編です。

ベルモットが編入生としてミレイの国文科に

進入しています。

第35章。米花女子大学。

あれからミレイは家を出て大学に何時の通り向かつた。

2限が始まるのが10時40分で、大学に着いたのが・・10時30分頃。

ミレイ「2限の先生来るの遅いから・・喫煙所でタバコでも吸うか。」

そう呟き喫煙所がある1号館へと向かつた。

そして、喫煙所に着き先程コンビニで買ったペットボトルの紅茶を取り出しタバコに火を灯

す。すると、1人のブロンド髪の女が入つて來た。

ミレイ「ん?」

ブロンド髪の女・・・。

この女何処かで・・・。

すると、そのブロンド髪の女が//レイの田線に//づき//レイを見て
クスと笑う。

ミレイその顔を見て驚いた。

‘私を知っている??????’

と同時に//レイひとつ耐えられない、不穏な気配、が襲つた。

ミレイ吸いかけていたタバコを急いで消し紅茶を飲みその場をすばやく後にし

2限の教室へと向かつた。

その喫煙所に取り残されたブロンド髪の女は再びクスッと笑い

「相変わらず、勘、が良い事。」と呟いた。

そして・・。

此れからがもつと楽しくなつやつよ。

ねえ・・?

ミレイ？

一方、此処は1号館の2階にある123号室。

此処で「日本語聴取法」の授業がある。

ミレイはその教室に居た。

すると、真理恵がカノンと共にミレイの所にやつて来て

真理恵「ミレイさん。大丈夫??」

ミレイ「あ・・あ。大丈夫だよ。」と何時も通り明るく振舞う。

その様子を見てカノンも「本当に大丈夫なの??」

ミレイ頷いた。

カノン「なら・・良いけど。」と続け様に「ねえ・・所でさ。編入生が来るつて事聞いた?」

ミレイ「ああ。沙江島から聞いたよ。」と続け様に「な・・なあ。その編入生の髪の色

ブロンデじゃなかつたか??」

カノン「じや答。私今田一限からだつたんだけビその時元の編入生と一緒にだつたんだ。」

と続けて「んでもつて・・私に、質問してきたよ、?」

真理恵「何の、質問、? カノンさん?」

カノン「確かに…、龍崎ミレイさんが居る大学ってこの大学の国文科で、あつてる?」

「
つ
て
ね。」

真理恵「それで?何て答えたの?」

カノン「あつていますよ。って答えたよ。」と続け様に、「彼女と同じ授業ある?」

とも聞かれてね。そうしたら2限と3限が一緒ですよ。と答えたんだ。そうしたら、

あの編入生嬉しそうにしていたよ。」と更に続けて「でも、どうして?ミレイを知っているん

ですか？つて聞いてみたら・・・」う答えたんだ。」

真理恵「何て答えたの？？」

カノン「確か・・・・・英語で・・・。」

I'm sorry! I can't tell you.
A secret makes a woman wise.

(「ごめんなさい。教えられないわ。女は秘密を着飾つて美しくなるものよ。」)

ミレイその言葉を聞いて思わず固まり冷や汗をかいてしまう。

ま・・・間違いない！！

「つ・・この、口癖、は、あ、あの女だッ！――！」

あの女しか、使わない、――！」

すると、真理恵「ミレイさん？」

ミレイ再び真理恵の声で我に戻り「あ・・あ。悪い。」と続け様に
「沙江鳴。」

真理恵「何？」

ミレイ「その編入生の名・・クリス・ヴィンヤードって私とあんた

が電話で話している

時に言つたな？」

真理恵領き「ええ。そうよ。」

ミレイ「悪い事は言わない。その編入生とは、あまり関わらない方が良い。」

その事を聞いて真理恵「どうして？」

ミレイ「、どうしてもだ。」

真理恵「・・分かつたわ。努力する。」

そして、ミレイカノンも見て「前川。あんたもだ。」

カノン頷き「OK。」

そして、真理恵時計を見て「ねえ。おけがわ桶川先生遅くない??」

カノン腕時計を見て「本当だ。普段なら10時45分位に来るはずなのに・・

今はもう10時50分だよ。5分位経っているわ。」

すると、ブロンド髪の女が教室に入つて來た。

そして、ミレイの後ろの席に座つた。

ミレイ思わず顔が引きつった。

と同時に学生支援の職員が入って来て「皆さん。唐突で申し訳ありませんが・・

今日桶川先生体調を崩されて病院に行かれた為急遽休講と言つ事になります。」

生徒全員「え〜!〜!」

そして、カノン「あら・・・・じや、今日の3限も授業ないわね。
うちは等・・

3限もあの先生の授業だから。」

真理恵「そうね。」

すると、ミレイ席を立ち、「んじゃ…私しゃあは、いつもん所、寄つたら帰るわ。」

カノン「え? 帰っちゃうの?? あんた授業は??」

ミレイ「3限で終わり。本当は、1限から3限までだつたんだけど…。
1限は沙江島の

連絡で休講つて知つたから2限、3限つて言つ訳。だけど… 2限、
3限が休講になつた

「ら大学意味ないっしょ??」

カノン「そ…そりゃあそうだけビサ…。せつかく来たんだし一緒に帰るつと思つた

「ただけど…。」と残念そうに言つた。

ミレイ「ああ・・そつか。今日あんた4限までだつたんだっけ?」

カノン頷いた。

ミレイ苦笑いをし「悪いね・・今日は、どうもね。」

カノン「分かつた。じゃ・・また明日ね。」

ミレイ教科書を鞄にしまい「じゃ・・ね。」

そう言い教室を出でいつもん所に寄つてタバコに火を灯して、携帯を取り出し電話をかけた。

第35章。米花女子大学。完。

第35章。米花女子大学。（後書き）

今章もお付き合いで下さり有難うございます。

さて、次章はミレイが大学の喫煙所で誰かに電話をかける所を書く予定で居ます。

其れでは、次章も今章と同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

ミレイ「・・・何かこれ見ていると私ピンチ?」

「…ですね。」

と続け様にミレイ「ベルモット姉さんが出てくるなんて聞いていないよーー。」

「いや…」されどあくまでも組織をベースに…。

書いてこますからその辺は」「勘弁を…。汗

ミハヤ「次章もどうぞ宜しく。」

第36章。ミシシッピの電話の怪手と伸び回し家。（前編）

今章ではミシシッピの怪手と伸び回し家が携帯で話をしています。

第36章。ミレイの電話の相手と再び阿笠家。

あれからミレイは教室を抜け、大学の喫煙所に行きタバコに火を灯し急いで携帯に電話をかけ

た。

すると男の声で「はい。江戸川ですけど・・・。」

その相手はコナンだった。

今日コナンの小学校では先生達が出張の為臨時休講になっていた。

ミレイ「あ・・コナンか?。私だ。」

「コナン」「おう。ミレイはどうした?何かあつたか?」

ミレイ辺りを見渡し警戒しながら「実はな・・。ジン兄さんの、仲間、が私しゃあの

大学に編入生として乗り込んできたんだ。」

「ナン其れを聞いて驚きながら「な・・何?・!ま・・マジかよ?・!」と続け様に

「其れ本当か?・!」

ミレイ領セ「ああ。本当だよ。」

コナン「んで?学科は?・?」

ミレイタバコを吸いながら「案の定・・。私しゃあと同じ、国文科

、 だつたんだ。 「

「ナン其れを聞きつつ「んで~やつ等の仲間の「コードネームは?」

ミレイ「クリス・ヴィンヤード。そして・・あの口癖を友達に言つたんだ。」

「ナン」・・おこおい。クリス・ヴィンヤードとその口癖つて・・まさか?!

ミレイ「ああ。‘A Secret makes a women women’、つてな。」

と更に続けて「女は秘密を着飾つて美しくなるもの。つてこの口癖使う人は大体あんたも

検討付いているだろ「うへ。」

「ナン」「・・ベルモットか。」

ミレイ嬢も「うなづく。うやうやしく・・・此処まで、嗅ぎ付けられた
うりこ。」

ジン兄さん達がこの町に、来て居る事、は勘付いては居たんだけど・
・。

まさか・・あの女まで来てしまつて居るとはね・・・。」と続け様に

「ある意味やばい事になつて来たね。」と苦笑い。

「ナン」「おこおこ。笑つている場合かよ。」

と続け様に「オメー。此れから会えねえか?」

ミレイ「此れから? 良いよ。今日大学の授業全部休講だし。」

ロナン「よーしーじゃ・・後で、何時もの所、で。」

ミレイ「了解。」と続け様に「んじゅ後で。」
そう言い携帯を切った。

一方、ベルモットはと書つと米花女子大学の路地裏に止めてある黒のポルシェの中に居て

ジン達と合流していた。

その会話は、ベルモットとジン達にも筒抜けだった。

ベルモットクスと笑い「、聞いた？、ジン？」

ジン「ああ。、ちゃんと聞こえていたぜ、？多分・・ミレイが現れる場所といや・・。」

ベルモット「多分・・米花町4丁目か5丁目にある阿笠家。其処にミレイが現れると思づ

わ。」

ジンタバコに火を灯しながら「フツ。そうか。」

此れで・・よしやく、お前と本格的に再会できそうだぜ」。

・・・楽しみだな。

なあ・・?

ミレイ?

と続け様にウォッカに「だぜ。」と更に続けて「ミレイの、もう一つの穴倉、に向かえ。」

ウォッカ「へイ。」と返事をし車を出した。

すると、案の定ミレイも大学から出て近道をしようとした路地裏に入つたその時

「ーーーー。」

黒のポルシェが田の前を通り過ぎた。

「レイ苦笑いをして、「いや・ちゃんとした道で行った方が良いな。

そつ言い路地の戻り阿笠家に向かつた。

第36章。レイの電話の相手と再び阿笠家。完。

第36章。ミレイの電話の相手と伸び阿笠家。（後書き）

今章もお付合い下さつ有難うござります。

さて次章は、ミレイが阿笠家に付いた所から書く予定でございます。

次章も今章と同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ・・・。

「ナン」「おこおこ。ミレイの居場所がこのままだと

・・。」

哀「ええ、ばれるでしょうわ。」

と続け様に「次章もぜひ宜しくね。」

第37章。ミレットとコナン達のやつ取りが主になります。（前書き）

今章は、ミレットとコナン達のやつ取りが主になります。

第37章。ミレイ再び阿笠家に表われる。

あれから、大学の喫煙所でコナンとの電話を終えたミレイ。

その後大学から出て阿笠家に向かい着く。

その中にコナンと哀が居た。

阿笠博士は東都デパートに買い物があつた為不在だった。

そしてミレイ事の経緯をコナン達に話す。

コナン「・・成る程な。ベルモットが、編入生として・・お前の学科に。」

ミレイタバコに火を灯し「ああ。」

哀「い・・何時分かったの？？ベルモットが・・ミレイさんの大学に居たとこ'う事？」

ミレイ「今朝の沙江島からの連絡だよ。それで・・知つたんだ。まあ、最初は

氣にも留めても居なかつたが・・。大学に着き沙江島と前川と話している内に確信したん

だ。
「

哀「ビ・・ビ'うせつて？確信したの？」

ミレイタバコを吸いながら「実は、前川案の定1限の授業の時ベルモット姉さんと一緒に

だつたらしい。その時にベルモット姉さんが私しゃあの事を必要以

上に聞いていたらしい。」

と続け様に「前川の奴が、どうして？見たいな事聞いたらしいんだ。そしたら・・

こう返つて来た。I'm sorry! I can't tell you... A secret makes a woman...
en

つてな。この口癖を使う人はあの女しかいないぞ。」と更に続けて

「恐らく、^{ターゲット}標的はこの私じゃあ。ヒ。」哀をチラシと見た。

哀口無言になつた。

と更に「ナンを見て小声で「、しつかり彼女守つてやんなよ。」

「ナン領いた。

と同時に哀がよひやく口を開き「ねえ。さつきから、ノイズ、聞こえ
ない? ?」

ミレイ「・・・ノイズ、?」

まさか? !

そつ言い急いで大学の鞄の中を探つた。

「...」

と回転し、「えいせんり... やられた、みたいだ。」

セイの黒の小型盗聴器を取り出した。

哀「や... やの、黒の小型盗聴器、おなか?...」

ミュー額を汗をかき「ああ。そのまかだね!」

「ナン

奴等か?!

ミレイ苦笑いをし「しかも・・」丁寧に、小型カメラ付き。」

コナンも確認した「マジかよ！でも、どうして・・オメー？」

ミレイ再度苦笑いをしタバコを加え直し「私しゃあの自宅にも、同じタイプ」の

盗聴器が仕掛けられていたんだよ。」

「ナン「んな？！」

哀只黙つていた。

「ミレイ」・・・「じめん。ジン兄さん。」と小声で謝りその盗聴器を潰した。

と同時に心の中で焦つて・・。

ひょつとしたら・・近い内に私しゃあに、会いに来るかもしけない
ね。
,

と呟いた。

第37章。ミレイ再び阿笠家に表われる。完。

第37章。ミレイ再び阿笠家に表われる。（後書き）

今章もお付き合いで下さり有難うござります。

さて、次章は・・多分ジンの兄貴様方を中心として

書かせて頂く予定です。

次章も今章と同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

ミレイ「…………汗」

夏美「ミレイ。」

と続け様にタバコに火を灯し「次章もどうぞ宜しく。」

第38章。再び//レイと夏美との会話。（前編）

おせよ、アリ。

今章では、//レイと夏美の会話が主になります。

第38章。再び//レイと夏美との会話。

あれから、//レイは阿笠家でコナン達に自分が潜伏しているのがこの町だと語つ事を

完全にジン達に気づかされてしまう。

そして、その事を聞き驚いたコナン達。

そして、//レイは再び携帯を取り出し電話をかける。

夏美「はいー橋つ！」

//レイ「夏さん? 私。。。」

夏美「おひー。」夏美か？どうした？」

ミレイ「さうや。私の、居場所、完全に、隠されたら
しこ。」

其れを聞いて夏美「んな？一マジで？一。」

ミレイ頷いた。

夏美「大丈夫だよ。ジンにもじめぐらへの黙りをぬけ出さないや
つてほしい。つて

前に会つた時に書つたんだもの。」

ミレイ「でもや・・其れは広州の連中が私と遭遇するまでの事でし
よ?」

夏美「ん・・ああ。」

ミレイ「あの男がずっと、私の事ヒトツほつておこして貰アゲると思シテつ?」

夏美其れを聞いて黙り込んだ。

と続けて「それに・・。」

夏美「・・それにはじめた?」

ミレイ 焦りながら「あの女^{アバ}」が動き始めた。

夏美 其れを聞いて「おいおい。あの女^{アバ}、つてまさか……？」

ミレイ 頷き「ああ。そのままか。」

夏美 「……ベルモットか。」

ミレイ 「じ名答！しかも・・私しやあの大学の編入生として国文科に入ってきたよ。」

クリス・ヴィンヤードとしてね。」

夏美ため息付キ「ベルモットも、動き始めた」と言つ事は。。。もう、彼もお前さんを

「ほつておく、訳にも・・いかんか。」

ミレイ「・・そういう事。多分兄さんの事だから近い内に私しゃあに会いに来るだろ?。」

夏美「・・弱つたな。今まだ、お前さんとジンを再会させる訳にも行かない。」

其れを聞いてミレイタバコを取り出し再度火を灯し「何か、不味い事、でも?」

夏美「ああ。メイランの奴がまた手下にお前さんの、拘束命令、を

出したんだ。

しかも今週中にね。」

其れを聞いてミレイタバコを吸いながら「またしつこい連中だ。」

と呆れ笑い。

夏美「・・・奴等は、そう言つ連中だ。」と続け様に「やつら言えれば・
・奴等と言つたら

今週の土曜か・・何かのパーティである密会を、暗殺する計
画を立てているらしい。」

ミレイ「パーティ？」と続け様に「今週の土曜日になんか

夏美領き「ああ。内容は今の所不透明だが、其処で・・・広州の連中
が客に扮し侵入し

、先程似た様な事言つたと思うが2人の客を暗殺する予定だ。」

ミレイ「え？マジ？？」

夏美もタバコに火を灯し領きながら「ああ。多分・・・その標的は広
州の

連中に取つて‘邪魔な存在’と言つ事だと言えるよそして、広州の
連中はお前さんも

その計画に加えようと企んでいるんだろ？。」と続け様に「お前さんも、薄々、勘付いて、

居るだろ？が・・奴等はお前さんが、赤龍、だつて事知つている。

此れを使わない手が無いだろ？とも考えたんだろ？。まあ・・これはあくまでも

私しゃあの個人的な考え方だが・・。まあ・・なんにせよ、氣をつけたほうが身の為だ。」

ミレイ領き「有難う。夏さん。」と続け様に「んで？場所は？

夏美「今の所、杯戸シティホテル、だそ？だ。」

ミレイ「やい。」と続け様に「ねえ。夏さん。」

夏美「はいよ。」

ミレイ「もし、その事が詳しく分かつたら・・教えてくれる??」

夏美「べ・・別に構わんけど。」と続け様に「お・・お前さんまさ
か??」

ミレイ「大丈夫よ。そんな、変な行動、しないしね。」と笑いなが
ら言った。

夏美「・・だと良いけどさ。」と更に続けて「良いかい?自宅には

戾らない事をお勧めするよ

何時・・ジン達とそれに広州の連中が来るとも限らんしね。」

ミレイ「・・了解。」と続け様に「・・長時間」めんね。夏さん。

夏美フツと笑い「・・何気にするな。んじゃ・・何か分かったら連絡する。」

ミレイ領き「有難う。お願い。」と続け様に「それじゃ。」

そして携帯を切つた。

一方夏美は、ワカバの喫煙所でミレイの事を心配していた。

夏美タバコ吸いながら「・・ミレイ。お前さん、まさか・・・」

と小声で呟いた。

第38章。再びミレイと夏美との会話。完。

第38章。再びリノベと夏美との会話（後書き）

今章もお付き合いでトセツ有難うござります。

と同時に・・・皆様にお詫び・・・。

前に黒の組織についてを出した際、定等の件を出しておきましたが、・・・

電話と書類で急遽リノベと夏美との会話に変更させて頂ました。

訂正を及びお詫びいたします。申し訳ありませんでした。

さて、次章は広州の幹部と夏美が接触する所を

書かせて頂く予定です。

其れでは、次章も今章同様にお楽しみ頂ければ

幸いです。

オマケ。

ミレイ「・・杯戸シティホテルか。」

コナン「おい。まさかお前・・。」

ミレイフツと笑い「次章もどうぞ宜しくね。」

第39章。夏美、広州の幹部と接触。そして・・・・・銃弾に襲われる。（前）

今章では、タバコを買いに行つた夏美が偶然にも

広州の幹部と接触しそして・・・。

銃弾に襲われてしまいします。

第39章。夏美、広州の幹部と接触。そして・・・・銃弾に襲われる。

ミレイとの会話を終えた夏美は喫煙所から出てメンバーに「タバコ買つてくるな。」

と言いに愛車の青のベンツでタバコを買いに出かけた。

そして、タバコを買いに米花町のとあるタバコ屋でタバコを買って、駐車場に止めてあつ

た。愛車の所に向かう途中広州の幹部と偶然にも接觸した。

夏美「・・・王明杏。
オウ・メイアン

明杏クスと笑い「あら・・・此れは、奇遇」とも言ひべきかしら?夏
アメイ
美。」
シャア

夏美只黙りながらタバコに火を灯した。

明杏「どうやら…、会いたくなかった、そつ言つ顔ね。」

そして、夏美明杏を睨み付けながら「…何用だ？」

明杏再びクスと笑い「そんな…睨まないで。私は、只、彼女、の事について

聞きたいだけよ？」

明杏が言つ彼女とはミレイの事。

夏美「・・奴の事聞いてどうするつもつだ？」

明杏「・・愚問だわ。勿論。マイラン様の所に連れて行くのよ。」

夏美タバコ吸いながら「奴はお前等広州には渡さんー絶対になー！」

明杏悲しそうに「・・そつ。‘残念だわ’。シャアアメイ夏美貴女なら、マイラン様の

妹分である貴女なら・・‘分かつてくれる’と思つたのに・・。」

そう言い右手を上げた。

次の瞬間！

銃声が響き渡つた。

夏美タバコを思わず口から落としてしまつた。

そして、夏美の腹部から大量の血が・・。

夏美「・・ツ！」

そして後ろのビルの方を見てライフルを構えた女が居た。

夏美軽く舌打し「・・^{アイリン}愛燐か。」

そう、『ナン』に一度やられたが復活して戻ってきた。

そして、夏美腹部を手で押さえながらタバコを踵で揉み消し吸殻を拾い愛車まで

歩き始めた。

と同時に明杏を見てフツと笑い「・・ひ、一つ言つておく。お前さん達、命、の灯火が

縮んだよ。」

明杏クスと笑い「どうして？」

夏美自分の愛車から黒の盗聴器を取り出し「やと笑い「」・・此れ
が何か分かるよね？」

明杏其れを見て驚き「んな？そつ・・・其れは、盗聴器？！しかも・・
黒・・。

と、言ひ事は？！まさか？！」

夏美「そう。此れは多分私の、大事な彼、が仕掛けたもの。分かる
わよね？」

と更に続けて「因みにこれ・・発信機も付いているから、下手すり
や・・

こひけに来るだろ？・・や。」

其れを聞いて明杏顔色悪くし「あ・・貴女、もしかしてジンの恋人
？！」

夏美再度ニヤリと笑い「・・ゞ、『名答。』

そして独特のエンジン音が聞こえて来た。

明杏軽く舌打し無線で「愛燐！－不味いわ！あのエンジン音は奴等
よー・引き揚げるわよ！－」

愛燐「了解！」

そう言い明杏と愛燐は引き揚げた。

と同時に明杏夏美を見て「夏美貴女がいけないのよ～メイラン様の
所に

シャアアメイ

‘戻らず、ワカバ、なんかに居続けるんだもの’。’と再度クスッと笑いその場を素早く

後にした。そして、夏美明杏にばれない様に明杏の靴裏に小型付き盗聴器と発信機が入った

ガムをくつ付けた。

と同時にワカバに居るライカに連絡して「・・わ、私だ。今、広州の明杏と愛焼に遭遇。

小型盗聴器付き発信機の入ったガムを明杏の靴裏に密かに付けた。

手が空いでいる者だつたら誰でも良い悪いが・・奴等を、追うよう
‘伝えてくれ。’

ライカ「了解した。つて・・相棒?どうした?息切れしているみたい
いだが・・。’

と心配する。

夏美フツと笑い「な・・何。大丈夫だ。しつ、心配無用さ。相棒。」

ライカ「本当か?」

夏美「あ・・ああ。本当さ。」と続け様に「じゃ、そつ言ひ事で頼む。」

ライカ「了解した。今・・丁度手が空いているのは雷外と雷龍そして雷明。

大阪組。だが、誰に行かせる?」

夏美「・・大阪組は行かせるのがちょっと不味いだろう。李組で頼む。」

(因みに、雷外と雷龍と雷明は同じ苗字そして・・似たような名前ですが・・

身内同士ではありません。雷龍と雷明は兄妹です。)

ライカ「了解した。」

夏美「じゃ・・後で。」

そう言い携帯を切った。

すると、黒のポルシェが現れてジンが助手席から急いで降りてきて

「夏美ッ！！」

そう言い急いで夏美の所に向かつた。

第39章。夏美、広州の幹部と接触。そして・・・・・銃弾に襲われる。完。

第39章。夏美、広州の幹部と接触。そして・・・・銃弾に襲われる。（後）

今章もお付き合いで下さり有難うござります。

さて、次章は、夏美とジンの兄貴様のやり取りを
主に書く予定で固ます。

其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ

有理「・・・姉さん。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しくお願ひします。」

第40章。ジンと夏美。そして李組（前書き）

おはようございます。

今章ではジンの兄貴様と夏美のやり取りが主になります。

第40章。ジンと夏美。そして李組

あれから夏美は、タバコを買いにワカバのアジトを出て偶然にも広州の幹部の一人である

王明杏と遭遇し、そして・・ミレイの事を聞き出せりとしたが夏美が答えなかつた為

愛蘭の姉である広州のスナイパーである愛燐の銃弾を腹部に受けてしまひ。

そして・・。ジン達が近づいている事に気づきその場からすばやく逃げる。

とすれ違いにジンの愛車である黒のポルシェ356Aが走つて来て止まりジンが助手席から

勢い良く出て夏美の側に寄つて來た。

ジン「夏美ッ！」

そして夏美を自分の腕の中に抱きしめ「・・誰にやられた？！」

夏美腹部の傷を癒しながら「・・広州の愛燐だよ。タバコを買いに行つた時に偶然に

奴等と遭遇したのよ。」

と続け様に白のベンツが通りかかり夏美達の前で止まった。

そして「姉者……」

雷龍が後部座席から出て来て「大丈夫ですか？！」

夏美フツと笑い「悪いね。心配かけて・・・まあ、何時もの、アレ、やつたから何とか

大丈夫だが・・・」と続け様に「ライカから聞いているな?」

雷龍領き「はい。」と続け様に「此れから雷外と雷明と共に奴等を追います。」

夏美も其れを聞いて領き「・・・頼む。」

雷龍「ハツ！」そして、白ベンツに戻り「姉者！兄上様からのオウガ伝言です。

‘しばらくの間夏美はアジトで待機せよ。との事です。」そして、ジンを見て

「ジン様。姉者の事宜しくお願ひいたします。」

夏美再度フツと笑い「・・・了解した。」

其れを聞いたジンは頷いた。

そして、雷龍を乗せた白ベンツはそのまま明杏達の追跡に向かった。

と同時にジン「ウォッカ！」

ウォッカ「へイ。兄貴。」

ジン「お前も、広州の王明杏そして玲愛蘭の姉愛燐の奴の追跡をしろつー！」

と更に続けて夏美を見て「俺はこいつの愛車でこいつをワカバに送

る。」

ウォッカ「了解しやした！」

そして、ジンタバコに火を灯し「良いか？ぐれぐれも、逃がすんじやねえぜ？」

そして、見つけ次第俺に報告しきつ！そうしたら、俺がその後どうするか・・

オウガの奴と相談して決めてやる。」

ウォッカ顎き黒のポルシェに乗り込みその場を後に先程の白ベンツを追つた。

その後ジンは夏美を青のベンツの後部座席に乗せてから運転席に乗

り込んだ。

昔、ジンは一度夏美の車を運転していた事があり大体の事は把握していた。

ジン夏美を見て「出すぜ?」

夏美領き「ええ。お願ひ。」

そう言つて駐車場を出てワカバのアジトに向かった。

ジン。

そして・・。

王明杏、玲愛燐。

てめえら・・・俺の女に「んな」としゃがって・・今度会った時には

「只じゃおかねえ、からな。覚悟しておけ！」

そして、夏美は・・。

後部座席に寝そべって明杏の去つ際に残した言葉を思い出した。

夏美・・貴女がいけないのよ?マイラン様の所に戻らずにワカバに
居続けるから・・。

夏美軽く舌打し小声で「私は、私の、己の道、を突進んでいるだけ

だ。何が悪い。」

そして・・。

第一、あの女は私を・・・

あの時・・・。

左肩に銃弾を浴びせ捨てたんだぞ?

なのに・・・。

何故?

今・・・・・。

クソッ！虫騒が走るぜ！

と信号が赤になつたと同時にジン夏美に「ビリした？」

夏美フツと苦笑いをし、「いいえ。只、くだらない、事。思い出しちまつただけよ。」

ジン「・・・そつか。」

と続け様に「ねえ、ジン。」

ジン「何だ？」

夏美「ジンをチラシ見て、また、お願い聞いてくれる？」

ジン「前にも似たような事言つたが、お前の願いだったら、何でも
聞いてやるぜ、？」

ヒーヤリ。

夏美「有難う。」と続け様に「ねえ・・・。ワカバに着いたらさ。
久しぶりに・・・

私の側に居てくれない?」

ジンフツと笑い「ああ。構わねえぜ。」

夏美其れを聞いて再び「有難う。」

そしてジン再びフツと笑い信号が青になつたと同時に同じ色である
夏美の愛車のベンツを

走り出した。

第40章。ジンと夏美。そして李組（後書き）

今章もお付き合いで下さり有難うござります。

さて、次章は・・・李組が広州の2人を追跡している所を書かせて頂く予定となつております。

ですので、次章は再び（前編と後編）に分かれで書かせて頂こうと思います。

それでは、次章も今章と同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ

雷外「李組・・・になつてござんばかりよく考えて

見れば雷龍しか出て無いじゃんッ！」

雷明「まあまあ。次章は多分私等も出でくると

思いますよ。雷外さん。」

雷外「そつかな。この作者は、『氣まぐれ』だからな
。 。 。」

雷龍「まあ、そつなる事を願うしかないだつ。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しくお願ひ致します。」

第41章。漆黒の闇、そしてワカバの李組。広州の王明杏と玲愛燐を追跡。（前）

今章では、ワカバの李組が・・・ウォツカ達と共に

広州の明杏と愛燐を追跡しています。

此方は前編と後編に分けさせて頂きます。

第41章。漆黒の闇、そしてワカバの李組。広州の王明杏と玲愛燐を追跡。（前）

アレから夏美に、広州の女幹部である王明杏、玲愛燐を追跡するよう

うに

言われたワカバの李組。

只今・・雷外の愛車である白のベンツで追跡中。

勿論。後ろにはジンの命を受けたウォッカ達も黒のポルシェ356Aで追跡中。

雷外「・・夏美の姉御。大丈夫かな？」

と心配する。

すると、雷龍「雷外。姉者の事が心配なのは俺達兄妹も同じだ。だが・・今は、

姉者のいじ命を遂行するまでだ。」

雷外、雷龍をチラッと見て「・・・そうだな。」

やつて白のベンツを走らせてくる。

そして、信号が赤になり白ベンツが止まった。

すると、雷明「ねえ！お二人共前々つ！――！」

雷明の指差すほうに何と明杏の愛車である赤のクラウンが止まっていた。

其れを見て雷外ニヤリと笑い「アレは・・赤のクラウン221Dだな。間違いねえ

‘奴の愛車だ。’と続け様に雷龍「あの様子だと、雷外。明杏の奴が後部座席に座っている

みたいだ。」

雷外頷きながら「ああ。となると運転しているのは、多分・・・。
」

雷龍も頷き返し「ああ。愛焼の奴で間違いないだろ？。」

と続け様に雷龍黒の盗聴器を取り出し「聞こえました？ウォッカ様。

」

ウォッカ「ああー。ぱつちつ聞こえているぜー。雷外その赤のクラウン221Dがその王明杏の

愛車なんだな?」

雷龍領主「はい。」と続け様に「俺達は」のまま奴の愛車を追跡します!」

ウォッカ「了解した!んじゃ、俺達も引き続きお前達の車の後ろに付いて奴の愛車を

追跡し続けるぜ。」

雷龍「はい。お手数おかけいたしますが、どうぞ宜しくお願ひいたします。」

そして通信を終える。

ベルモットタバコに火を灯し「で?その赤のクラウン221Dがそ
うなのね?」

ウォッカ「へイ。雷龍達はこれからも追跡し続けるとの事です。」

ベルモット「そう。」と続け様に「ウォッカ。くれぐれもあの車、見失わないで頂戴。」

ウォッカニヤリと笑い「了解しやした！」

そう言い合ベンツの後を追につつ赤のクラウンを追跡した。

第41章。漆黒の闇、そしてワカバ李組。広州の幹部王明杏と玲瓈
燐を追跡。（前編。）完。

第41章。漆黒の闇、そしてワカバの季組。広州の王明杏と玲瓈燐を追跡。（説

今章もお付き合いで下さり有難うございました。

さて、次章は今章の後編をお送り致したいと

思います。其れでは、次章も今章と同様に

お楽しみ頂ければ幸いです。

ほぼ毎回恒例のオマケ・・・。

明杏「まあたぐー・ワカバもしつこいわね。」

愛燐「・・・まつたぐね。」

「ナン

あんた等の方がよっぽど、しつこい、と思ひな

・・（笑・・・）

と続け様に「次章もどうぞ宜しくお願ひします！」

第42章。漆黒の闇、そしてワカバの季組。広州の王明杏と玲瓈燐を追跡。（後）

今章では、前章の後編を書かせて頂きました。

第42章。漆黒の闇、そしてワカバの李組。広州の王明杏と玲愛燐を追跡。（後）

アレから広州の幹部の明杏と愛燐を追跡しているワカバの李組。そして・・ウォッカラ達。

だが、明杏は、気づいていた。

明杏チラシと後ろを見てフツと笑い「・・アレは、白のベンツ321Cって事は・・明杏姉さん。」

愛燐運転しながら「白のベンツ321Cって事は・・明杏姉さん。」

明杏タバコを取り出し火を灯しながら「ええ。きっと・・雷外の愛車だと思つわ。」

愛燐「あれ？ライフホイの弟の方？」と続け様に「前の米花港で私が狙撃しようとして

狙つていた、ターゲット標的、？」

明杏「そりや。だけど・・ビリして私達を？まさか？」

明杏タバコを口に加えながら自分の靴の裏を見た。

明杏「！！！」

こ・・此れは、まさか、盗聴器と発信器、？

でも・・黒じやないつて事は・・まさか？

そう言いタバコを再度口に加え直しながら後ろを見て顔色を変えた。

明杏「・・黒の車？」

愛燐「雷外の愛車の後ろに黒の車も付いてきているよー。」

明杏靴の裏に付いているガム付きの盗聴器と発信器を剥し「何？」

と続け様に愛燐「明杏姉さんつー！」

夏美シャアアメイが？！

あ・・・アレは黒の組織のウォッカとベルモットーとの間の事は

あの車は、恐らくジンの愛車である黒のポルシェ356A-!-

面倒な事になつたわ!!

と続け様に愛燐に「愛燐ツー・スピード上げて頂戴ツー・雷外の愛車の
後ろに居る車は

黒のポルシェ356A-!-

其れを聞いた愛燐「な?・りょ・・了解ツ!」そう言ひスピードを
上げた。

其れを見た雷外軽く舌打をし「奴等め俺達が追跡しているのに気が付いたか！」

雷龍「いいや・・奴等は元々俺達が追跡していたのを気づいていたさ。雷外。」

と更に続けて「恐らく・・奴等がスピード上げた理由は俺達の後ろに居る

黒のポルシェ356Aに気が付いたのだろう。

雷明其れを聞いて「そうか。だから・・スピードを。

雷龍領き「その通りだ。雷明。」と続け様に「雷外。多分、明杏の奴は姉者をお付けに

なられた盗聴器と発信器の存在に気づいた頃だらう。もし・・奴が潰してしまつたら

追跡不可能になつてしまふ。何としても・・。

雷外ニヤリと笑い「見失わないように頼む、そう言いたいんだろ
う?相棒?」

雷龍再度領いた。

雷外再びニヤリと笑い「了解!」

そう言いスピードを再び上げたと同時に黒のポルシェもスピードを再び上げた。

そして、雷外

せっかく、夏美の姉御が怪我をしてまで付けてくれたんだ。

そうみすみす逃がしやしねえぜーーー！

そう呟いた。

第42章。漆黒の闇、そしてワカバの李組。広州の王明杏と玲瓈燐を追跡。（後編。）完。

第42章。漆黒の闇、そしてワカバの季組。広州の王明杏と玲瓈燐を追跡。（後）

今章もお付き合いで下さり有難うござります。

さて、次章は、ワカバについて書かせて頂く予定となつておつます。

其れでは、次章も今章と同様にお付き合いで下されば幸いです。

オマケ。

雷外「奴等め！逃がしあしないよーーー。」

雷明「そうね。。もし、逃がしたら。。。」

雷外「。。多分、姉御は兎も角。。」

「ジノの呪わん！」と叫ぶやうだね」と思つた。

雷明「・・・成る程ね。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しくお付き合」この程

お願い致します。」

第43章。夏美からのメイランへの想いとワカバへの報告。（前書き）

今章では、夏美自身のメイランへの想いが主になって
おります。

第43章。夏美からのメイランへの想いとワカバへの報告。

一方、夏美はジンに自分の愛車である青のベンツでワカバのアジトまで送つてもらい

自分の部屋のベットの上で待機していながら、一枚の写真を見ていた。

それは、普段珍しく一部の仲間にしか見せない切なげな表情だった。

夏美「……メイラン、姉さん、」と写真を見ながら呟いていた。

その写真は嘗てメイランが広州を設立する前に、某中華街に行つた時に取つた写真だった。

2人で仲良く肩を抱き合いながら微笑む2人。

あの頃は、とても楽しかったな。でも・・・どうして??

「ハハなつてしまつたの、??

教えてよ??メイラン姉さん。

夏美も嘗てメイランの事をリレーが雪音を想いつと同様に心底敬愛し
本当の、姉、として

見ていた。

だが・・・。

ある口を擧えに、それが崩れてしまった。

しかし、どうしてそうなったのかは・・・夏美自身にも正直分から
ない。

そして・・・。自分を捨てて、父母を仲間を広州に殺されていくう
ちに・・・

夏美自身の中にも自然とメイランへの、憎しみ、が物凄く芽生えて
いった。

と同時に夏美自身もそれが影響で一度、闇に墮ちて、しまった時が
あつた。

だが・・・1人の少女のおかげでその、闇から抜け出す事、が出
来たが・・・。

案の定その少女も広州によつて始末されてしまった。

理由は、広州にとつて、危ない存在、だつたからだ。

広州は、組織と似たようなもので自分達に、悪影響、を及ぼすもの
はすぐに、消し去る、。

そう言ひつ奴等なのだ。

すると、夏美タバコに火を灯し頭をかきながら軽く舌打し「・・く

だらねえな。」

と続け様に「どうして・・・こんなくだらない、事を思い出してしまつんだろうな。」

と「己」をあざ笑つた。

一方、ジンはオウガの部屋に行き先程の事を報告していた。

オウガ「成る程な。今の所夏美は問題ないか・・・。」

ジンタバコに火を灯し「ああ。」と続け様に「広州の王明杏と玲愛
燐の追跡はお前の所の

李組の他にもウォッカ達にも追跡をせつてある。」と更に続けて「もし、奴等を突き止めたら

お前の所の李組かウォッカ達から連絡が入つてくるだらうよ。」

オウガ「そつか。」と続け様に「じゃ・・今はまだあいつ等の連絡待ちだな。」

ジン頷いた。

と同時に「じゃ・・といあえず報告は以上だ。」そう言いオウガの部屋を出ようとした。

その時オウガ「ジン。」

ジンもう一回オウガに振り向き「何だ？」

オウガ「くれぐれも、夏美を、頼む」。

それを聞いてジンニヤリと笑い「言われるまでもねえ。」 そう言い
軽く挨拶をし

オウガの部屋を出て夏美の部屋に向かった。

そして、オウガ別室に隠れていた服部達を呼んで「もう出てきて良
いぞ。」

そういう服部達が出て来た。

服部「ふう。しかし、まさかジンが来るとは思いも見なかつたで。」

それを聞いてコナンも冷や汗かきながら「ああ。本当だな。」

と苦笑い。

すると、オウガ「コナン君。」

コナンオウガを見て「はい。」

オウガ苦笑いをし「くれぐれも、気をつける、多分ジンの奴、薄々勘付いているかも、

しれねえぞ。」

コナン「・・・俺の事、についてですか？」

オウガ頷いた。

それを聞いたコナンは若干焦りだした。

それは服部も同じだった。

第43章。 夏美からのメイランへの想いとワカバへの報告。 完。

第43章。夏美からのマイランへの想ことワカバへの報告。（後書き）

今章もお付き合いで下さり有難うござります。

さて、此處でお詫びを前章ではジンの兄貴様と夏美の

やり取りを書かせて頂くような事を予告してあります

たが・・報告話が先にネタとして上がってしまい

変更させて頂きました。尚、この予告はあくまでも

予定ですので不意にまた変わるかもしれません

その辺はその辺で了承頂きたいと思います。

尚、次章では、その今章に書かせて頂く予定だった

ジンの兄貴様と夏美のやり取りを書かせて頂きたい

と思います。其れでは、次章も今章と同様にお楽しみ

頂ければ幸いです。

オマケ。

「ナン」「」の作者って本当に氣まぐれすぎるとよな。」

服部「ほんまやで。工藤。」

ジン「ん？お前今そのガキの事、工藤、と呼ばなかつたか？」

服部

「ゲッ！－ジッ・・ジンやないか？！」

「い・・いやあ。こいつがあまりにも工藤に似ている

からついた・・あ、でもこのボウズはほんまに・・

工藤とちやうで？遠い遠い親戚の奴や。」「

ジンニヤコ「せつ・・。」

コナン

せ・・せベエゼー・・ジンの奴・・・・。

と続け様に子供らしい笑顔で「じ・・次章も
どひが宜しくお願ひします！」

N

コナン君つー頑張れつー（笑・）

第44章。ジンと夏美久々の2人っきりの時間。（前書き）

今章は、ジンの兄貴様と夏美のやり取りが主になります。

第44章。ジンと夏美久々の2人っきりの時間。

アレから、ジンはオウガに夏美の事そして・・広州の幹部の王明杏、玲愛燐の追跡の事について

てオウガに報告していた後に夏美の部屋に向かっていた。

そして、夏美の部屋に到着しドアをノックする。

夏美「はい。」

ジン「俺だ。入るぜ?」

そう言いジンは夏美の部屋入り夏美が居る寝室へと歩いていった。

其処にはベットに座っていた夏美の姿があつた。

ジン、夏美に近づき「寝てなくて平氣なのか？」

夏美頷き「・・さつき車の中で横になつていたからね。寝られなくてさ。」

と苦笑いし、近くにあつたテーブルの上にある灰皿にタバコを揉み消した。

ジンタバコの煙を出しながら「左肩の傷と太ももの傷・・大丈夫か？」

夏美「ええ。アレしたから、平氣。」と同時に、「左肩は、ほほ何時もの事だから、慣れてい

る。

ジン「…そ、うか。」と続け様に「ん?」「ベットの上にあつた夏美」とマイランの写真が

ある事に気づき拾つた。

ジン「この写真は?」

それをジンから聞いた夏美はバチが悪そうな顔をして「ああ。それ
ね・・・。

「茜の、私しゃあと、茜の、メイランだよ。とある日中華街に行つた時の眞だよ。」

と続け様にフツッと笑い、「もう・・・捨てた」か、どうか行ひやがつた」と思つたんだけど

ね。

ジン「随分楽しそうだな。お前・・・メイランの奴を物凄く憎んでいたんじやねえのか、

？」

夏美それを聞いて少し黙っていた。

ジンその様子を見てタバコを灰皿の上に揉み消しながら……

「……悪い事聞いたか？」

夏美首を横に振り、「別に……あの時は、メイランの事正直、憎んでいなかつた」。

‘あの時の私は本当に……、メイランの事を……。’レイが雪音を心底敬愛し

‘そして……、本当の姉’として慕っていたのよ。’と続け様にジンに近づきながら

‘でも……何らかの理由で、その歯車が崩れたのね。’メイラン

は・・広州を設立した。

私を捨ててまで。仕舞には、父さんと母さんまで・・・。」

と更に続けて「まあ・・」んな事言つのもアレだけワカバに留まつた理由。

あえて言つなら、復讐、かな。」と続け様に「こんな事本当は父さんと母さんも、望んじや、

いないだらうけどね・・性格からしてね。」

ジン「じゃ・・何故?」

夏美「こうも言へるわ。父さん、母さんが、遣り残した任務、と拳法の、宿命^{サダメ}、

を受け継ぐ為とも。」

ジンフツと笑い夏美の右肩を持ち自分の所に抱き寄せ「成る程な。
お前は、お前なりに

ワカバ（こ）で、それなりに両親のぬくもり、や色んな事を感じ
るようになったの

か・・。

夏美「ええ。まあ・・。」

ジン更に続けて「だが・・此だけは、忘れるわけやねえぜ、?」

夏美「何?」

夏美の髪を触りながらジンニヤコと笑って「お前の、居場所、は此処にもあるつ一つ事をな。」

夏美それを聞いて笑顔になり「・・ジン。」そのままジンの腕の中に自分から入つて行つた。

ジンは夏美を抱きしめた。

それは久々に2人っきりの時間だった。

しかし、それは再び・・・夏美そして、ミレイに広州の魔の手が迫つてくる

前兆でもあったのだ。

第44章。ジンと夏美久々の2人っきりの時間。完。

第44章。ジンと夏美久々の2人っきりの時間。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うござります。

さて、次章は、再び広州の事について書かせて頂く

予定です。

其れでは、次章も今章と同様にお楽しみ頂ければ

幸いです。

オマケ。

ミレイ「・・夏さん。」

ライカタバコに火を灯し只黙りそして・・

「次章もどうぞ宜しくな。」

第45章。広州のある話。（前書き）

今章は、主に広州が中心となります。

第45章。広州のある計画。

此處は、杯戸町にある某ビル。此處は広州が所有していた。そのビルの中にアジトもある。

メイランの部屋では、とある、計画、について幹部達と共に話をしていた。

メイラン「今週の土曜に、杯戸シティホテルでね沙江島財閥が主催するパーティが

あるのは皆知っていると思うんだけど・・其処に我等、広州、の邪魔をする輩が居るの

その輩もそのパーティに出席するみたいだから其処で、始末、するわ。」

すると、愛蘭が「失礼ですが・・メイラン様そのパーティの内容とそして・・

その輩の名を教えていただけませんでしょうか? 「

其れを聞いたマイラン、「『めんなさいね。愛蘭。まだ、詳しい事は話していなかつたよ』うね。

そのパーティの内容は、沙江島財閥の娘である佳織^{カオリ}の武道制覇の祝いもかねた

パーティだそうよ。」

愛蘭「え? 沙江島財閥の娘つて・・真理恵だつたんじや?」

マイラン「ああ。その子はねその佳織の妹。その子には姉が居たのよ。」

愛蘭「成る程。」と同時に「それで？その我等の今回の、^{ターゲット}**標的**は？」

メイラン「酒川真紀乃とそして・・前川カノンの姉である・・

花梨^{かりん}この2人よ。」

そして、ワカバの李組とウォッカ達の追跡をなんらく巻いた（思い込む）明杏と愛燐がいつの

間にか戻つて来て・・・。

明杏フツと笑い「成る程。。。この2人は以前我等の、ある取引を邪魔した、女達で・・・

一応警察やワカバにも、顔が、利く。そつと意味で我等の、脅威、になる。。

そつと意味でですか？メイラン様？

メイランクスと笑い、「、」名答、よ。明杏。」と続け様に「だけどね・・この花梨は

一応、警視庁の狙撃部隊に配属されていたみたいだから、ちょっと
「厄介者、よ。」

と続け様に「明杏。」

明杏「はい。」

メイラン「赤龍は？アレからどうなつてこるの？」

明杏「いえ……。それが、どうやら、行方をくらましていのやうで、……。」

其れを聞いたメイラン「そひ。」と続け様に「それで？私の妹、は？」

明杏「……未だに、ワカバ、側に付いています。どうやら……あの様子、だと

我々に‘付くつもり’など……なやうです。」

メイランフウとため息を付き「あの子もあの子で、頑固ね、。」

と続け様に「まあ・・そのうがあの子から再び、私に会いに来てく
れるでしょ。」

と更に続けて「では、皆・・今週の土曜1・3日だね。」

一同「ハツ！メイラン様ッ！」

メイラン「『苦労様』では・・一先ず解散。」

そして、それぞれ自分の部屋に戻つて行こうとした時に「ああ・・
言い忘れていたわ。

愛燐。「

愛燐「はい。」

メイラン「^{ターゲット}標的」は夜7時頃顔出す予定よ。そして・・しばらくして

多分映像公開があると思つからその時に明かりは一時消灯すると思うからその時に

「宜しくね」。

愛燐一礼をし「、畏まりました、我が主。」

そう言い自分の部屋に戻つて行つた。

一方、広州のアジト周辺では、先程明杏達を追跡していたワカバの李組とウォッカ達が

密かに待機していてその計画を、盗聴し、何と、録音、していた。

雷外ニヤリと笑い「残念だつたな、広州の面子ども・・お前等の会話は悪いが

「ちやあんと、録音させてもらつたぜ。」

其れを聞いて雷明「奴等が、気が抜けた、証拠ですね。雷外さん。」

雷外領き「ああ。そうだな。雷明。」と続け様に後部座席に顔を向
け「どうするよ?」

雷龍。

雷龍腕を組みながら「そつだな。一先ず、兄上様に^{オウガ}ご報告だな。」

と続け様にウォッカから「で?此れからどうするよ?これ以上、長居は無用、だぜ?」

雷龍「そうですね。まあ・・一先ず、任務完了、といつ事でワカバに戻りますか。」

と続け様に「ウォッカ様方はいかがなさいます?」

ウォッカ「兄貴をお迎えと報告しなきやいけねえからな・・俺達もまた着いていかせて

「 もらひつけ。」

雷龍「分かりました。」と続け様に「それでは・・また後程。」

ウォッカ「おう。」

そして、雷外に「ばれないように・・・出してくれ、出来るか？」

雷外「了解。」

そう言い無音運転でその場をすばやく後にしワカバに戻った。

第45章。広州のある計画。完。

第45章。広州のある計画。（後書き）

今章もお付き合いで下さり有難うござります。

さて、次章は、ワカバについて書かせて頂く予定です。それでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

雷外「広州の面子気が緩んだな。」ニヤリ。

雷龍フツと笑い「その様だ。上手く行けば・・

」の計画つぶせるかもな。」と続け様に

「次章もどうぞ宜しくお願い致します。」

第46章。ワカバのアジト再びと報告。（前書き）

今章は、ワカバです。

何時もより若干？長めなきが致しますが・・

最後までお付き合いで下されば幸いです。

第46章。ワカバのアジト再びと報告

アレから、広州の追跡を終えた。李組とウォッカ達はワカバのアジトに戻り、先程録音してい

た。広州のメイラン達の会話をオウガに聞かせて報告をしていた。

オウガ、その録音したテープを最後まで聞き止めて「…成る程な。その、沙江島財閥の

パーティで奴等その客2名を‘暗殺’すると言つ訳か。」

雷外「はい。ボス。」

すると、ジンもオウガの部屋に再び入ってきた。

ウォッカジンに気づき「兄貴。お疲れ様です。」と一礼。

ジン「おつ。」の度は「」苦労だったな。ウォッカ、それにベルモット。

ベルモットクスと笑い「ありがとう。でも私は、大して何もやっていないわ。」ジン。

ジンタバコに火を灯し「そうか。」と続け様に「で?奴等は?」

ウォッカニヤリと笑い「勿論。ちゃんと最後まで雷外達と、追跡、しゃしたぜ。」

と続けて「そして、奴等のアジトまでいきやした。」

ベルモット「そうしたら、奴等、面白い事、言つていたわよ。」

ジンタバコ吸いながら「面白い事、だと？」

ベルモット「ええ。」と続け様に雷外を見て「雷外。ジンにも先程
オウガに聞かせた

‘奴等の会話’の録音テープ聞かせてあげてくれる?

雷外頷き「分かりました。」と続け様に「ジンの兄さん。申し訳あ
りませんが前方へ。」

ジン「ああ。」そして、テープがあるオウガのデスクの所に行き「
再生してくれ。」

雷外領きテープを再生する。

そして、広州のメイラン達の会話が流れた。

其れを聞いてジンニヤリと笑い「成る程な。だから、いじつ等
イキ。」

雷外テープを止めて巻き戻しながら「はい。」と続け様にオウガを
見て

「ボス。どうします?」

オウガ腕を組みながら「そうだな。今週の土曜日はそのパーティに客として此方からも

何名が行かせるか。」と続け様に「あの、パーティは基本的に「出入り自由」だと

聞いたからな。」

すると、雷明「ミレイ様もそのパーティに行かれるのでしょうか？」

オウガ「多分。行くと思うな。沙江島財閥の次女とミレイは大学の友達だからな。」

其れを聞いてジン再びニヤリと笑い「ほう。だつたら・・そのパーティに行けばあいつに、会

える、しれねえって訳か。」

オウガフツと笑い「・・かもな。」

すると、ノック音がしてオウガ「入れ。」

「失礼します。」

すると、夏美が入つて來た。

オウガ夏美を見て「夏美。動いても大丈夫なのか?」

夏美領き「ええ。もう、平氣です。ご心配をお掛けしました。

あに兄様。

」

とオウガに一礼する。

オウガ「いや。。。兎に角、お前が、無事で何より、だ。」

と続け様に「夏美。お前に一つ聞きたい。」

夏美「・・・何でしょう?」

オウガ「お前、もしかして・・今週の土曜のパーティに密として進入しようと

考えていなかつたか?」

其れを聞いて夏美黙つた。

オウガ再びフツと笑い「黙つていると言つ事は、図星、だな。」と
続け様に「・・だが、

お前には悪いが今回は、駄目だ。」と更に続けて「お前は、奴等
に、狙撃、された

ばかり・・今回は、大人しく、した方が良い。‘良いな’？」

其れを聞いた夏美は若干納得していない顔で「…分かりました。」

と続け様に「失礼しました。」

そう言い自分の部屋へと戻つて行つた。

雷外その様子を見て頭をかき心の中で…。

ありやあ、夏美の姉御…、納得してねえ、な。

と呟いた。

ジンその夏美の様子を見てタバコをオウガのデスクにある灰皿に消しそして再び新しいタバコ

に火を灯し「あの様子だと、あいつ、納得してねえ、みてえだな。」

オウガため息を付き「仕方あるまい? 今回は、あいつへの、狙撃、があつたからな・・。

無理に行かせる訳にも行かんだろう。」 そう言ひ夏美の様子がアレから気になったのか・・

モニターで夏美の部屋の様子を見た。

ワカバでは、団員の様子を常に見れるようになつている。

体調等を確認する為だ。

雷外を始め、ウォツカ達がオウガのデスクにあるモニターに集まる。

そして、夏美の部屋が映し出された。

夏美は携帯で話をしていた。

雷龍「この様子だと。姉者誰かとお話をされているようですね。」

オウガ「ああ。」

すると、夏美の声も入って来て「ああ。悪いが・・今週の土曜のパ
ーティ行けそうにないんだ

。」

すると女の声で「え？ どうしてよ？ 夏？」

その声は沙江島真理恵の姉佳織からだつた。

夏美苦笑いをし「いやね。。。どうも、予想外、の事が起きたやつてさ。。。」

佳織へ「予想外、？って。。あんた？まさか。。その対立している
広州つて組織の

メンバーとやりあつたとか？？」

夏美驚いた顔で「何で分かつたの？？」

佳織ため息を付き「そん位。言わなくても、大体分かるわよ。あ
んたと付き合いは

‘本家の頃、からだからね。’

夏美其れを聞いて苦笑いをし「ハハ。大体そんな所。’

佳織「そんで・・あんたん所のボスにどうせ、大人しくしてろ」と
言われたんでしょ？」

夏美「・・」名答。

佳織「んで? 怪我は?」

夏美「左肩、左太ももかな? 撃たれたよ。’

佳織驚いてへりつ・・撃たれたですつて?あんた、大丈夫なの?ー{

夏美フツと笑いながらタバコに火を灯しへああ。何時もの、アレ、やつたから。

何とか大丈夫さ。)

佳織「そう。なら良いけど・・。」と続け様にへでも、本音で言つとあなたには

‘来て貰いたかつたな。’)

夏美タバコ吸いながら苦笑いをして仕方あんめ?兄様の”命令は基本的には、絶対、

大人しくしてろって言われたら大人しくしているしかないんだからさ。』

佳織其れを聞いて『でも・・あんたの、性格上、大人しくしている様には思えない

んだけど??.』と笑いながら言った。

夏美「・・おいおい汗」

と心の中で

チエ。当たつてやがんの・・。

と呟いた。

すると佳織茶化しながらでも、残念だな。あんたの大好物の、
フカヒレ、せつかく用意し

たのにな。。。

夏美「んなあ？！」

ま・・マジかよ。

くそー！

愛燐の奴め・・、余計な事を、ー！

と心の中で悔しがっていた。

佳織まるで何かを思いついたのか「ねえ・・あんたさ妹いたわよね
? {

夏美我に戻りへん? ああ。いるよ。有理。 }

と続け様に「って? お前さんまさか? {

佳織「うん。 そのまさか。 有理ちゃん招きたいんだけど・・うちの
妹も何故か分からない

けど・・会いたがっているし・・。 ね? お願ひよ? 夏。

{

夏美「悪いが・・・一人では行かせんぞ?」

佳織「もう一つ相変わらず、過保護、なんだから。」

と笑った。

夏美「ほっとけ!」と続け様に「有理の予定もあるからな・・・もし、何も無かつたら

多分行かせる。」

佳織「え? 多分? ?」

夏美再びタバコを口に加え直して「しゃーねえべ? 私しゃあが行けないんだから・・

念の為誰かと一緒に行動させないと……心配なんだから。」

其れを聞いた花梨「ねえ・・夏。」

夏美「はいよ。」

佳織「ひょっとして・・・うちのパーティあんたん所の対立している広州の組織のメンバーが

客にまぎれる可能性があるって事??だから、有理ちゃんを一人で行かせないつて・・。」

夏美其れを聞いて一瞬驚いたがすぐに何事も無かつたかの様な顔をしてフツと笑い

「大丈夫さ。お前さんは、気にしなくて良いよ。」

佳織「本当に？」

夏美「ああ。」と続け様に「他には、誰が来る予定??」

佳織「ん? 他に?? 妹の大学の友達が何人か来る予定だけど。。。」

夏美「名前分かるか??」

佳織独自の仮の密リストを上げ「んとね・・前川カノンちゃん。 龍崎ミレイちゃん。

後は・・・此れは学科違いだけど、田川美紀ちゃん。この3人かしら?」

夏美

ミ・・ミレイの奴も行くのか??

ミレイまで行くと・・・奴等、元見つかる可能性大と・・

下手すれば・・ジン達とも・・・。

すると、佳織「夏?へど」ひしたの??

夏美再び我に戻り「ああ。すまん。で?学科違うの子も来るって言つていたが・・

その子は何学科??

佳織「それが…私にも分からぬのよ。只・・真理恵の小さい頃のお友達って

事で。」

夏美「…成る程な。」

佳織「じや・・夏。そいつ事で有理ちやんに聞いておこへね。」

夏美「ん?ああ。一応言つておく。」

佳織「じや・・私取り合はずこれから今週の土曜のパーティーの杯戸シティホテルに

下見行って来るから。」

夏美「了解。じゃ・・また。」

佳織「うん。またね。」

そう言い携帯を切つてタバコを灰皿に消しベットに横たわった。

と同時にドアについてるカメラを見て音がした為苦笑いをして「あれ
じゃ・・

兄様に見られているな。」と言つた。

と同時に。

ん??

待てよ??

今・・ジン兄様の部屋にいるのよね?

下手すれば・・今の私と佳織の会話が筒抜けに??

そうなつたら・・

ある意味・・やばいわね。

と呟いていた。

第46章。ワカバのアジト再びと報告。
完。

第46章。ワカバのアジト再びと報告（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うござります。

さて、次章も、ワカバについて書かせて頂く予定です。

次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ

夏美「・・・はあ。何かある意味やばい?事に

なってきたな。」

と続け様に微笑んで「次章もどうぞ宜しく!」

第47章。ワカバでの夏美と有理の会話。（前書き）

今章では、橘姉妹の会話が主になります。

今章も何時もより長めだと思いますのでその辺も

ご了承頂きたいと思います。

第47章。ワカバでの夏美と有理の会話。

アレから、佳織との会話を終えた夏美は橋家本家から有理を自分の部屋に呼び出し、杯戸シテ

イホテルで1・3日土曜に行われる沙江島財閥のパーティの事を話した。

有理「へえ～。佳織さんがね。」

夏美再びタバコに火を灯し「ああ。そうだ。あいつの妹がお前に会いたいんだとさ。」

有理「そつか。でも、真理恵さんには前に何かしらお世話になつたから・・

もし、会える機会があれば会いたいと思っていた所。」

夏美タバコ吸いながら「そうか。」と続け様に「でも、1人では行かせられんぞ？」

其れを聞いた有理笑いながら「・・姉さんならそう言つと思つた。」

と続け様に「何なら、姉さんと一緒に言つのは？？？」

夏美苦笑いをして「それがさ・・悪いけど、出来んのさ。」

有理「え？どうして？？」

夏美「兄様に今回は、大人しくしていろ、って言われたから・・。」

有理「お兄様に??なら、しうがないね。」と続け様に「じゃ・・・
・・誰と行けば良いの

???

夏美腕を組みながら困った顔で「そうだな。誰が良いか・・・」

すると、夏美的部屋のノック音がした。

夏美「はい。」

すると男の声で「夏美?俺だ。ライフェイだ。入って良いか??」

夏美「ああ。ライフェイか。良いよ。」

そして、ライフェイが入つて來た。

と続け様にライフェイ「夏美、13日の土曜。俺で良ければ有理に付き添つて行つてやるうか

?俺、その日多分オフだったと思つからね。」

夏美「あ・・・。本当に?じゃ、お願いしようかな。」

と続け様に有理を見て「有理。ライフェイが付いてくれるみたいだ
けど・・

良いかな？」

有理頷き「うん。良いよ。」と続け様にライフェイを見て「じゃ・
ライフェイ兄さん。

お願ひしてもらつても良いかな??」

ライフェイ「ああ。構わないさ。」と続け様に「その前に一応念の
為、スケジュール確認

していくるな。」そう言つて先ず自分の部屋に戻つた。

有理「じゃ・・私、ライフェイ兄さん所行つてくる。」

夏美領き「ああ。気をつけてな。」

そう言い有理は夏美の部屋を後にし、ライフェイの部屋に向かった。

そして、夏美携帯を取り出し電話をかけた。

第47章。ワカバでの夏美と有理の会話。完。

第47章。ワカバでの夏美と有理の会話。（後書き）

今章もお付き合いで下さり有難うござります。

次章は、夏美とその電話相手について書かせて頂く

予定です。では、次章も今章同様にお楽しみ

頂ければ幸いです。

オマケ。

夏美「・・・早く出でよ。笑・・・」

と続け様に「次章もどうぞ宜しく！」

第48章。夏美の電話の相手。（前書き）

おはようございます。

今章では、夏美とコナンのやり取りが主になります。

後、ジャンル違いで大変に申し訳ありませんが・・・

ライチュウも出させていただいております。

（作者が好きなもので苦笑・・・と同時にこのライチュ

ウは人間の言葉を話します。）もし、このキャラの

出演が嫌いな方がいらっしゃいましたら恐れ入ります

が、この章（多分他にも出てくる可能性も？）は・・・

御覧にならない方が宜しいか

と・・・。

尚・・・事前に申して置きますが、此れは

コナンの小説です。基本的にジャンル違いのキャラ

は此れだけとなります。

第48章。夏美の電話の相手。

アレから有理を見送つた夏美は携帯で誰かに電話をかけていた。

「もしもし。江戸川ですけど・・・」相手は「ナン」だった。

夏美タバコ吸いながら「ああ。『ナンか?私しゃあだよ。夏美。』

「ナン」「あ・・夏美姉ちゃん?どうしたの?」

と「ナンはワカバに居る事を何となく悟つてやして、恋りへジン達も居るだろつ

と思い何時もの様に子供らしく振舞う。

夏美心中で笑いながら・・。

ここつ本当に、アレだな・・子供のフリ上手いよな。と呟いた。

と同時に「なあ・・。唐突で悪いんだが・・お前さん、今何処に居る?/?」

コナン「え?今?、何時も屯たむろしている場所だよ。」

其れを聞いて夏美「そうか。」と更に続けて「唐突で悪いんだが、今からちょいと

「会えねえか？」

コナン「今から…良いよ。遊びしたの？」

夏美「ああ。ちよいとな。」と続け様に「此処では悪いが…」
「話せない」んだ。

今から、そつそつ回かうよ。」

コナン其れを聞いて心の中で・・・。

その様子だと多分、奴等、居るな。と悟つた。

そして「うふ。良こよ。じゃ・・後で、来てくれる、??」

夏美「〇〇。今行くよ。」と続け様に「じゃ・・また後で。」

そう言い電源を切つてそして、「ライチュウ。」

すると、一匹の茶色いねずみが現れて「はい。夏美様。」

夏美「ちよいと悪いが、此れから人に会つてに会つてくるから、留守番、頼むよ。

もし、ライフェイと有理が此処に戻つたら、人に会いに行つた、と伝えてくれ。」

ライチュウ「分かりました。夏美様。」と言つた後ふと我に戻り慌てて

「つちよ、な・・・夏美様？！良いんですか？？広州の奴に撃たれたそうじやないです

?！それでもって、お兄様^{オウガ}に大人しくするように言われたのでしょう？！」

夏美笑いながらタバコを灰皿の上で消し「大丈夫だろ？少し出で？それに其れは、あのパー

「ティ、に限つての事だらうし……それに、ちよいと此れ、大事な話、だからね。此処では

「話せないんだ。」

ライチュウ其れを聞いてキヨトンとした顔で「どうしてですか？」

すると、夏美しゃがんで小声で「今、彼が、居るからさ。下手に話せない、んだよ。」

と苦笑い。

ライチュウもまるで納得したかの様に「ああ。成る程。」と小声で返した。

そして、夏美立ち上がり出かける支度して事前にテーブルの上に用意してあつた

愛車の鍵を持つ「んじゅまー」の事で…。宜しく…」

ライチュウ「はーい!了解です!」

そのまま夏美を見送った。

と同時にライチュウ心中で

夏美様が、広州と再び遭遇しませんよ」・・・。

と祈つていた。

と同時に夏美の部屋の窓を見て「あ・・・。」

黒のシボレーが止まっている事に気づく。

ライチュウ窓から降りて引き笑いしながら

「あれ・・・多分、あの男^{かた}の愛車だな。」

と続け様に「ジハして・・・此処に居るのよ。」

と呆れ笑いしていた。

と同時にきっと・・・お兄様^{オウガ}方も御覧になられているはず・・・。

此れが分かつたら戻り次第、多分・・・夏美様、ビヤされる、んだろ
うなあ・・。

そして、ため息を付いた。

第48章。夏美の電話の相手。完。

第48章。夏美の電話の相手。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章は、夏美が再び、あの場所、に行く事と
また、再びワカバ編について書かせて頂きたい
と思います。

オマケ・・・。

ライチュウハウとため息付き「まつたく・・

私のご主人様は色々と無茶ばかりされるんだか

ら・・。」と続け様に「あ・・皆様。突然の

登場で大変に失礼致します。私、ジャンル違いですが

夏美様にお使えさせて頂いております。ライチュウヒ

申します。何で?人間の言葉話せるのかって??

そ・・其れは、自分にも分からぬのです（笑・・・）」

と続け様に「其れでは次章もどうぞ宜しく

お願い致します。」

第49章。夏美、阿笠家再びワカバ。（前書き）

今章では、夏美が再び阿笠家に登場してきます。

主に「ナン達とのやり取りになります。

何時もより若干長丁場にならうですが

お付き合いで頂ければ幸いです。

後・・ワカバも再び出でますが、何かある意味？

大変な事？になっています（笑・）

第49章。夏美、阿笠家再びワカバ。

アレから、ワカバでの「ナ」の会話を終えた夏美は愛車である青のベンツに乗り

米花町にある阿笠家に再び向かいそして、着き入つていった。

すると、哀が入つてきて「「んにちわ。夏美さん。」

夏美、哀を見て軽く挨拶をし「やー哀ちゃん。」と続け様に「あり
?」「ナ」は?」

哀ワビングにあるソフナーを見て「あつちに座つてゐわ。」

夏美「ああ。有難う。」と続け様に「そひ言えれば博士は??

哀「博士なら。今頃多分買い物に東都^テパートに行っている頃でしょ
うね。」

夏美「そうか。」とコナンに近寄り「よう一。」

コナン「おう！来たか！待つてたぜ？」

と続け様に「アレから、何かあったのか？」

夏美「ああ。取り合えず、広州には何らかの動きが、あつた見たいだ。」

そう言い、「ナンの田の前に座る。

そして、袁台所から麦茶を3つ用意し「はい。江戸川君。夏美さん。」

「ナン」「サンキュー。灰原。」

夏美「有難う。」 そう言い袁から麦茶を受け取り飲み始めた。

すると、「ナン」「んで????、広州の動き、を何で俺等に??。」

コナンは疑問を持つ。

夏美「ミレイの奴が相変わらず、奴等に狙われているからだ」。お前さん達も私等に

関わった以上、ほっておく訳にもいかないだろう?」

コナン我に戻り「ああ。そうか。」と続け様に「しかも・・ジンの奴もあいつを連れ戻そうと

必死みてえだしな。」

哀も麦茶飲みながら「・・成る程?広州を一先ず阻止した後・・
彼等」と言つ訳ね。「

夏美「ああ。」と続け様に「ちょっと失礼。」そう言いいつもの様にタバコに火を灯し

ながら、「此れは、私が偶然にも広州の仲間に遭遇しそして、私が盗聴器と発信器をその

仲間の1人にはれない様につけそしてうちん所の連中に追跡させた
んだが・・・。

この後、面白い事、が分かつたみたいだ。」

哀「面白い事、？」

夏美タバコを吸いながら「ああ。」広州の奴等、は今週の13日の
土曜に杯戸シティホテルの

沙江島財閥が主催するパーティに客として紛れパーティ客2名を暗

殺する予定だ。」

「ナン其れを聞いて「何ッ?! 其れ本当か?！」

夏美顎也「ああ。」

哀「で? その情報何処で?」

夏美「うちの弟分がその会話を録音していたんだよ。其れを私しゃあも兄様の部屋のドア越し

から聞いていたのさ。」

「ナン「んで?」ターゲット標的は?」

夏美携帯灰皿を用意しながら灰を落とし「多分、女2人だつたじゃ
ないか？」

1人は、酒川真紀乃で・・もう1人は、前川花梨だつたか。」

哀「ねえ・・その酒川真紀乃つて・・あのテレビ女優？」

夏美タバコ再び口に加え直し「ああ。でもまあ・・ごく一部の人し
か知られていない

見たいだからそんなに有名ではないらしいが・・。因みに、前川花
梨はミレイの奴の

大学の友達である前川カノンの実の姉。」

コナン「あの・・沙江島財閥と同様に有名な前川財閥の娘だろ?」

夏美頷き「！」名答。

哀「でも・・何故彼女等が広州の、標的、にされなければならないのかしら?？」

夏美「さあ・・その辺は、私しゃあも詳しくは知らんが、この2人を、標的、にした

つて事は・・広州の連中にとつて、邪魔な存在、と言つ事は確かだよ。」

と続け様に「後、このパーティは参加自由ならしい。そんで・・此れ主催する沙江島財閥の

長女である佳織と話しかけてね。//ハイも一応呼んだりしき。

コナン哀其れを聞いて驚いた。

そして、コナン「じゃ……もしかして？」

夏美「ああ。下手すれば……広州の面子おろか……ジンとも再会してしまうかも

しれねえって事だよ。」

其れを聞いた哀は只黙っていた。

そして、外ではいつの間にかワカバに止めてあつたはずの黒のシボレーが止まつていて

その黒のシボレーの持ち主である。赤井がいつの間にか盗聴器を仕掛けていたのか・・

イヤホンで夏美達の会話を聞いていた。

一方、此処は再びワカバ。

アレから、夏美を見送ったライチュウはオウガに呼ばれてオウガの部屋に居た。

そしたら、案の定、ジン達も居た。

オウガライチュウの話を聞いて、「成る程な。」と続け様に「でも、何で此処に呼ばないん
だ？」

ライチュウ「い・・いや。その・・・夏美様の事だから多分、気晴
らしでしょう。」「

「まかしながら笑顔で言った。

オウガ「そうか。」と続け様に「まあ・・あいつの事だ多分そうだ
ろうな。」

と返した。

すると、ライチュウ「で・・では、お、お兄様私は此れで。」

そう言ひオウガに一礼し夏美の部屋に戻りつとしたその時ジンに

「おい。」

ライチュウ、ジンに声を掛けられて急に背筋が伸び恐る恐る後ろを振り向く

「ハコと笑しながら「は」。何で、なぜこましょつ・ジン様。」

すると、ジン、ライチュウの前に来てしゃがんで「ヤリと笑い「本當に、それだけか、?」

ライチュウ心の中で。。。

ヤ・・・やバイよ?ジン様、疑つてこるよ、

でも・・何とか、押し通さなきや、

ライチュウ「も・・勿論ですよ。ジン様。」

と続け様に「わ・・私の主人は本当に、氣まぐれの方、でして・・。

「

ジン「ほう。そうか。ほほあにつあの小さな探偵のガキとつるんで

いのそうだが・・?

ライチュウ「まあ・・色々とあります・・・。」

と続け様に「ちょ・・ちょっと、私も、野暮用、を思い出したので此れにて

失礼!!」そう言ひ今度こそオウガの部屋を後にしようとしたその時ジンにヒョイと持ち上げ

られタバコに火を灯しながら再びニヤリと笑い「あーと!逃がさねえぜ?

多分その様子だと、あの小さな探偵のガキには必ず、裏がありそうだからな、あ。

そいつを吐いてもうつまでも悪いが・・此処に居てもうひせ～ライチ
ユウ。」

ライチュウ其れを聞いて引きつり笑いをし心の中で・・。

な・・夏美様ああは・・早く帰ってきてくださいよ！

私一人ではこの方を騙し通すには無理があつた様です～！。

と叫んでいた。

第49章。夏美、阿笠家再びワカバ。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うござります。

さて、次章は、取り合えず夏美がワカバに戻り、

そして・・土曜のパーティーの事について書かせていた

だきたいと思います。次章とその次の章では恐らく

また長丁場になると思われますので・・

前編と後編に分けさせて頂く予定です。

其れでは、次章も今章と同様にお楽しみ頂ければ

幸いです。

オマケ。

夏美「・・ライチュウの奴大丈夫かな？」

と続け様に「次章もどうぞ宜しく！」

第50章。夏美、ワカバに戻る。そして・・・沙江島財閥のパーティ前日（前）

今章は、再びワカバそして杯戸シティホテルで行われる沙江島財閥のパーティの前日として書かせていただきました。此方は前編、後編と分けさせて頂きます。

この章は主にワカバ中心となっています。

第50章。夏美、ワカバに戻る。そして・・・沙江島財閥のパーティ前日（前）

此處は、再びワカバのオウガの部屋。

ライチュウは、ジンに捕まれ若干冷や汗をかけていた。

ウォッカ其れを見て「ヤリと笑い「どうしたんです？ライさん？顔に冷や汗かけてますぜ？」

ライチュウ笑いながらウォッカに「い・・いや・・私は汗つかきなもので・・・」

と何とかしてほぐりかそうとする。

と同時に心の中で密かに主人である夏美の帰りを心待ちしていた。

すると、ベルモットがクスと笑い、「え・ジン。あまりその子、苛めないで、

くれるかしら? せり法えてしまつてはしちよ~」

ジンタバ口吸いながら「やうと笑い「別に」、苛めぢやいねえぜ?
?俺は只夏美の変わりに

「こつを口綴がつてやつてくるだけだぜ?」そしてライチコウを見
ながら

「なあ・・?ライチコウ?」

「ライチコウ「は・・は」。」

と同時にジン「そろそろ・・・あのガキ、について吐いてくれねえか？」

ライチュウ「あ・・・あのガキ、つて??」

ジン再び「ヤリと笑い「江戸川コナンについてだよ。」

ライチュウ其れを聞いて必死に隠そうと「な・・何を言つているんです??」ジン様。

が、彼は「・・」普通の小学生、ですよ~。」

ジン再び「ヤリと笑い、「ほう。そつか。」

ライチュウ。

ヤツ・・ヤバイよー！

ジン様本当に疑つてゐるよ？

ど・・どひじょわ。

もう・・押し切れない。

すると関西弁で「良いや。そいつの並ひてゐ事は本当の事やで？」

すると、全員その男の所に目をやつた。

オウガ「平次君。」

其處には服部がいた。

服部「すんまへんな。オウガハン。勝手にお邪魔してしもつて。」

オウガ微笑んで「何。構わないさ。」

そして、服部、ジンに近づき「あのボウズはな・・・上藤の遠い遠い
遠い親戚やねん。

似ても当たり前やがな。」と続け様に「だから・・・そいつ離して
やつてくれへん?」

ジン最初に服部をじっと見ていたがフツと笑い「良いだろ?。」と
続け様に

「しかし、西の探偵。俺はまだ、あのガキの事を只の、小学生、と
は完全に信じちゃいねえ

「んだぜ?此れだけ言つておくぜ?」とタバコ吸いながら再びニヤリ
と笑つた。

服部、ジンからライチュウを受け取り、「おおきー。」と続け様に「オウガハン。」

オウガ「何だ?」

服部「明日の土曜杯戸シティホテルで行われる沙江島財閥のパーティ俺も

行つてええかな?」

オウガ「ああ。構わんぞ。」と続け様に「頼むから、夏美は、大人しくさせておいてく

れ。」

服部其れを聞いて「まあ・・・一応釘さしておくわ。」と微笑んだ。

一方、偶然に其処に居たりヤン兄弟が「ねえ。シユウワイ兄さん。」

シユウワイ「何だ？ シユウチエン。」

シユウチエン「なつさんの、性格からして、大人しくしていると思う？」

其れを聞いてシユウワイ腕組みながら「うーん。無理じゃねえ？ 夏姉

は「きお父さんに性格が似ているから・・広州の面子絡みになると・
・・。」

すると「大丈夫だよ。今回ばかりは、大人しくしているからよ。」

その声の主に踏一斉に振り向いた。

すると、ライチュウの顔が一斉に明るくなり、「夏美様~~~~~」
~~~~~！」

と服部から離れ勢い良く夏美の所に向かつた。

すると、夏美ライチュウを抱え自分の右肩に乗せ右手で頭を軽くポンと叩き

「よひ。相棒。『若狭さん。』

ライチュウ「お帰りなさい。」

夏美「おひ。只今。」

ショウチョン「な・・なつせん? 何時帰つてたの? ?」

夏美笑いながらショウチョンを見て「、つこさつきだ」。

ショウワイヤ「んで? ナン君と阿笠さん所で何話したんで?」

夏美フツと笑い「何・・单なる、普通の話だよ、。ショウワイヤ。」

シユウワイ其れを聞いて笑いながら更に突つ込み「本当に？そんだけですか？夏姉？」

夏美笑い換えして「何言つているんだ？本当にそんだけだよ？シユウワイ。」

と続け様にライチュウを見て「さて、そろそろ部屋に戻るか？相棒？」

ライチュウ頷いた。

と同時に服部を見て「平さんももし宜しければ来ます？」

服部「ああ。お言葉に甘えさせてから行かせて貰おうか。」

と続け様にオウガ「夏美。」

夏美「はい。何でしょう? あに兄様?」

オウガ「お前を疑つてはいる訳ではないんだが、お前・明日のの土曜

‘本当に大人しく、してくれるよな?’

夏美フツと笑い「そんな、‘大丈夫’ですよ。’心配なさらなくて  
も。’

と続け様に「それでは、我々は一先ず此れで。」

そう言いオウガに一礼しオウガの部屋を後にし自分の部屋に戻つて行つた。

一方廊下ではライカがタバコを吸いながら腕組をし夏美達をジッと見ていた。

と続け様に「相棒。まさか、お前さん・・・・・。」と呴いていた。

第50章。夏美、ワカバに戻る。そして・・・沙江島財閥のパーティ前日（前編。）完。

## 第50章。夏美、ワカバに戻る。そして・・・沙江島財閥のパーティ前日（前）

今章もお付き合い下さり有難うござります。

さて、次章は今章の後編について書かせて頂きたいと思います。其れでは次章も今章同様お楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

夏美「え？ジンがコナンの正体に疑い持ち始めている？」

ライチュウ「は・・・はい。でも、平次様のおかげで何とか切り抜けましたが・・・汗」

夏美「・・・成る程ね。」

ライチュウ「で？夏美様、この後どうなるのでしょうか

？？」

夏美タバコ火を灯し「まあ・・作者さん次第だらう

ね。」と続け様に次章もどうぞ宜しく！」

## 第51章。夏美、ワカバに戻る。そして・・・沙江島財閥のパーティ前日（後

今章は前章の後編となります。

主に・・・再びワカバでのお話です。

此方も長丁場となつております。

## 第51章。夏美、ワカバに戻る。そして・・・沙江島財閥のパーティ前日（後）

アレから、オウガの部屋に戻った夏美達。

夏美はライチュウから報告を受けていた。

夏美「な・・何?!--ジンが、あいつの正体に、薄々勘付いているだと?!--

其れ本当か?!--ライチュウ?!--

ライチュウ頷き「は・・はい。しかし、平次様が何とか、巻いてくださつたので、

特に・・・今の所、問題は無いかと」。

夏美タバコに火を灯し頭をかきながら顔しかめて「・・・不味いね  
」。

「

コナンが、新一、とばれたら・・・。

ジンの事だから、周りの人間を・・・。

と嫌な考えが夏美の頭を過ぎった。

すると、ライチュウ「い・・いがいたします?? 夏美様?? ??」

と続け様に「あの方の事ですから、ばれるのも・・・時間の問題  
かと。」

(ライチュウの言つの方はジンの事。)

夏美タバコ吸いながら「・・・確かにね。」と続け様に「でも、今は、明日のパーティ

の事について考えよう。広州の奴等は何らかしらの手を使って標的を始末するからね。」

其れを聞いて服部「夏美。」

夏美「はい。」

服部「お前は、‘本当に行かへんのか’？」

夏美「ええ。」

服部「妹も行くんやろ?..?..」

と続け様に「多分・・広州の奴の事やから・・お前の妹も狙つてくると思ひで?..」

すると、夏美的部屋にライフケイが入つて來た。

ライフケイ「夏美ッ!」

夏美ライフケイの所を振り向き「ビビった?..!」

ライフエイ「今さつつき情報部に野暮用があつて戻つたんだが・・。

明日のパーティの広州の標的がもう一人増えた。」

夏美冷や汗かきながら「誰だ？」

ライフエイ言こぼりながら「お前の、妹、だ。」

夏美其れを聞いて驚いた。

そして「ば・・馬鹿なッ！何で？！妹が？！」

「ライフ＝イ「恐らく、メイランはお前が自分の所に来ない限り、お前を苦しめる為」に

「お前の、身内、をやうこいくんだるひづ。」

夏美「・・クソッ！…！」そつ言ひタバコを乱暴に灰皿に押し当て揉み消し、

「兄様の所に行つて来る＝ライフ＝イ、ライチュウは平さんと一緒に悪いが此処でまだ

「待機してくれ！」。

ライフエイ「了解！」

そして、夏美オウガの部屋に再び行き入って行つた。

オウガ「夏美。どうした？」

夏美「兄様ッ！お願いがござりますー。」

オウガ「何だ？」

夏美「明日の沙江島財閥のパーティ、やはり私も行かせてください

！…「

其れを聞いてオウガやジンを除くワカバのメンバーが驚いた。

シユウチエン「お・・おいおいーなっさん！前銃撃されたのに・・

無茶だ！その体で行くなんて！」

続けてシユウワイ「そ・・そつですよー何急に言い出すんです？！  
夏姉！

危ないッすよ！」

夏美「・・それでも、行かなきゃならないんだよ。」そりや・・当  
初は兄様のご命通り

此處で大人しくしょつと思つたさ。」

オウガ「一応、訳を聞こつか?お前自身が行くと言うと、何かあつたんだろう?」

夏美落ち着きを取り戻し「はい。此れは・・ライフェイからの今入つた情報です。

明日の沙江島財閥のパーティの「標的」がもう1人増えたんです。」

オウガ其れを聞いて驚き「何?本当か?」

夏美頷いた。

オウガ「それで・・その「標的」は?」

夏美「・・・私の、妹、です。」

オウガ其れを聞いて更に驚いた。

夏美「明日、実は妹もライフェイと同伴で行く予定となつております。」

しかし、当初は行かせるのを止めようとしたのですが・・・

佳織がどうしても私の妹と佳織の妹を会わせたいといつ希望もあります。  
まして・・。  
「

オウガ「・・・断る訳にも行かなくなつた・・・。そう言つ訳か。」

夏美再度頷き「ええ。」と続け様に「ですから・・お願いですッ！兄様ツ！

『命令違反は重々承知！しかし、‘身内’が標的にされた以上・・私も黙つて見ている

訳にも行きませんッ！』命令違反の罰は受けますッ！ですから・・私にも行かせて下さ

い！』と必死にオウガに頼み込んだ。

オウガ其れを聞いて「・・夏美。」

と続け様にフツと笑い「‘俺の負けだ’お前なら・・やつらつと思っていたよ。’罰は『え

ないから安心しろ。」と続け様に「・・だが。夏美此れだけは頼むから約束してくれ。」

夏美「、己の責務を全うし無事にワカバに帰還せよ。」

オウガ其れを聞いて再び驚いた。

夏美フツと笑い「其れが・・我々、ワカバの決まり、ですよね？兄様。」

オウガフツと笑い換えして「・・そうだったな。」

そして、夏美改めて「この度は」許可頂き有難うございますーこの

橋夏美！

明日の任務を全うし・・此方に無事に帰還する事をお約束致しますツ！

我が主陳・オウガ様。」

オウガ頷いた。

夏美「・・其れでは、私は此れで。」

とオウガに一礼し部屋を出ようとしたその時ジンに「夏美。」

夏美ジンに振り向きフツと笑い「大丈夫。ちゃんと戻るから。」

そう言い今度こそオウガの部屋から自分の部屋に戻った。

オウガ背もたれに身を預けながら苦笑いをし「やつてくれる」と  
思つたぜ。」

シユウチエン「・・此れで、宜しかったんで、?ボス?」

オウガ「致し方あるまい。夏美自身・・まだ、あの事、が忘れなかつたのだろう。

妹まで広州に、奪われてしまつたら、あいつもあいつでやるせない  
気持ちに

‘なるだらうし’。もつと‘自分が許せなくなつてしまつだらう’。

」

すると、ジン「オウガ。」

オウガ「何だ?ジン?」

ジン「明日のパーティ俺も行つて良いか?」

オウガ「…心配か?」

ジンフツと笑い「ああ。一応な。」

オウガフツと笑い返し「お前の好きにするが良いさ。」

ジン「有難うよ。」と続け様に「ウォッカ。明日のパーティ俺達も  
行くぞ。」

ウォッカ「了解!」

ベルモット「じゃ・・明日、私も暇だから付いて行かせてもりつわ。  
」

と続け様にジンを見て「良いかしら？ジン？」

ジンタバコに火を灯し「好きにするが良いさ。」

ベルモットもタバコに火を灯し「有難う。」

そして、オウガは団員の様子をモニターで見た後再び夏美の様子を見ていた。

夏美へと・・言う訳だ！明日、私も行く事になつた！』

其れを聞いてライチュウへな・・夏美様？！だ・・大丈夫なんですか？？』

夏美再びタバコに火を灯しニヤリと笑い「ああ。大丈夫だ。それに。  
・」の左肩の銃口は

‘過去の物、だから。。平氣だ。’

ライチュウ「さ・・左様で。’

と続け様にライフェイを見て「そつ言つ事だー・ライフェイー・’

ライフェイ「了解した！」

夏美「悪いね。。。別にお前さんを信用していない訳じゃないんだ。  
此れだけは

誤解しないでくれ。’

ライフエイド<sup>イ</sup>頷き<sup>ハ</sup>大丈夫だ<sup>！</sup>俺氣<sup>に</sup>して<sup>い</sup>ない<sup>！</sup>

服部フツと笑い<sup>ハ</sup>取り合はず<sup>、</sup>決まりやな<sup>。</sup>

続け様に<sup>ハ</sup>あいつ等来るやうつか?

夏美タバコ吸いながら<sup>ハ</sup>多分<sup>。。。</sup>来るでしょ<sup>う</sup>。あいつ等の事ですから<sup>。。。</sup>

(あいつ等=コナン、哀)

と続け様に服部「さよか・・・んで?あの姉ちゃんは??」

(あの姉ちゃん=ミレイ)

夏美領き「多分・・・来ると、思います。大学の友達が居るそうですがから・・。」

服部領き「となると・・・下手すれば・・せつきからオウガハンの部屋に居た

オウガハンの、友人、も来る可能性ありやな。」

夏美再び領き「自分も同感ですー平さんー下手すれば、鉢合せ、になるでしょ。」

服部「せやな。」と続け様に「じゃ・・俺一先ず自分の部屋に戻るわ。何かあつたら・・

「いつでも来いやー。」

夏美「はい。お疲れ様でした!」

そう言い服部に一礼しそして服部はワカバに宛がわれた自分の部屋に戻つていった。

ライフエイ「じゃ・・俺も取り合えず部屋戻るわ。有理もまだ居るし。」

夏美<sup>なつみ</sup>「いや。。。有理に、説明、を頼む!」

ライフエイ「良いのか、?」

夏美<sup>なつみ</sup>「仕方ないさ。。。」

ライフエイ「了解した!じゃな!」

ライフエイ自分の部屋に戻つて行つた。

夏美<sup>なつみ</sup>「ああ。また明日。」

そして、夏美ライチュウに向ふお前も行くなら・・明日の支度しておきな。』

其れを聞いたライチュウ敬礼をして了解しました！――

そう言い準備を開始した。

そして、自分の部屋の窓を見てへ・・いよいよ、明日、か。

と同時に携帯を取り出し佳織に連絡を入れた。

第51章。夏美、ワカバに戻る。そして・・・沙江島財閥のパー  
ティ前日（後編。）完。

## 第51章。夏美、ワカバに戻る。そして・・・沙江島財閥のパーティ前日（後

今章もお付き合い下さり有難うござります。

さて次章は、沙江島財閥のパーティに付いて  
書かせて頂く予定です。

此れは・・・三部?辺り??に分けさせてかかせて

頂く予定です。其れでは次章も今章同様に

お楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ・。

「ナン」「ねえ・・作者さん。」

「何?」「ナン君?」

「ナン、」いの小説何章まで続く予定？？」

乙「わ～あ。何章までだろ？ね。だけど・・・。

多分後しばらく？？したら終わるかもよ？？？」

口ナン「やうなの？？」

乙「・・多分。あ、予告はちやんと出すからね・・。」

と続け様に「次章もどりつむ宜しくお願ひ致します。」

## 第52章。沙江島財閥のパーティ当口。（前編。）（前書き）

今章では、夏美達が沙江島財閥のパーティに行く日を書かせて頂きました。と言いましても前編と言ひ事で触りみたいな形になりました。

此方は多分3部位？？に分けさせて書かせて頂く予定です。此方も長丁場です。

## 第52章。沙江島財閥のパーティ当口。（前編。）

そして、こよこの中の日がやつて來た。

今日は、12月13日（土）。

沙江島財閥の長女佳織の武道制覇記念のパーティである。

場所は、杯戸シティホテル。

時間は、夕方5時から夜の10時位となつてゐる。

夏美はアレから佳織との会話を終えそして、ついでにコナン達にも連絡を入れた。

そつしたら、コナンも哀を連れてそのパーティに來るとの事。

夏美は、ジン達が来る可能性もある事を強く伝え、「警戒」する事も伝えた。

そして、広州のメンバーも

そうしたらコナンから「了解!」との返事が来た。

そして、コナンとの会話を終えた。

夏美再びタバコに火を灯し「・・・ミレイ大丈夫かな?」と呟いていた。

一方、此処は米花町のミレイの自宅があるマンション。

ミレイは事前に、真理恵から誘われていたので行く事を決めていた。

と同時にパーティが夕方5時からと言う事もありまだ時間があった為

ベットの中でもだ寝ていた。

すると、再びまたミレイに、闇の夢、が出て來た。

辺りは再び雪。。。

とある日の大学の下校途中で真理恵とカノンと一緒に帰つて行つた。

路地裏で黒猫が出て来てミレイを見ていた。

と同時に米花町の国道に黒のポルシェ356Aが止まつていつた。

ミレイ達はその黒のポルシェ356Aを通り過ぎる。

そして、その運転席に座つているジンがミレイを再び見つけていて。

「、平和ボケも、終わりだ。あ・・・夢から覚めて再会を祝おうじやないか。

俺達の、相応しい、闇の場所で・・・。

ガチヤリ。

ジン一ヤツ「なあ・・・・・~!!」ノヤ~。」

そしてガバッとベットから起き冷や汗かきながら頭をかきフツと笑い

「もひ・・・。最近、こんな夢、ばかり。

と同時にベットの側に置いてあった写真を取りその中に入っている写真を見て

「・・・琢磨兄さん。」

龍崎琢磨ミレイの実の兄。

だが・・・ある日に玲愛蘭に殺された。

琢磨はまるで、ジン、と雰囲気そして顔が似ていた。

ミレイ「ねえ・・・。琢磨兄さん。やつぱり私と、闇、って切つても切れない関係

なのかな？」と続け様に「私は、どちらの人間、？？」

ねえ・・教えてよ？

兄さん。

と写真に写っている琢磨に問いかけた。

すると、ミレイ写真盾をベット側に置き再びフツと笑い、「答えた  
くとも、‘答えられない’

・・・か。  
」

そつ言いリビングに行きタバコに火を灯した。

そして、時計を見て「まだ・・朝の11時か。」

と眩き窓を見た。

天気は、雪、だった。

ミレイタバコを吸いながら「・・私が窓を見ると外は、雪、ばつか。

‘何でだらうね、？」

とも呟いた。

そしてミレイの携帯が鳴った。

ミレイ携帯を取り出し、ディスプレイを見た。「・・メール？」

そう言い携帯を開きメールを見た。

すると、ミレイの顔が一瞬青ざめた。

メールの内容。

久しぶりだな。ミレイ。

今日の杯戸シティホテルで行われるパーティーの時に、お前を迎えるに  
行く。

待っている。

ジン。

ミレイそのメールを見て再びフツと笑い、「もう、追いかけっこ、

も終わりかな。」

と同時に「こんなにもか・・・夢が現実になるとはね。」

そう言い灰皿にタバコを置きリビングにあつた黒い箱を取り出した。

すると其処にはジンと同様の、ベレッタ、が入っていた。

ミレイ「今日のパーティ多分広州のメンバーも来るから・・恐らく  
‘あの女’も。

琢磨兄さん。今度こそあの女を撃ち兄さんの仇を…。」

そう言いられないようにベレッタにサイレンサーを付け黒のハンカチに包んでテーブルの

上に置いた。

そして灰皿からタバコを再び持ち吸い始めた。

第52章。沙江島財閥のパーティ当日。（前編。）完。

## 第52章。沙江島財閥のパーティ当口。（前編。）（後書き）

今章もお付き合いで下さり有難うござります。

さて、次章は今章の（中篇）と書いつ形で書かせて頂く予定です。次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いで

す。

オマケ。

ミレーヌ「……」こんなにも早く、。

と続け様に微笑んで「次章もどうぞ宜しく。」

## 第53章。沙江島財閥のパーティ開口。（中編）（前書き）

前章の続きです。

今章も長丁場になりますので、少しうまく承りたい。

## 第53章。沙江島財閥のパーティ當口。（中編。）

アレからレイはタバコを吸いながら窓を見続けていた。

あると、窓の下に黒のシボレーが田に付いた。

ミレイ「・・黒のシボレーか。」

じや・・あの車の主はあの時の、赤井秀一。

そして、ドアが知らぬ間に開いた。

ミレイ—瞬ピクッとなり、「誰ッ？！」

すると、短髪の黒髪のニット帽を被ったラフな格好をした男がコナンと共に入つて来た。

男「・・勝手に上がつて申し訳ない。君は、闇の始末屋赤龍事

龍崎!!レイかな?」

ミレイイタバ「吸いながら「そり。その通り。だとすると・・お兄さんは、シルバー ブレット」

事・・FBI捜査官の赤井秀一?」

赤井フツと笑い「名答。良く分かつたな。」

ミレイ「あの男に前に聞いた事あつてね。組織では、厄介者、だつたそつだから。」

赤井再びフツと笑い「・・・そつか。」と続け様に「君が言つあの男  
つて

‘ジン’の事かな？」

ミレイ再びフツと笑い「・・・」名答。

と続け様にコナンを見て「あんたも居たんだ? コナン?」

コナン領き「ああ。赤井さんは知り合いでね。」と続け様に「お  
前の事が気になつてよ。」

ミレイ「・・・そつかい。」

と更に続けてコナン「お前、今日の沙江島財閥のパーティ行くんだ  
るつ?」

ミレイ灰皿にタバコを揉み消して「ああ。大学の友達の姉の武道制  
覇の祝いだからね。」

コナン「そつか。なら・・・、気をつけろ、んだな。」

其れを聞いてミレイ再びタバコを取り出し火を灯し「、兄さん、が  
来るかもしれないって

事だろ?」「コナン。」

「ナン其れを聞いて驚き「何で分かつた?」

ミレイタバコ吸いながら「…、何となく。かな。」

そして、赤井「横入りで申し訳ないんだが…、一つ此処で提案が。」

ミレイ「何?」

赤井「我々FBIの証人保護プログラムを受けて欲しいんだ。」

ミレイ其れを聞いて「其れは…、自分の身、が保障されて…、

その場合も「一度」と言つて良いのかな？仲間や知り合いで会えた  
いつて事だよね？」

赤井頷いた。

コナン「俺も、赤井さんに、俺も同意見だ」。お前は広州とそして・  
・、組織の人間、

では無いがジンにも、狙われている、だから・・此れを受けるとお  
前の身は、安全、

と言ひ詫さ。「

ミレイタバコを口に加え直し「悪いけど・・。其れは、いらない、  
確かに・・

其れを受ければ、安全、つて言つたら、安全、かもしけない。只其  
れは多分・・

‘私自身が私自身、で居られなくなる事。私は・・・其処まで、強くないよ’。

と同時に、私自身、基本的に、自由派、だし、元々は、闇の人間’。

‘表は似合わないや。’

赤井「じゃ・・何故?‘闇から抜け出した’?」

ミレイ再びフツと笑い「、何故だらうね、?自分でも、良く分からないよ。’

と続け様にねえ・・?雪音姉さん。琢磨兄さん。

本当は此れが‘一番’なのかもしれないね。

「ナン」「ノノ。まさか、お前、……闇に帰るつもつ、なさじやねえだろ?」

「ノノ」「わあ……。ビビりだらひなっ!」

と同時に気が付けば暁が過ぎ去りして時計を見て「おや……もう、いんな時間だ」。

赤井達も時計を見た。

時計は夕方4時前位になっていた。

ミレイ灰皿にタバコの火を消し「そろそろ杯戸シティホテルに行かないと。」

そう言い自分の部屋に行き漆黒のドレスに身を包みそして事前に一度しておいた

漆黒の鞄を持ち自分の部屋を出て「じゃ・・そろそろ私行くから出でもらえるかな?」

(勿論その中には事前に用意したベレッタも入っている。)

赤井達その姿を見て驚いたが平然と装い領き白毛を出した。

そして、赤井「じゃ・・」のボウヤも今日のパーティーに行くみたいだから

俺が送つて行いつ。」

ミレイ「いや・・・私は、遠慮しておぐ。もし、兄さん、と会場前にでも鉢合わせに

なつたら何て言われるか分からぬし・・それに、もう、迎えは、来てくれているから。」

赤井フツと笑い、「そうか。」と続け様に「じゃ・・ボウヤは再び俺の車に。」

「ナン領いた。

そして、エレベーターで1階に降りて行つた。

すると、青のベンツが止まっていた。

赤井「あれがそなうのか？」

ミレーヌ「領いた。」

そして、青のベンツが近づいて来て止まり運転席の窓が開き

「よし。」

ミレーヌ微笑んで「せひー夏さんー」この度は態々有難い。

夏美「何。構わんさ。」と続け様に「悪いね。後部座席が今うちの相棒達で埋まっているから

助手席に座つてくれないか?」

ミレイ領さんとして、赤井を見て「今田は、念えて良かつたよ、赤井さん。」

赤井「ああ。‘俺もさ’。またいつか君とは、会いたい、物だ。」

ミレイ再びタバコに火を灯しフツと笑い「、機会があればね、」  
と続け様に

「じゃ・・・」ナン。また、後で、な。」

「ナンフツ」と笑い、「了解した。」

そして、ミレイ助手席に乗り込んだ。

すると夏美もタバコに火を灯し「ナンを見て「お前さんは～どうするんだい？」

「ナン」「赤井さんに杯戸シティホテルまで送つてもうえる事になつてるんだ。」

夏美「そつか。了解した。」と続け様に赤井を見て「では、秀さん。宜しくお願ひします。」

赤井「ああ。勿論。責任持つて、送らせてもらひ。」

夏美頷きをして再度「ナンを見て」「じゃ・・また後で。」と続け様に「頼んだよ。」

「相棒、？」

コナンニヤリと笑い、「了解した！」「相棒。」

そう言い夏美運転席の窓を閉め杯戸シティホテルへと愛車の青ベンツを走らせた。

そして、赤井「じゃ・・俺達もそろそろ行くか?ボウヤ。」

コナン領さ赤井と共に彼の愛車である黒のシボレーに向かい乗り込み

杯戸シティホテルに向かつた。

其れと同時に密かに路地裏に止まつていた黒のポルシェ356Aも  
赤井達に気づかれない

様に杯戸シティホテルへと向かつた。

第53章。沙江島財閥のパーティ當日。（中編。）完。



## 第53章。沙江島財閥のパーティ並口。（中編）（後書き）

今章もお付き合いで下さり有難うござります。

さて、次章は・・後編パート一として・・

この続きを書かせて頂く予定です。

其れでは、次章も今章同様にお楽しみ頂ければ

幸いです。

オマケ。

ミレイ「・・どうやら、この物語も・・?」

と続け様に「次章もどうぞ宜しく!」

## 第54章。沙江島財閥のパーティ当口。（後編1。）（前書き）

今章は、前章の続きです。

此方も長丁場ですのでじっくり承下さい。

## 第54章。沙江島財閥のパーティ当口。（後編1。）

アレから、口ナン達と一緒に先ず別れた夏美達は杯戸シティホテルに到着していた。

そして、夏美愛車の中で「良いかい？皆。雷外が前に広州の面子の話を録音した会話によると

・・夜の7時頃にその酒川真紀乃とそのマレイの大学での友達である前川財閥の長女である

前川花梨が現れる予定だ。それで・・多分何らかしらの映像上映があるみたいだから

その時にメイランの奴は恐らく愛燐の奴にその2人を暗殺させるつもりだ。」

すると、雷龍「で？その映像上映は何時頃になる予定ですか？姉者？」

夏美「マレイからパーティのパンフを借りて「そうだな。パンフによると・・・夜の8時位

つて書いてあるな。」そつとレイに「有難い。」と言ふ返した。

雷龍「約・・・1時間後位ですか。」

雷明も腕を組み「ちよつと・・・時間が足りな過ぎですね。姉上様。

「

夏美前に吸っていたタバコを灰皿の上で揉み消しまた新しいタバコを取り出し火をつけ

「・・・そうだな。むずい（難しい）な。だが、やるしかないだろ  
う。」

するとミレイ「事前には、妹の方の前川に一応説明しておいたよ。

夏さん。」

夏美「ほつ。 そうか？ で？ 何て言つていた？」

ミレイタバコに火を灯し「一応、防弾ジヨツキを付けておく、そして・・

ついでに体全体をカバーする特殊ドレスを身に着けるらしいわ。」

と続け様に「前川の所・・防弾専門の店もやつているらしいから・・

。

夏美タバコを吸いながら「成る程ね。」

そして、夏美有理を見て「有理。」

有理「何？姉さん？」

夏美「姉さんも念の為一応援護に付くから、お前はくれぐれもライ  
フェイ達から離れるん

じゃないよ？良いね？」

有理頷き「分かった。姉さんも十分気をつけて。」

そして、ライフェイ「有理には念の為に、防弾チョッキ、付けさせて  
ある。」

夏美タバコ吸いながら頷き「有難う。」と続け様に「くれぐれも・  
・有理を頼む。」

ライフェイ「了解した。」

すると、雷龍時計を見て「姉者。ソロソロ、お時間です、。」

夏美タバコを灰皿に揉み消し「よし！乗り込むか！」

そしてその後ミレイも灰皿にタバコを揉み消し、青のベンツをホテルの駐車場に止め

会場へと向かった。

すると、杯戸シティホテルの路地裏に黒のポルシェ356Aが止まつて行つて

モニターでジン達が様子を見ていた。

ジン「よし。夏美達が動き始めた。俺達もソロソロ乗り込むぜ。」

ウォッカ「了解しました。」すると「所で兄貴、ベルモットはまだいつしたんですね？」

ジン「ベルモットの奴は先に会場に乗り込んでる。」

そう言い黒のポルシェ356Aから降り会場に向かった。



## 第54章。沙江島財閥のパーティ当口。（後編1。）（後書き）

今章もお付き合いで下さり有難うござります。

さて、次章もこの続きを書かせて頂く予定です。

次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

夏美「・・ついに乗り込む時が来たか。」

続け様に「次章もどうぞ宜しく。」

## 第55章。沙江島財閥のパーティ当口。（後編2。）（前書き）

前章の続きです。

此方も長丁場です。

## 第55章。沙江島財閥のパーティ当口。（後編2。）

此處は、杯戸シティホテルの5階にある流氷の間。

此處で沙江島財閥のパーティが開催される事となつてゐる。

アレから夏美達は流氷の間に入り沙江島財閥の会長達に挨拶を済ませ

一足早めに入つたコナン達と合流し当たりを警戒していく。

すると服部「・・夏美。」

夏美「はい。平さん。」

服部「パーティ開始時刻は確か夕方5時やつたな。」

夏美「はい。夕方5時から夜の10時位となっています。」

服部「んで? 広州のスナイパーである、あの女、が標的を仕留めるのは・・

標的が現れる予定の夜7時の1時間後の夜8時頃。で・・あつてるな?」

夏美再度頷き「恐らくその辺かと。」と続け様に「その1時間経つ前に我々は

その標的を‘守らなければなりません’。」

服部「・・時間が少ないな。」

夏美「・・そうですね。」と続け様に「しかし、何とかしないこと。」

すると、夏美の無線がなつた。

夏美「はい。橋。」

雷外「あ・・姉御？俺。」

廊下の死角で待機していた雷外だった。

夏美「アレから何か、動きは、？」

雷外「広州の面子が入ってきた。」

夏美「そうか。で？数は？」

雷外「今の所、3人位かな。」

夏美「その3人詳しく述べるか？雷外。」

雷外「ああ。玲兄弟だ。」

夏美「玲兄弟つて言つたら、愛燐、愛蘭、龍湾か。」

雷外「ああ。」と続け様に「どうするよ？姉御？追跡する？」

夏美「…いや。其れは不味い。今は、取り合えず様子見だ。奴等は一応、エリ組、

警戒心が他の連中より、高い、からな。」

雷外「了解した！」

夏美「じゃ・・しばらく様子見した後こっちに（会場）入ってきて  
くれ。」

雷外「OK！」

そう言い無線を終えた。

すると、「コナン」「雷外からか？」

夏美領也「ああ。広州の面子おもてがどうやら、お出まし、のよひだ。」

と更に続けて哀が「んでも、誰なの？？」

夏美「玲兄弟だ。」

ミノイ其れを聞いて「と云つ事は3人来て居の？一夏さん？！」

夏美領也「ああ。愛燐、愛蘭、龍渦？」

ミノイ「・・・愛蘭。」

と憎悪をこじませた顔で実の兄の仇の名を呼んだ。

コナン達は其れを只見ているしかなかつた。

すると、行き成り哀が怯え始めた。

「ナンその様子を見て「灰原・・奴等か?」

哀頷いた。

其れを聞いたミレイも辺りを見渡しそして「…………！」

左の壁側を見ると漆黒のステッキに身を包んだジンの姿があった。

ミレー

・・ジ、ジンハ呪わさつ！

一瞬焦つた。

あぬど、ジンと一瞬目が合つた。

ミレー一瞬慌てたそぶりを見せたが落ち着きながら顔をそらす。

ジン其れを見て「ヤリと笑い「、やつと見つけたぜ、アハハイ・  
そして」

と続け様にコナンの隣にいる辰を見て「シヒロー。」

すると、夏美がジンに寄つて來た。

ジン夏美を見て「よ!」。

夏美フツと笑い「貴方も來ていたのね。ジン。」

ジン「ああ。やつもお前の事が、心配になつてよ。」

其れを聞いた夏美クスと笑い「あら・・そんなんに、私は頼りない、  
？」

ジン夏美を自分の所に引き寄せ「いいや。そんな事ねえぜ？」

と続け様に「大切な恋人、を心配してはいけねえのか？」

夏美首を横に振り「いいえ。」と続け様に「有難う。」

と続け様にジン「お前に聞きたい事がある。」

夏美「何？」

ジンニヤリと笑い「あの江戸川コナンの隣にいる小娘あれ・・・シリー、だろ？」「

夏美其れを聞いて一瞬驚いたが冷静を取り出し「・・何故そう思うの？」

ジン「あまりにも似すぎてゐるんだよ。それに・・一瞬俺の気配を感じたみてえだが

すぐに「怯え始めたぜ」？」と更に続けて「俺の気配を感じるんだぞ・・

「組織に関わった人間か」「裏切り者しかいねえからな。」と不敵な笑みを浮かべた。

夏美心中でため息をつきながら

やつぱり、「彼」を欺く事は出来ないのね。

どうしても・・・。

しかし、夏美フツと笑い「さあ・・・分からないわ」。と続け様に

「もし、‘知っていた’としても幾ら恋人の頼みとは言え、答えられないわ」。

と更に続けて「私はあくまでも‘ワカバの人間’だから。」そう付け加えた。

ジン其れを聞いて再びフツと笑い「まあ・・・良いさ。いずれ分かる事だからな。」

夏美「じゃ・・・先ずワカバの相棒（仲間）の所に戻るわ。」

ジン夏美の肩から手を離し「ああ。」

と続け様に「また、俺の下、に戻つてきてくれるんだう?」

夏美「・・そうね。ワカバの仕事が一段落して兄様に、お暇頂戴、  
した時にね。」

そして、ジンに軽く挨拶してワカバの仲間の下に一先ず戻った。

第55章。沙江島財閥のパーティ当日。（後編2。）完。



## 第55章。沙江島財閥のパーティ当口。（後編2。）（後書き）

今章もお付き合いで下さり有難うござります。

さて、次章も今章の続きを書かせて頂く予定です。

此方は後じがらく、続く予定なので、「承頂きたい」と思いますが。

其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ

「ナン」「おじおじー何のんきにジンの所に行つてんだ

よー夏美ー」

夏美苦笑いをしながら「悪いね。」「ナン。つい

ね・・。」

哀呆れてそして「次章もどうぞ宜しく。」



## 第56章。沙江島財閥のパーティ並口。（後編3。）（前書き）

おはようございます。前章の続きです。

最後の辺りに広州の連中が少し話します。

## 第56章 沙江島財閥のパーティ当口（後編3。）

アレからジンと一先ず別れた夏美は仲間の元に戻っていた。

そして・・・。

服部時計を見て「お・・そろそろ開始時刻やな。」

時計はもう5時を迎えていた。

其れと同時に夏美は仲間達に再び指示を出す。

そして、有理に三日月のペンドントを渡した。

すると、有理夏美に「これは？？」

夏美「母さんが死ぬ間際に私に託した、母さんの、形見、みたいなもんだ。」

お前に渡すよひ母さんに、言わっていたからな。。。」と続け様に「・  
・有理。」

と有理の右肩をそつと持ち、「頼むから。。。無事で居てくれよ。。。」

有理頷き「・・姉さんもね。」

夏美その言葉を聞きフツと笑った。

其れを見て哀はコナンの洋服の袖をキュッと持つた。

コナン「・・・灰原。」

コナンは哀の気持ちに薄々だが勘付いていた。

すると、雷外とは別の所で張り込んでいた雷龍が夏美的側に来て「姉者。うちの

‘警備隊’が此方の‘警備隊’の方々と無事に合流したそうです。」

夏美領き「そうか。」と続け様に「各部隊に広州の奴等にはない  
よつ・・。

それぞれの事前に指示された配置に付くよつ伝えておいてくれ。」

雷龍「ハツ！」 そう言い警備隊の所に向かった。

そして、沙江島財閥の会長の挨拶と共にパーティが開始された。

ワカバのメンバーは警戒心を一層上げていた。

其れを遠めで見たジンそして合流したウォッカとベルモットが見ていた。

ウォッカ「夏美さん達やけに警戒していますね。」

ジンタバコに火を灯し「そりゃあそだだいつよ。何時広州の愛燐の銃弾が何時来るか

分からねえんだ。まあ、狙撃時間は決まっているからそんなに心配はいらねえだろ？

が・・・。あいつ妹も、狙われている、らしいからよ。」

ベルモット「あの子も、あの子で、大変ね。」

すると、ベルモット深紅のチャイナドレスに身を包んだ女性を発見する。

ジン「どうした？ ベルモット？」

ベルモット「ほら見てよ。ジン、ウォッカ。あの女広州の明杏じゃない？」

ジン事前に隠し撮りしておいた明杏の写真を見てニヤリ「みてえだな。」

と続け様に「・・・まさか。こんな所で、再会出来る、とはな。と

ても嬉しいぜ？

王明杏。」

すると、夏美食事を取りに行くと同時に辺りを警戒していた。

そして、食事を取りに言った後無線で「雷外！」

雷外「はいよ！ 夏美的姉御？」

夏美領き「ああ。 私だ。」と続け様に「そつちはどうなつてこる？」

雷外辺りを見渡し「今の所、問題ない。」と続け様に「そつちは  
？」

夏美「明杏の奴も出て来た。」

其れを聞いて雷外「！！本当か？姉御？」

夏美頷き「ああ。」と続け様に「多分・・・明杏の奴も出て來たと  
言ひ事は

メイランの奴もどつかにいるはずだ。ぐれぐれも警戒を怠らないで  
くれ。」

雷外「了解！」

夏美「じゃ……頼んだよ。……弟よ。」

そつ言い無線を切った。

すると、ミレイ夏美の所に寄ってきて「夏さん。」

夏美「明杏の奴が来ている事は知っているな?」

ミレイ領をして「後どれ位来る予定?」

夏美「そうだな。多分、2、3人、だろう。奴等も奴等で多分私等  
が此処に居る事位

薄々、勘付いているはず、私等が居て尚且つ、パーティ客も來てい  
るこの会場に

前みたいにほぼ全員の面子で来る程奴等も、馬鹿じゃないよ。」

ミレイ」・・そうね」と続け様に「そり、願うしか、ないわね。

夏美頷いた。

一方広州は・・。

明杏は愛蘭から報告を受けていた。

明杏クスと笑い「そり、奴等もね」。

(奴等=ワカバ)

愛蘭「ええ。どうやら……あの時の我々のこの計画の、会話、が聞こえてしまって

居たみたいね。」

明杏フツと笑い「・・成る程。」

と同時に夏美とハイハイの姿を発見する。

明杏「……」

あ・・・アレは、夏美と赤龍

シャアアメイセキロン

どうして?!

まさか・・・あの子等も私達の、計画を知つて。

,

愛蘭も明杏が見ている方向に目を向けた。

夏美様。

シャアアメイ

それに・・。

赤龍事、龍崎ミレイ。

ん？

龍崎・・・？

まさか？！

あの子？！

昔私が、始末した。  
龍崎琢磨の・・。

‘ 身内、  
？！

あると、ミレイも自分達を見ている田線に気が付きそのままの田線の方向に田を走る。

「ああヒヒヒヒ！」

あ・・・アレは！

玲愛蘭ッ！

そう言ひ前に出立つとしたその時

夏美によつて止められた。

「ミレイ、夏美さーー！」

夏美「待てよ。此處はあまりにも、人が多くある。」

と同時に「どうせ実の兄さんの仇討をしようと思つたんだろ?」

ミレイ「……な、何故?それを?？」

夏美フツと笑い「お前さんのその様子を見れば大体は、予想付く。

」

と同時に「今は、まだ、我慢しろ。」

ミレイ「……了解。」

と続け様に夏美「さ・・一先ず相棒達（仲間）の所に戻るよ。」

ミレイ領き再びワカバの下に戻つて行つた。

そして・・・。

気が付けば7時になつていた。

そして・・・。

広州の標的である。

酒川真紀乃と前川花梨が会場内に入つて來た。

第56章。沙江島財閥のパーティ。（後編3。）完。

## 第56章。沙江島財閥のパーティ当口。（後編3。）（後書き）

今章もお付き合いで下さり有難うござります。

さて、次章もパーティ話になると思います。

もうしばらく？掛かりそなので・・・

今章と同様にお付き合いで下されば幸いです。

オマケ

夏美「・・・広州の面子も大体動き始めたか・・。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しく。」

## 第57章。沙江島財閥のパーティ場での運命の時刻。（前編）（前書き）

今章でも沙江島財閥のパーティについてです。

いよいよ・・・‘あの時が’。

此方も長丁場となつております。

## 第57章。沙江島財閥のパーティ当口での運命の時刻。（前編）

アレから、広州の暗殺計画を知り沙江島財閥のパーティ会場に侵入していた夏美達は

辺りを再び警戒していた。

すると、ミレイの側に真理恵が来て「いらっしゃい。ミレイさん。」

ミレイ「ああ。沙江島か。」の度は誘つてくれて有難う。」と微笑んだ。

真理恵「いいえ。」と続け様に「その漆黒のドレスとても似合つているわ。」

ミレイ「有難う。」と続け様に「沙江島もそのブルーのドレスとても似合つているよ。」

真理恵「有難う。実はこれお姉様から頂いたの。」

ミレイ「さうなんだ。」と続け様に「あれ? その肝心の主役の、お姉様、は?」

真理恵辺りを見渡し「あ・・橋さんと話をしているわ。」

ミレイ「セウ。」

一方、佳織は夏美から事情を聞いていた。

佳織小声で「え? と言ひ事は此処であんたん所の対立している広州のメンバーが

‘暗殺’を?!

夏美額き小声で「ああ。だから・・・」ひち等の相棒（仲間達）も張り込ませてあるから

くれぐれも、気をつけて」。

佳織額き小声で返し「でも、あんた・・・電話で話していた時にはそんな事言つていなかつた

じゃないの。」

夏美「悪いね。あの時は私しゃあも、行けない」と踏んでいたから・

それにせつかくのお前さんの武道連霸祝いのパーティを邪魔したくなかったからね。」

と続け様に「でも、まあ・・・結局は、邪魔する事、になってしまったけど・・・」

と苦笑い。

佳織「ううん。構わないわ。」と続け様に「頼りにしているわよ？ワガバのリーダーさん？」

其れを聞いた夏美はフツと笑った。

と同時に「奴等が本格的に動き始めるのは・・・映像上映がされる午後8時頃だ。

その時に酒川真紀乃と前川花梨を狙撃する。」

其れを聞いて佳織腕時計を見て「ウソッ！もつ・・・7時58分よ！」

夏美「其れを聞いて「なつ！…後2分位しかないッ！」

と続け様に「雷明ッ！」

雷明「ハツ！此処にッ！姉上様！」

夏美「奴が、ターゲット標的を狙撃する場所分かるか？？」

雷明「恐らく・・向かい側の旧館の屋上かと。」

夏美「今其処に・・うちの連中誰か隠れて待機している？？」

雷明「私の兄が一足勘付いてその屋上に・・其れと今の所この廊下辺りには問題なかつたそう

で・・雷外さんも其処に。」

夏美領き「すまんが。お前さんも行つてくれ。至急だ。」

雷明「ハツ！」 そう言い瞬間術を使い屋上へと向かつた。

「ナン其れを見て「はやつ！」

すると、夏美佳織を見て「んで？その、標的、の2人は？」

佳織「お父さん達との挨拶を終え・・今丁度あの右側の窓側に・・。

「

夏美「な・・!」

まつ・・不味い!

あそこは旧館の屋上の近く!

そんな所に行つたら・・・

間違ひなく、撃たれるッ!

と同時に今までミレイと話をしていた真理恵が来て、「お姉様!」

佳織「…えひつたの…」

真理恵「ハハヤセさんが聞なこなことですのー。」

佳織「え？ セツセ・・・あんたあの子じ語じていたんじやないの？」

真理恵頷き「ええ。話していましたわ。その後・・・。橘さんの妹さんのは理さんと

話していくてその後会場を見渡したり何処にも居ないんですの。」

夏美 其れを聞いて・・。

あ！あいつッ！――

ま・・・・まさか？！――

旧館の屋上に？！

1人で？！

そして佳織に「悪いー・ちょいと抜けるッ！」

そう言い再びワカバの相棒達（仲間）の下に床って行つた。

コナン「どうした？」

夏美「ミレイの奴が居ないッー！」

服部「な・・何やて？！」

そして、雷外の代わりに廊下で見張りをしていた蘭達も入って来て。

服部「おひーどや・・・・怪しい連中おらんかったか？」

蘭「今の所、何も・・・」しかし、蘭は何かを思い出した。

「さう言えば、広州の玲3兄弟が会場から出て行つたわ。」

と続け様に和葉「何か・・・・打ち合わせ」しているよひあつた  
わ。」

其れを聞いて服部「‘打ち合わせ’なんかやないッ！—これは・  
‘最終確認やッ’！」

此処で行われる、奴等の暗殺劇、のな・・・。

」

其れを聞いて蘭と和葉が驚いた。

そして、蘭「じゃ・・止めに行かないと・・・」

和葉「せやーー」のままやと・・・！」

夏美「大丈夫！雷外達がすでにその、暗殺場、に向かっている。」

と続け様に「・・何とか防いでくれるだろ？。」

蘭辺りを見渡し「やつは誰だよ・・〃ノイケヤんせ?」

夏美「・・・多分。」  
「これはあくまでも私しゃあの、考え、に過ぎんだ  
が・・。

あいつは、暗殺場、に行つたんだ。」

蘭「え?と・・・何の事は?...」

和葉「ま・・・、まさか、『ハイセー?』」

夏美顔色「ああ・・・、まさか、だろ?」

そつ言い夏美も密かに忍ばせてあつた銃の入ったポケットを見ていた。

そして・・。

自分を嘗て、闇から救ってくれた少女、の言葉を思い出す。

「お願い！夏美さん！銃なんか一度と持たないで！銃は我々、警察側、から見れば

「護身用」になるけど・・その他の人が持つたら・・銃なんて所詮、人殺し、の

道具でしかないのよ！だから・・・。お願い！夏美さん！

夏美小声で悲しそうに「・・香奈枝」  
かなえ

木沢河香奈枝（きさかわかなえ。）

夏美の過去を知る人物の1人でもあった。

そして・‘闇の夏美’を知る人物もある。

夏美はミレイと同様に嘗ては闇の始末屋、炎龍、（ヒンロン）共呼ばれていた。

その名の理由は炎色をした龍の刺青が左腕に刻まれていたからだ。

しかし、香奈枝と出会い夏美は再び、闇から表、に復帰する事が出来た。

夏美タバコに火を灯しながら・・・。

悪いな。

香奈枝。

どうやら・・・お前さんとの約束は、果たせない、かもしだい。

そして、哀れりを見渡し「ねえ！彼！居なくなつていいわよー！」

(哀が嘗て、彼、ジンの事。)

「ナン、……何ッ？」

服部「どうやら、……その、暗殺場、に行つたみたいやな。」

そして、夏美「母ちゃん、

服部「何や？」

夏美「此処で・・・しばりく待機をお願いしますッ！」

服部頷いた。

と続け様に「ライフェイ！」

「ライフェイ！」はいよー！」

夏美「私しゃあもちよいと離れる。その間に此処頼むー！」

ライフェイ「了解！」

そして夏美「コナンそして・・・哀ちゃんも此処に！」

コナン達も頷いて夏美急いで旧館へと向かつた。

第57章。沙江島財閥のパーティ當日での運命の時刻。  
（前編。）  
完。

## 第57章。沙江島財閥のパーティ当口での運命の時刻。（前編。）（後書き）

今章もお付き合いで下さり有難うござります。

さて、次章はこの後編を書かせて頂く予定です。

其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

ミレイ「・・赤龍復活かしり。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しく！」

## 第58章。沙江島財閥のパーティ当口での運命の時刻。（後編）（前書き）

今章は前章の後編です。

此方も長丁場になつております。

ご了承下さい。

## 第58章。沙江島財閥のパーティ当口での運命の時刻。（後編。）

そして、夜8時・。

パーティの司会者の声と共に映像上映（佳織の武道制覇への道のり。）を上映する為

会場内が暗くなつた。

一方、此処は杯戸シティホテルの旧館の屋上。

天気は雪。

そして愛燐がライフルで窓側に立つていた広州（自分所）の、標的である

酒川真紀乃と前川花梨を狙つていた。

その後ろにまは明杏と愛燐の妹である愛蘭、そして、弟の龍湾が居た。

そして、明杏、愛蘭に時間を尋ねそして愛蘭に指示を出し・。

愛蘭「姉様。ソロソロ、時間です。お願いします。」

愛燐「OK~!」と続け様に笑みを浮かべて「酒川真紀乃そして・。  
前川花梨。あんた達には

「悪いけど、此処で、消えてもらひや。」

そう言つてライフルの引き金を引いた次の瞬間・。

パシュツ!!

と銃声の音がした。

そして、愛燐の左肩、妹の愛蘭の左肩から血が出た。

明杏「！！」

龍湾「！！ね・・姉様方ッ！」

と続け様に「だ・・誰だッ？！」

そう言い後ろを振り向いた。

すると、会場に居る筈の漆黒のドレスに身を包んだミレイがジンと同様のサイレンサー付き

のベレッタを持ちタバコに火を灯しながらフツと笑い「、ようやく、会えたわね。」

玲3兄弟。そして・・・久しづり。と言ひべきかしら?王明杏。

愛燐いつの間にかライフルから手を放たれて右手でミレイに撃たれた左肩を持ち

「あ・・・あなたは、セ・・・赤龍?！」

明杏笑いながら「まさか・・・貴女から懃々出向いてくれるとほね。

」

と続け様に「どうやら・・・その様子だと。私達の所には来てくれなさそう、ね。」

ミレイタバコ吸いながら一ヤソと笑い「『めんなさいね』。私は・

・

元々、最初っから、あんた達の所には、来るつもり、等毛頭なかつたから。」

と続け様に「・・・私を縛り付けて良いのは、『ワカバ』と・・・

・

・・・「ジン兄さん」。だけよ。」

・

そして、龍灣「何故ツ？！姉様方を撃つた？！」

其れを聞いたミレイ「愚問だね」と続け様に「でも、一応・  
・教えてあげる。」

と更に続けて「一つは、あんた達の計画」を阻止する為。そして、  
2つ目は・・・。

玲龍湾。あなたの2番目の姉、玲愛蘭を此処で、始末する事。。

愛燐と龍湾其れを聞いて驚きそして、龍灣が再び「何故だツ？！何  
故・・・愛蘭姉様を？！」

ミレイタバコを加え直し「理由は簡単。私の、実の兄、である龍崎琢磨を

‘殺した’から。その‘仕返し’。’と不敵な笑みを浮かべて言った。

そのミレイの不敵な笑みを見た3人は一瞬、恐怖心、が体に走った。

今ミレイのその姿はまるでジンに、やつくりだった。

そして、ミレイフツと笑い「おしゃべりはもう此処まで。あんた達にはこの会場から

ソロソロ、退場、してもううわ。「

其れを聞いた明杏クスと笑い「其れは、どうかしら、？」

そして後ろから足音が聞こえた。

ミレイ

ま・・まさか?!

こいつ等の仲間がまだ・・?!

明杏ドアに向かって「あ・・・。其処に居るんでしょう? 私達の、

大切な同志達、？

呪るんだったら、赤龍を始末して頂戴。」と笑いながら言った。

しかし・・・。

聞こえたのは予想外もしない声だった。

「残念だつたね。明杏。此処に集まつたお前達の、相棒達、（仲間）はもう此方で

「眠らせてもらつたよ。」

明杏「！…そ・・その声はまさか夏美？」  
シャアアアメイ

すると、ドアから夏美が出て来ていつも様にタバコに火を灯し二  
ヤリと笑い

「ハハ答一」と続け様に夏美の後ろから今まで此処に待機していた。

雷外、そして、雷龍、雷明が居た。

龍湾其れを見て驚き「お・・・お前らは、ワカバツ、！」

夏美タバコを吸いながらフツと笑い「何で・・・此処に、?という  
顔しているな。

龍湾。」と続け様に「前に、今週中に私しゃあがタバコ買いに米花  
町に出かけていた時に

明杏達に遭遇し襲撃を受けた日にアレから・・盜聴器と発信器を明杏の靴底に貼り付け

雷龍達に明杏達を追跡させていた訳。そうしたら・・。

雷外を見て「こいつが、運良く、お前達のこの、計画、話をしていたのを、録音、

出来たツつけわけ通訳よ。」

そして、雷外ニヤリと笑い「残念だったな。」

と続け様に雷龍「今頃、貴方方の、標的、にしていたあのお2人は我々、ワカバ、が

「保護させて頂きましたよ。」

夏美「諦める、んだな。」

龍湾「クソッ！舐めやがって！」

そう言い再び夏美に突進してきた。

雷外「姉御ッ！」

雷龍「姉者ッ！..」

その時再び銃声が聞こえた。

龍湾にも左肩に銃弾が当たった。

夏美の右手には、隠し持っていた、サイレンサー付きの銃が握り締めていた。

と続け様に「本当は・・・使いたくなかったんだがな。」

と悲しそうに呟いた。

と同時に、・・・香奈枝。悪いね。お前さんとの、約束、やっぱり‘守れなかつたよ。’

そして、夏美事前に着ていた赤のコートのポケットにハンカチで何十にもくるんだ

銃をしまって・・・。「じゃ・・・。ミレイ、任せたよ。」「そう言いその場を去りつと

した。

すると、ミレイ「ねえ・・・? 夏さん?」

夏美「ん?」

ミレイ「この4人・・・始末しなくて良いの、?」

夏美フツと笑い「其処からは、私しゃあの仕事じやねえ。」闇の始末屋赤龍と呼ばれた

「お前さんの仕事、だ。自由こしな。」と続け様に「やつぱつ、私はやあは、闇は似合わね

え」。「表が一番、だな。」そう言つて雷龍達を連れて会場内に戻つて行つた。

第58章。沙江島財閥のパーティ<sup>当田</sup>での運命の時刻。（後編。）  
完。



## 第58章。沙江島財閥のパーティ当口での運命の時刻。（後編）（後書き）

今章もお付き合いで下さり有難うございました。

さて、次章はミレイがいよいよ、闇の始末屋、

として復活する所を書かせて頂く予定です。

と言いましても…舞台は変わりませんが（汗）

次章も今章と同様にお付き合いで下されば幸いです。

オマケ。

「次章もどうぞ宜しく。」

「…」…。」と続け様に

## 第59章。闇の始末屋赤龍復活。（前書き）

今章はミレイが、闇の始末屋赤龍、として復活した所を書かせて頂きました。此方も長丁場です。

と同時に予めお断りいたしますが今章では

残酷なシーンも含んでおります。

その辺を了承頂いた上で御覧下さいます様重ねて

お願い致します。

## 第59章。闇の始末屋赤龍復活

此処は、旧館の屋上。

アレから夏美達はその場から去り、そして、その場所には広州の4人にサイレンサー付きの

ベレッタを持ったミレイが居た。

そして、ミレイ事前に懐から取り出しておいた携帯灰皿にタバコを揉み消し、再びタバコを

取り出し火を灯しニヤリと笑い「じゃ。。。夏さんも私の、好きにして良い、って

言つたから逆に・・残念だけど、あんた達、には消えてもうつわ。

其れを聞いた龍湾は再び「な・・舐めやがって！..」 そつ言い今度はミレイに

突進して行つた。

其れを見て愛蘭「お止めッ……龍灣ツ……」

ミレイ再びニヤリと笑い「‘御馬鹿な子’。」と続け様に「‘バイ  
バイ’。」

そつ言い引き金を引いた。

そして、その銃弾は龍灣の胸を貫きその場に倒れ込み龍灣は死んだ。

其れを見た愛燐「クソツ！ 良くも弟をツ……」

そう言い懐からライフルとは別に銃を取り出しレイに向けて発砲したが、

逆にミレイに返り討ちにされてしまいその場に龍湾と同様に、死んで行つた。

そしてミレイ明杏達を見て「さて・・残りは、あんた達だけ」。

と続け様に「皮肉よね？あんた達を助けてくれる、同志、達は既に・・

夏さん達の所で、眠らせられた。そして、あんた達の側に居た2人ももう、

「居ない。」と更に続けて「もう、終わりよ。」

そう言いベレッタの銃口を明杏達に向けた。

明杏慌てて「ね・・ねえ、赤龍！ わ・・私達と、手を組まない、？」

愛蘭「そ・・そりや？ て、手を組まない、？」と続け様に「わ・・私達と、手を組んだ

ら、こ・・怖いものなしよ？ 閻の世界を、制しましょ、ね？」と更に続けて

「だ・・だから、た、助けてね、？」

ミレイタバコ吸いながらフツと笑い「、残念だけど、一緒に組めないわ」。

と続け様に「言つたでしょ？愛蘭、あなたは、私の実の兄の仇」。  
と更に続けて

「、私を縛り付けて良いのは、ワカバ、と、ジン兄さん、だけ。  
・・・。と。

「、良いでしょ？、わよひなり」。」 そう言つてベレッタの引き  
金を引き

明杏達を、始末した。

そしてミレイベレッタを素早く懐に仕舞い4人の遺体の、始末を  
して証拠を素早く

‘消した。’

そしてその場を後にしようとしたその時、「良い仕事、したな。」  
レイ。「

ミレイにとって聞き覚えのある懐かしい低い男の声がした。

第59章。闇の始末屋赤龍復活。完。

## 第59章。闇の始末屋赤龍復活。（後書き）

今章もお付き合い下さり有難うございます。

さて、次章はミレイがジンの兄貴様と再会する場面

を書かせて頂く予定です。

其れでは、次章も今章と共にお楽しみ頂ければ

幸いです。

オマケ。

夏美タバコ吸いながら「ミレイの奴が・・

‘闇の始末屋’として復活した・・か。’

と続け様に「次章もどうぞ宜しく！」

## 第六章 ハムと燐黒の闘いの呻吟（前編）

おせむりやうござむ。

今章でせむりとジンの兄貴様がつこじゆ申念をします。

今章も前章、前々章と同様に長一場ですので

「じつ」承ります。

と同時にねだびいたします。

当初は、園子も出る予定でしたが・・・

結局は出せなかつたのでした（汗）

園子のファンの方には申し訳ありません。。。

（園子を何処で出して居るのかが・・・分からず、

また、園子についてのネタが・・・どうしても

思いつかなくて・・・汗。）

急遽、用事、が出来てしまつた・・

と考えて頂ければ幸いです。

残りの連載でどちらかには出させて頂きたい

と 思 い ま す。

## 第60章。ミレイと漆黒の闇との再会

アレから、ミレイは闇の始末屋赤龍として久々に、仕事、をし終わつてその後その場を

素早く後にしようとしたその時後ろから「、良い仕事、したな。ミレイ。」

とミレイにとりて懐かしい低い男の声がしてその声の主に振り向いて驚いて

「・・ジ、ジン兄さん!」

其処にジンが居た。

ジンニヤコヒ笑い「、よつやく会えたな。、妹よ。」

ミレイ最初は只黙つてその場に固まつていた。

と同時にその場の雪を見て心の中で・・・。

ああ、やつぱり、外は雪、。

‘夢と同じ天氣’になってしまった・・・。

すると、ジンミレイに近づいて來た。

ミレイはジンが自分に近づいて來ても口の場から動じ一つしなかつた。

と言ひより、動けなかつた。

まるで……金縛り、にあつたかのようだ……。

そして、いつの間にか吸っていたタバコが口から落ちていた。

そして雪でいつの間にか火が消えていた。

ジンそのミレイの様子を見てニヤリと笑い「どうした? 逃げないのか?」

ミレイその声を聞き我に戻りフツと笑い「逃げられない、いえ……  
逃がすつもり、

は無い。‘ そうでしょ？ ’

ジンタバコに火を灯し再びニヤリと笑い「 分かっているじゃねえ  
か。 ’

と続け様にミレイの頭を軽く撫でて「 その通り だ。 ’

ミレイ

ああ・・・。

もう、‘ 閣 ’ に戻らなければいけない見たいね。

ごめんね。

兄さん・・・。

そして、大学の皆。

せつかく・・・仲良く、してくれたのに・・・。

「めんね。

やつぱり・・・。

私は・・・。

すると、ジン皿分の腕の中に//レイを抱き寄せ耳元で「 」いつ側に戻つて来い。」

「//レイ。」

ミレイことつてその声が何故分からぬが・・・。

「 とても心地良かつた。」

と続け様に「 表は所詮・・お前を闇の追つ手から逃れさせるだけ  
' 。何だぜ?」

と更に続けて「 お前にば、闇が一番良く似合ひ。」

「…………かもね。」

と云ふべく呟いた。

ジンの声を聞き逃さなかつた。

ジンは伸び一いやつと笑い無言のまま「」の頭を伸び撫でた。

やして……。

「」を連れてその場を後にした。

一方、広州は玲3兄弟と明杏の、訃報、の報告を受けていた。

そして、ミレイを諦め・・・。

どこかに行方を、眩ませて、しまった。

と共に、杯戸シティホテルに居た残りの広州のメンバーも居なくなつていた。

そして・・・。

何時の間にか夜の10時になつて沙江島財閥のパーティーは終わつて行つた。

広州の‘狙撃’から2人の‘標的’を何とか守り抜いたワカバはア  
ジトに報告を終え

そして、その‘標的’になつた2人とその身内に事情を話し、ワカ  
バで‘保護’する事に

なつた。

その後もその他のパーティ客達もそれぞれの自分の家に戻つて行つ  
た。

一方、ミレイはジンは路地裏でウォツカ達と合流し黒のポルシェ3  
56Aに乗り

ミレイの車に向かつた。

そして・・・。

ミレイ自身が、表から、再び、闇へと、戻りつつあった。

第60章。ミレイと漆黒の闇との再会。完。

## 第60章。ミレイと漆黒の闇との再会（後書き）

今章もお付き合いで下さり有難うござります。

さて・・・Jの小説もいよいよラストスパートに

近づいてきました。

次章は、ミレイの闇への帰還前にについて書かせて頂く予定です。

其れでは、次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸い

です。

オマケ。

ミレイ「ついに見つかっちゃったか。」

と続け様に「次章もどうぞ宜しく！」

## 第6-1章。ミレイ闇へ帰還前。（前書き）

今章は、ミレイを中心として書かせて頂きました。

最後辺りには赤井さんや夏美が電話でやり取りしています。

此方も長丁場です。

ミレイ承下せ。

## 第61章。ミレイ闇へ帰還前。

アレから、広州の、暗殺計画、を無事にワカバと同じ様に阻止した  
ミレイせジンの愛車である

黒のポルシェ356Aに乗り米花町の血脉へと戻つて行った。

此処はミレイの血脉の中。

ミレイは着替えて荷物の整理をしていた。

そして、ベット側にあつた写真盾を取り兄の写真を見た。

「ミレイ」・琢磨兄さん。物凄く遅くなつたけど兄さんの、仇討  
したよ。」「

と続け様に「だから・・・安心して眠つてね。」

所詮仇討しても・・・死んだ人間は、もう一度と、戻つて来れない。  
そんな事

‘分かつてはいたはずなのに’。だけど・・・闇に生きる人間は  
‘そんな事は

‘関係なかつた。’

そして、ジンがリビングに入つて來た。

ミレイジンの氣配をじワビングに向かつた。

そして・・。

ジン「荷物の整理か?」

ミレイ頷いた。

ジンニヤリと笑い「その様子だともう、腹は決まった、様だな。」

と続け様に「だが、せっかくだから大学には行かないとな。」

ミレイ「え？ 良いの？」

ジン頷いた「だが、多分転学になるだろつた。」と続け様に「多分、今のお前の大学の

友達<sup>ダチ</sup>達はお前が、‘危なねえ仕事’している事を薄々、勘付いている、らしい

からよ。」

ミレイ「・・そつか。」<sup>わうわうこ</sup>ジンの腕の中に飛び込んだ。

ジンそれを見てフツと笑い「、どうした、？」

ミレイ「ううん。只……、いつしたかった、だけ。」

と続け様に「駄目?」

ジン再びフツと笑い、「構わなねえぜ」。

そつにジンミレイを抱きしめた。

一方、此処はミレイの血が前からちよつと離れた所。

其処には黒のシボレーが止っていた。

赤井が電話をしていた。

「え？ ミレイが？ 其れ・・本当ですか？ 秀さん？」

その相手は夏美だった。

赤井タバコに火を灯しながら「ああ。‘間違いない’。あの沙江島財閥のパーティが

あつた時に暗殺計画に加わった広州の4人のメンバーを龍崎ミレイが始末してその場を

後にしようとしたその時に偶然にもジンと再会し、ジンが龍崎ミレイに‘搖さぶり’を

掛けた見たいだ。」

夏美「・・・成る程。」

赤井「でっ」れからどうすの？止めるか？」

夏美「其は・・・ミレイ自身が決める事」でしょ。我々がこれ以上、関与、したら

ミレイ自身も、嫌がるでしょう。」

其れを聞いて赤井「お前は、それで・・・良いのか？」

夏美フツと笑こ「ミレーヴはすうとすうと、闇で生きてきた、彼女の居場所はもう

どうやら、闇しかなぞうですかから」。

赤井「…そうか。」

と続け様に夏美「でも、私は、表、で生き続けますよ。私を闇から救つてくれた香奈枝の為に

も。」

赤井其れを聞いて「ほつ・・。じゃ、ジン共、別れる、んだな？」

夏美「そ・・・其れ、別、ですよ！、別、！」

と慌てて言い返して「あ・・秀さん。ソロソロこれから出かける予定ので。」

赤井「ああ。長時間悪かつたな。夏美。」

夏美「いいえ。」と続け様に「それでは・・。」

そう言い携帯を切った。

そして、夏美はオウガ達に、ミレイの闇帰還、の事を伝えた。

と同時に前みたいにタバコを買いにそして・・有理の誕生日祝いのプレゼントを

買いに愛車の青ベンツを走らせ米花町にある米花デパートに向かつた。

しかし・・・。

此れが、夏美の、最後の姿、となる事を誰も予想出来なかつた。

第61章。ミレイ闇への帰還前。完。



## 第6-1章。ミレイ闇へ帰還前。（後書き）

今章もお付き合いで下さり有難うござります。

さて、次章はミレイが最終米花女子大学の生活前

を書かせて頂くと共に・・・夏美の身上再び

‘何かが起ります’。其れは取り合えずお楽しみと言つ事で。

それでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

ミレイ「・・・どうやら。此處で終わりだね。」

真理恵「・・・ミレイさん？」

と続け様に「次章もどうぞ宜しくお願ひ致します。」

## 第62章。ミレイ最後の大学生活前そして・・夏美・・の死。（前編。）（前書き）

今章も長丁場でそして残酷なシーンが入ってあります  
その辺もじに注意しながら御覧下さい。

## 第62章。ミレイ最後の大学生活前そして・・夏美・・の死。（前編）

アレからミレイは自分の自宅でジンとそして後から会流したウォツカ達と過ごしていた。

一方、アレから赤井との電話を終えた夏美は愛車の青ベンツを走らせて米花デパートに

行ってタバコとその後有理の誕生日のプレゼントを買つた。

三田町のイヤリングだった。

夏美喫煙所で「やっぱ・・、ネックレス、と、おソロ、の方が良いよな。」

と同時に「仕事も終わつたし、よつやくあいつを、構つてやれる」。

「

そう・・両親が広州に、散らされて、以来夏美は、ワカバ、の仕事でろくに妹に

構つ事が出来なかつた。

夏美「・・此れでひと段落だが・・・。」

ジンの下の元にも戻る事が出来る。

そつ思い喫煙所の灰皿にタバコを消し有理への誕生日プレゼントを持ち喫煙所を出て駐車場に

向かつた。

そして駐車場に付き愛車でアジトに向けて走り出した。

すると夏美タバコに火を灯し「ん？」

あ・・アレは？！

黒のクラウン！

と詰つ事は・・チヨンラン？！

そう、この車は黒のクラウン234C。

夏美の両親を死に追いやった。

広州の討伐隊の体調であるチョンランの愛車だった。

夏美は急いでその後を追つた。

チョンランサイドミラーを見てニヤリと笑い「シャアアメイ夏美か。

」

そう言い米花港へと向かつた。

夏美「あつちは米花港。」

と同時に何故・・奴は?

そう疑問に思いながら両親の無念を晴らす為に追い続けた。

逃がすかよ!

と続け様にじめん・・皆。ちょっと帰り遅くなるわ。

そつワカバの仲間に謝っていた。

そして、米花港に着き一つの倉庫を見たその倉庫前にはチエンランの愛車の黒クラウンが

止っていた。

夏美「・・此処か。」

そつ言い青ベンツを止め降りその倉庫の中に入つて行つた。

次の瞬間・・・！

ドシュッ！！

槍が夏美を貫いた。

夏美の胸から血飛沫が舞つた。

夏美タバコを床に落としてまつてそしてその槍を見て軽く舌打した  
後フツと笑い

「死の槍、か。」

すると、チエンランが現れた。

夏美「・・・ひ、久しづりだね。チエンラン。な、何故？お前が・・  
？」

チヨンランフツと笑い「あの時の我等の計画の、邪魔と、そして・・・  
メイラン様の

「命でね。」と続け様に「、私の所、に完全に従わず戻らなかつた  
ら・・。

‘殺せ’との事を言われたのよ。」

夏美「・・そ、そつかい。」

チエンランクスと笑い「貴女がいけないのよ。メイラン様の下に戻  
らない、貴女、が。

ワカバの所にいる限り両親と同じ、運命を辿るのよ。」

そう言い後ろを向いて「、わよつながら。」とその場を後にした。

そして、倉庫内には夏美只一人取り残されていた。

夏美壁側に身を下ろすと再びタバコに火を灯し、懐から携帯を取り出し、メールをうち

始めた。

一方、此処はワカバのアジト。

オウガの部屋にほぼメンバーが集まつていった。

その中に勿論服部とコナン。

そして、ミレイの自宅から出て来たジン達も居た。

すると、ライカが夏美の「氣」が不安定そして・・消えかかっている事を感じた。

オウガの側に居た1人の女性がガライカに声をかける。

「ライカ?どうしたの?」

ライカ「・・・相棒(夏美)の氣が、不安定になり、消えかかっているよ。」

姉様。「

ライカに声をかけた女性の名はレイカ・ネアン。ライカの実の姉であり、ワカバの副首領である。

り、オウガの恋人。

レイカ其れを聞いて驚いて「な・・何ですって?・!それ・・本当なの?・!ライカ?」

ライカ頷き「だけど・・探しに行こうにも夏美の場所が・・。」

シユウワ「そう言えば・・夏姉。タバ」と有理ちゃんの誕生日のプレゼント買いに

米花町にある米花デパートに行くつて言つていました。」

ライカ「そうか。だが・・相棒のこつた。用事が終わつたら喫煙所でタバコ吸い終わつた

後すぐにデパートから出でてくるだらひつよ。」

すると、ジン「オウガ。あいつに発信器付けてねえのか？」

オウガ領き「ああ。あいつは基本的にプライベートは邪魔されるのが嫌いな奴でな。」

ジンタバコに火を灯し「クソツ！」

すると、「ナン小声で「おい。服部。」

服部小声換えして「何や？工藤？」

コナン小声で「突然で悪いがバイクあるか？」

服部小声で返して「ああ。あるで？」と続け様に「まさか・・・？工藤？お前、あいつの場所

分かつたんか？」

コナン領き小声換えして「ああ。あいつには悪いんだが、ちょっと  
‘嫌な予感が’してよ。

あいつの愛車である青ベンツに発信器を忍ばせてもうつたんだ。」

「服部其れを聞いて小声で換えして、そ・・其れは朗報や！それで場所は？」

「ナン小声で誰にも見えなこよつに追跡メガネのアンテナを伸ばし  
「米花港。」

「服部小声換えして、おつしゃー。」

「そう言い服部「オウガハンー、ちよこと出でてきますわー。」

「オウガ「何処へ行くんだい？平次君？」

「ナンニヤリと笑い「分かつたんだよ。オウガ様。夏美姉ちゃんの  
居場所が！」

オウガ「何？！其れ本当か？コナン君？！」

コナン領き「米花港。此処に今夏美姉ちゃんがいる。

ライカ「其れは朗報だ！」と続け様に焦りをも見せ「は、早く行かないと・・相棒が・・。」

するとライカの携帯が鳴った。

ライカデニムの左ポケットから携帯を取り出し「夏美？」

そしてメールを見て「……」

ライカ。

今まで有難うな。

お前さんが幼馴染そして相棒で本当に良かつたよ。

夏美。

ライカ「夏美？！」

するビジンがライカの側により、「ビうじた？」

ライカ「ジンの兄貴様。相棒から・・・」

ジン「見せてくれ！」そう言ひライカから携帯を借りて「……」

と続け様に「……今まで有難うな。お前さんが幼馴染でそして相棒で良かった

よ。」だと？」と続け様に「縁起でもねえ事言いやがって！」と続け様に「ウォッカ！」

ウォッカ「へイ！兄貴ツ！」

ジン「車の鍵寄越せ！」と続け様に「おい！江戸川コナン！」「

コナン「な・・何？」

ジン「ナンを見て、夏美の場所米花港だつたよな？」

「ナン頷いた。

ジン「俺も行く！東西探偵組みは俺の車に乗れ。」

と続け様に「ウォッカとベルモットはミレイの側に居てやれ！」

ウォッカ「了解しやした！兄貴ツーお氣をつけて！」

ベルモットも頷いた。

そして、ジン服部達を連れて黒のポルシェ356Aの所に向かおうとした

と同時にライカ「ジンの兄貴様ツ！お待ち下さい！」

ジンライカの声を聞き止つて「お前も・・来るか？」

ライカ頷いた。

ジンフツと笑い「だつたら、急げ！」

ライカ頷き「有難う」ぞ」ます。」

そう言いオウガ達に一礼をして部屋を出てジン達と共に黒のポルシ  
エ356Aに

乗り込み米花港へと向かつた。

ライカ「・・頼むッ！相棒ッ！ぶ・・無事で持つてくれよ～！～！」

と叫んだ。

第62章。ミレイ最後の大学生活前そして・・夏美・・の死。（前編。）完。



## 第62章。ミレイ最後の大学生活前そして・・夏美・・の死。（前編。）（後編。）

今章もお付き合い下さり有難うござります。

さて、次章はこの後編を書かせて頂く予定です。

今章も次章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

有理「・・姉さん？」

と続け様に「次章もどうぞ宜しく。」

## 第63章。ミレイ最後の大学生活前そして・・夏美の・・死。（後編）（前書き）

此方も急ではありますぐ・・・個人的に修正しないといけないと感じた部分があつた為

一先ず此方も訂正をさせて頂きました。申し訳ありません。

しかし、内容はさほど変わっていないと思います。

今章も前章の続きです。

今章も前章に引き続き残酷シーンありの長丁場です。

御覧頂く際にはどうぞお気をつけ・・・。

## 第63章。ミレイ最後の大学生活前そして・・夏美の・・死。（後編）

此処は、米花港のある倉庫。夏美はチエノランを追っている内に、死の槍。を喰らつて

ほぼ、瀕死、の状態に近かつた。

夏美は自分に突き刺さっていた死の槍を手で抜き取つた。

と同時に痛みが走る。そして・・。

夏美タバコ吸いながらフツと笑い「・・此れで良い。誰にも見ないよつに。そして・・

そつと・・・。」そつと今度はデニムの左ポケットから写真を取り出した。

その写真にはとある日に夏美の地元にある若葉町のある丘だった。

其処に写っているのは父大樹。そして、母楓、夏美、有理の写真。

夏美「……」、「じめんね。父さん。母さん。び、びうやう・・約束は・・。」

「果せそうに無い。」

有理。

「どうか、許して欲しい。」

こんな、身勝手な姉を。」

そして、誕生日祝つてやれなくてごめんな。

私のたつた一人の愛しい妹よ。

そして「じめんね。ジン。」

どうやら私じゃあは貴方より、先にくたばつひやう見たい。

そして・・平蔵さん。平さん。

せつかく助けて頂いたこの、命、無駄にしてすみませんでした・・。

「ナン。

いや・・今はいつ呼ばせてくれ。新。

色々と世話かけてすまんかった。

お前さんと一緒にいると物凄くワカバの皆同様楽しかったよ。

早く蘭さん所に戻れると良いな。

でも、ジンをあまり追い詰めないでよ。

兄様。そして、姉様。  
レイカ

色々といざ迷惑、ご心配ばかりお掛けして申し訳ありませんでした。

ワカバの相棒達（仲間）今まで有難うよ。

すると、独特のエンジン音がした。

夏美「・・！ま、まさか？！」

この独特的エンジン音・・。

黒のポルシユ356A？！

ライカ「相棒ツ！-！-！」

夏美「！！」

「・・ライカ？！」

コナン「ライカ姉ちゃん！夏美姉ちゃんがいる倉庫は此処だよ！だ  
つて、夏美姉ちゃんの

愛車である青のベンツが止っているもん！」

とコナン一つの倉庫を指をさす。

そして、ジン「夏美ッ！」

叫びながらその倉庫に入つて行つた。

それに続きライカと服部達も入つて行つた。

コナン

クソッ！！死なせるかよッ！あいつには・・あいつには妹がいるんだぞッ！！

灰原みてえに・・悲しい思いさせつかよッ！！

頼むツ！・・夏美ツ！・・

逝くなツ！！

そして、一足早く倉庫に入つたジンが見た光景とは胸から血が大量に出ていたタバコを吸つた

夏美の姿だった。

ジン「な・・夏美ッ！・しつかりしろッ！」

そつ言い夏美を自分の所に抱き寄せた。

夏美「ははっ。ざ・・・様内ね。」、「こんな、姿、を、恋人、に見  
られてしまうなんて。」

とタバコを吸つた状態で言つた。

するとライカ「相棒ッ！」

そしてライカもその夏美のその姿を見て驚いた。

ライカ「あ、相棒？」

夏美ニヤリと笑い「よ・・・よおー相棒！」

といつもの様に明るく振舞う。

と続け様に「ど、どうしてこの場所が分かった？」

ライカもタバコにいつもの様に火を灯しコナンを見て「コナン君の発信器だよ。」

そしてコナン夏美の所に行き「・・悪いな。お前が、プライベートの時間邪魔されたく

ねえつてのは分かっていたんだけどよ。何か、何となく嫌な予感がしてよ。」

知らぬ間に何時もの新一口調で話していた。

ジン其れを聞いて少しばかりあるが驚いた。

夏美「や、やっぱ相変わらずお前さん凄いな。其れも、探偵の性つて奴かい?」

コナンフツと笑った「ああ。まあ・・・そんな所だ。」

と続け様に服部も来て「・・・夏美。」

夏美「い・・いやあ申し訳ないです。平さん。」「・・こんな無様な格好を・・。」

とフツと笑いながら言った。同時に申し訳なむづつな顔で「せつ、せつかくあの時

‘助けて頂いたこの命’を・・無駄に。」

服部「しつ・・しつかりせえや！・・夏美ッ！戻るやろ？！また・・皆の所に！」

それで・・有理に、プレゼント、渡すんやろ？！な・・なのに？！  
こ、こんな所

でくたばつたらアカソツ……」と続け様にジンを見て「そして、仕事がひと段落したら

この男の所に戻るんぢやつか?」と更に続けて「もし、お前に何かおつたら・・・

俺、親父にしばらく顔向けできんねん。だ・・だから、生きてくれや……夏美ツ……

頼むからツーもつ一度俺達に元気な姿そして、やかましい、姿見せてくれや……

そつ言い珍しく涙ぐんで叫んだ。

「ナン」・・・服部。

夏美再びフツと笑つた後再び血を吐いた。

ジン「夏美ッ！」

ライカその様子を見て察しそして夏美の隣に落ちていた槍を見て舌打をした。

コナン「其れは？」

ライカタバコ再び加え直し吸つて「前にも話した事あつたよな。夏美のご両親の死に

ついて。」

コナン頷いた。

ライカタバコ吸いながら夏美の血が付いた槍の枝の部分を持つて「  
こいつは・・

夏美のお母さんを死に追いやった。広州の討伐隊の隊長であるチハノランの

武器である槍だ。」

「ナン其れを聞いて「じゃ・・・ま、 まさか? !」

ライカ頷き「ああ・・・その、 まさかよ。」

コナン「・・・死の槍。」

ライカ「こいつを喰らつたら・・確実に待ち受けるのは、死。」

恐らく夏美はデパート帰り後運悪くチョンランを見つけ追つたんだ。

そつしたらこの倉庫に入つたら行き成りここを喰らつてしまつた  
んだひつせ・。。「

コナン其れを聞いて思わず固まつてしまつた。

ジン達もライカ達の話も嫌でも聞こえてしまつた。

ライカ槍をその場に一先ず置き再び夏美の下へとコナンと共に歩いて行つた。

すると夏美「・・・な、なあ。相棒?」

ライカ「あいよ。相棒。」

夏美「……最後の相棒の頼み事、聞いてくれねえか？」

ライカタバコを吸いながら夏美の所に膝を付き「私で良ければ…何でも来てやるよ。」

そして、夏美懐から愛車の鍵を取り出し「帰り運転してくれねえか？」私しゃあは

もつ・・難しいと思つから。」と更に続けて「後部座席に・・白い袋があるから・・。

その中に小さな白い箱が入つていてと思つから・・・そいつ、をい・妹の・・

有理に渡してやつて欲しい。」

ライカ夏美から夏美の愛車の鍵を受け取り「・・分かった。渡しとく・・。」

夏美其れを聞いて再びフツと笑つて「、有難う、よ。」

そう言い携帯灰皿にタバコを揉み消した。そして服部を見て「・・平さん。」両親を

そして和葉さんを、大事にしてあげてくださいよ。」と更に続けて「いんな事・・

私が言つのも何なんですが・・ぐれぐれも、「無理はなさらないで下さい。」

服部「・・ああ。氣いつけるわ。」

そしてコナンを見て「・・大事にしてあげなよ。」、「彼女等」を・・

「彼女等」を・・守れるのは、お前さんしかいないんだよ。」と同時に一瞬

ジンも居たから本名で呼ぶのを躊躇したが・・・コナンを見て小声で  
「じめんな。多分・・

此れで、最後、だと思つから・・・好きな様に呼ばせてもいいつよ。  
新。」

コナン其れを聞いてジンに正体をばれるのを覚悟をしそしてメガネ  
を外し

「バーロー。最後だ何て・・・。縁起が悪いぜ?、こんな、別  
れ方、なんぞ・・

本当は、したくねえ、んだがよ。夏美。」

ジンそのコナンの姿を見て一瞬驚いたが再び冷静を取り戻しフッと  
笑い

「やつぱり・・お前、あの時俺がトロピカルランドでぱらじたはず  
の・・

「東の名探偵だつたか。」

「ナン領き「ああ。そつさ。お前にあの時毒薬を飲まされた工藤新一だ。」

ジン「ガキの姿になつて・・生きていたとはな。」

「ナン（新一）フツと笑い「さすがのお前でも、驚いたか、？ジン。」

ジン「ああ。多少な。」そして夏美に再び顔を向けた。

ジン「・・夏美。」

知らぬ間に涙が頬をつたつっていた。

夏美顔にジンの涙が落ちて、夏美その様子を見てジンの頬に手をや  
り、「どうしたの？」

「珍しいじゃない、貴方が人前で泣くなんて・・・。」と続け様に「  
それとも・・・。」

貴方、本気で、私を愛してくれていたんだ」。

ジン「当たり前だッ！？」と続け様に「お前、くたばんないよって  
言つた筈だろ？！」

夏美ジンの頬から手を離し再びタバコに火を灯し微笑んで「う・  
ごめんなさいね。

何せ・・・行き成り、だったから・・でも、ちゃんと結果的には、  
貴方の腕の中、に

戻つたでしょ？」

ジン「ああ。」そう言い夏美からタバコを取つてそして夏美にキスをし再び

タバコを夏美の手に戻した。

夏美一瞬驚いたがすぐにフツと笑いタバコを吸い始めた。

そして「・・ああ。何か、眠くなつてきりやつた。」もう、「限界かな。」

ジン其れを聞いて「おいッ！夏美ッ！..寝るなッ！..」このまま起きてろーー！」

と続け様に「お前・・俺を置いてくだばる気か？！」

夏美「・・・」めんなさい。でも、‘限界’。」と更に続けて「ねえ・ジン。私の

‘最後のお願い’。」

ジン「・・何だ？」

夏美コナンを見て「新が・・・生きていた事、組織には‘内密’にしていて

欲しいの。あいつも、あいつで、待たせてくる最愛の女<sup>ヒト</sup>がいるから・・・。」

ジン「ああ。」ヒツガワカバを、裏切らねえ、んだつたら内密にしておこしてやる。」

と「ナン」を見て言った。

ジン更に続けて「となると…夏美。」といつが生きていると言ひ事  
は・・シェリーも生きてい

るんだろう? 場所は何処だ?」

夏美再びタバコを口に加え直しそして「It, s a big s  
e c r e t . . . 。

I ' m s o r r y . . . I c a n , t t e l l y o u . . .  
. A S e c r e t m a k e s a w o m e n w o m e n .  
. . .  
「

と更に続けて息切れ状態で「あ、貴方ど、あ・・あの時偶然にもさ、  
再会した時に

いつ・・言つたでしょ? わ、私はそ・・組織には、深く関与、しな  
い事にしているって

・・・。」と続け様にライカを見て再びフツと笑い「・・・わ、悪い。  
あ、相棒・・。

さ、先に、逝く。」そしてジンに「あ・・・有難う。あ・・・愛  
してゐわ。」ジン。

そう言いそして服部と口ナカンには軽く挨拶してジンの腕の中で安ら  
かに、死んでいった。

そして、夏美のタバコが手から床に落ちた・・。

ライカ「お・・おい?じょ、[冗談だろ?]!あ、相棒?!--お・・おい  
ツ!目を開けてくれよ!」

相棒・・・相棒オオオ~~~~~!」とそ  
の場の夏美の亡骸に

すがりつき泣き叫んだ。

ジン夏美の「骸を強く抱きしめ「広州の討伐隊のチョンランッ…！俺が…・必

‘地獄へと突き落としてやるぜ’！覚悟して置けよッ！’そう叫び広州への‘復讐’を誓つ。

服部拳を壁にぶつけ‘く・・クソオー！何でこいつが死ななきゃあかんのやあああ…！」

「ナン」止められ、服部ツーもつこれ以上…やつたら手が赤くなるツー

「ナンに止められて‘ああ…すまんかった。工藤。ついな…。」

「ナン・・・・服部。」

そして、ジン夏美の亡骸を自分の漆黒の「コード」に包み「帰らうぜ。  
こいつを連れて

こいつが大好きだった、ワカバ、によ・・。」

ライカ自分が吸っていたタバコを携帯灰皿に揉み消しそして床から  
夏美の吸いかけの

タバコを拾い吸い始めて「そうですね。‘連れて帰りましょう’。」

そう言いチエンランの死の槍も事前に用意してあつた漆黒の布に包  
み持ち帰つた。

そして、ライカは夏美の愛車である青のベンツに乗り込んだ。

その後部座席には服部とコナン。

そして夏美の亡骸はジンの意向によりジンの黒のポルシェ356Aの後部座席に乗せた。

チエニクンの、死の槍、と共に・・・。

そして、2台の車はワカバへと戻つて行つた。

と同時にその2台の車を黒のシボレーが追つて行つた。

第63章。ミレイ最後の大学生活前そして・・夏美・・の死。  
（後編。）完。

## 第63章。ミレイ最後の大学生活前そして・・夏美の・・死。（後編）（後書き）

今章もお楽しみ頂き有難うござります。

さて、次章では再びワカバそして・・

ミレイの最後の大学生活について書かせて頂く予定

となつております。もしかしたら・・

赤井さんもひょっとしたら出てくれるかも知れません。

尚・・この第1作目では夏美さん、亡くなりました、

が・・書いている内に有理ちゃんが・・

可愛そうな気がしてきましたので・・・。

尚・・この小説で出てくる広州はどうなったかと言つと・・。

恐らく時間上・・書けませんでしたが、ジンの兄貴様の仕打ちを受けたと思って頂ければ

幸いでござります・・。

第2作目と3作目の（連載）では死なせずに・・

そのままJリーグ場で勝つ事をこれから頂いて

思つておつめす。

夏美さんスマッシュー(汗)

と同時に次章もどうぞ宜しくお願ひ致します。

オマケ

夏美「おこおい・・堪忍してくれよ。汗」

と続け様に「次章もどうぞ宜しくー。」

## 第64章。夏美ワカバへの無言の帰還。そして、ミレイ米花女子大学での最後。

今章は夏美がワカバに無言の帰還をします。

今章も前編後編で長丁場となつております。

予めご了承ください。

## 第64章。夏美ワカバへの無言の帰還。そして、ミレイ米花女子大学での最後

此処は、ワカバ。

ライカはオウガに夏美の訃報にの事について報告していた。

オウガ「…………夏美の奴が、死んだ、だと？」

オウガは驚きを隠せないで居た。

其れはオウガの部屋に居たワカバのメンバーも驚いていた。

ライカ「・・・はい。デパート帰り後運悪くチエンランと遭遇してしまったそうです。」

と同時にオウガに一礼して「申し訳ありませんでした！兄様<sup>にい</sup>ツ！」

オウガ「…いや。お前のせいではない。自分を責めるな。」

と同時に「夏美は？」

ライカ「ジンの兄貴様が・・うちの遺体安置場所に・・。」

オウガ「・・そうか。」

と同時に、大樹、楓・・すまん。

お前達と、約束、したのにな・・。

そして、雷龍拳を握り締めて「・・・姉者。」

雷明も涙を堪えながら「・・・姉上様。」

2人とも自分の主・・そして姉貴分を守れなかつた事を心の中で悔やんだ。

そして、ジンが部屋に入つて來た。

ウォッカ、ベルモットジンに気が付くが何で声をかけたら良いか分からなかつた。

するとレイカ「・・・この事、有理には？」

ライカタバコにいつもの様に火を灯し「いや・・まだ、伝えていい」。

と続け様に「‘伝えない方が、返つて良いかと思うんだ。姉様。」

レイカ「・・・そう。」

すると、人の気配を感じた。

ライカ「・・誰だ？」

そう言いつと服部が「俺が見てくるわ。」

そつ言いドアを開けた。

すると其処には信じられない顔をした有理がその場に立っていた。

ライカ「・・ゆ、有理。」

有理は只何も言えずその場に立って死んでいた。

そして・・・。

有理しばらく沈黙した後「ね・・姉さんが、死んだ、つて本当?」  
イカ姉さん?」

とライカに聞いてきた。

ライカ其れを聞いて只黙つていた。

有理部屋に勢いよく入つてきてライカの両腕をつかんで「ねえ・・  
?本当なの?!

教えてよツー!ライカ姉さん!」

と詰め寄つた。

そしてライカ有理の顔を見る事出来ずに小さく頷いた。

有理「・・そ、そんな。姉さんが・・・。」

そう言いうライカに居場所を聞いて夏美の遺体が安置されている遺体安置所まで急いで行つた。

「あらとシユウワライ・・・有理さんッ！」

と有理を追おうとするが、オウガに「止めろー一人にしてやれ。」

其れを聞いたショウワイ頷いた。

しかし、オウガも有理の事がどうしても気になりモニターで確認をした。

一方、有理は遺体安置所に居て夏美と対面していた。

無言のままの姉。

それでも有理は何かを話そうとしていた。

有理「・・・姉さん。お帰り。」と続け様に姉の顔を触り「ねえ・・・姉さん?」これ、

「演技」だよね?また・・・起き上がって、有理、つて、呼んでよ。

「

しかし、夏美からは何も返事が戻って来ない。

それでも有理笑顔で「ね・・・ねえ。姉さん。起きてよ。ねえ・・・。姉さん。

お願いだから・・・起きて・・・ねえ・・・今日私の「誕生日」なんだよ?

姉さんと同じ20代になつたんだよ?一緒に、お酒飲もう、つて・・・昔だけど・・・

‘約束したよね、？」しかし···何も返事が返つてこない。

次第に、有理よつやく、姉が死んだ、事を理解する。

有理涙を流し「···姉さん。お願いだから、1人にしないでッ！  
つて

言つたのに···。」そう言い夏美の遺体にすがり付いて···姉  
さん。夏美姉さん···。

ねえさああああああん！···！』と思いつきり泣き叫んだ。

すると有理はふと昔に両親が逝った時の夏美の言葉を思い出した。

(有理が物凄い悲しんでいる所に夏美が来て

「大丈夫だ！姉さんが付いているッ！だから・・・だから・・・もう、泣くな、！」

今度は、姉さんがお前を守つてやるからな。だから・・安心しろ。  
)

と笑顔で。

有理「・・姉さん。」

すると夏美の声が聞こえてきたような気がした。

— 有理。ごめんな。あの時守つてやるつて約束したのに・・もづ、  
側に居てやれなくて。

本当にじめんなー

と有理はしづらへ夏美の遺体から離れようとせしなかつた。

一方、ミレイは、ワカバでの夏美の訃報を聞いた後ウォツカ達に断  
りを居れ

大学にいって行つた。

そして、ミレイ最後の米花女子大学での生活が始まった。

第64章。夏美ワカバへの無言の帰還。そして、ミレイ米花女子大學での最後。（前編。）

完。

## 第64章。夏美ワカバへの無言の帰還。そして、ミレイ米花女子大学での最後。

今章もお付き合い下さり有難うござります。

さて、次章は今章の後編を書かせていただきます。

次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

有理「・・・・・」

「次章もどうぞ宜しくお願ひします。」

## 第65章。夏美ワカバへの無言の帰還。そして、ミレイ米花女子大学での最後。

今章は前章の後編です。

此方も長丁場であり暗い話です。。。

「観覧頂く際には」「注意を。

## 第65章。夏美ワカバへの無言の帰還。そして、ミレイ米花女子大学での最後。

此処は、米花女子大学何時もの様にミレイは授業を受けていた。

其れも、此処での最後の授業。

そして、ミレイ心の中で・・・。

雪音姉さんやそして・・琢磨兄さん、夏也んまで、居なくなつてしまつた今、

私自身が、表の世界、に留まる意味もない・・。

ごめんね。

雪音姉さん。

姉さんが、ジン兄さんにあの時、殺されていたのに、それで…  
闇から逃げ出して

来たのに…。、結局は…。

私は…。

‘闇の方が心地良い’。

だって…。私は。

元々は‘闇の人間’。

と呟いた。

そして、私の心中で‘闇の声がした。’

ワタシハ、ウマレモソダチモ、ヤミ。

ダカラヤミカラヌケダスコトハナカナカ、ムズカシイ。

ワタシノコロロノヨリドコロハショセン、ヤミノナカ。

するとい、1限の授業も終わり・・そして、2限の授業も終わり、

そして、//レイひとつで最後の授業である3限が始まらずして・・

終わった。

すると、真理恵が何時もの様に寄つて來た。

「//レイさん。」

「レイ「ああ。沙江島か。」と続け様に「13日のパーティー有難うな。」

真理恵「いいえ。此方こそ態々来て頂いて有難う。」と続け様に「ねえ・ミレイさん。」

ミレイ「何?」

真理恵「映像上映前から姿見えなくなつたけど・・・何処に行つていたの、?」

ミレイ其れを聞いて「ああ。ちょいとね。」

とほぐらかした。

真理恵「・・・そつ。」

そしてカノンも来て真理恵にパーティの件でお礼を言っていた。

そしてミレイ事前に帰り支度を済ませて「じゃ・・私しゃあは此れ  
で。」

そつ言い教室を去つて行こうとしたその時カノン「ミレイ。

「ミレイ「ん?」

カノン「今日・・せけに何時もより荷物多くない?」

ミレイフツと笑い「そうかい? 気のせい、だよ。」と続け様に「

じゅね。 「

そつ言い今度こそ教室を去つて何時もの様に喫煙所に向かいタバコを吸い始めた。

そして、ブロンドの髪の女性が入つて來た。

ミレイ「・・ベルモット姉さん。」

ベルモット事クリス・ヴィンヤード。

「あら? その荷物のふた・・。どうやら、もう、・・。」とクスと笑つた。

ミレイ領き「ああ。もう、表には用はないからね。」

と続け様に「どうして？分かったの？」

ベルモットタバコに火を灯し再びクスと笑い「何となくよ。ジンから既に聞いていたからね。

貴女が、闇に戻る、事を。」

ミレイタバコ吸いながらフツと笑い「そうかい。」と続け様に「でも、今回は普通に

答えてくれたね。」と更に続けて「何時もの、口癖、が出てくるかと思つたよ。」

ベルモットクスと笑い「ああ。 A Secret mekes  
a women women, でしょ？」

と続け様に「そう、言つて欲しかった、？」

「ミレイ」ううん、特に・・・。

そう言いにタバコを消し「んで? ベルモット姉さんが此処に居るって  
言つ事は・・・。」

ベルモットもタバコを消し「ええ。貴女の、迎え」。と続け様に  
「ジンに頼まれてね。」

ミレイ「有難う。」

そして、ベルモットミレイの荷物を持ち「じゃ・・行きましょうか？」

ミレイ頷いた。

そして大学の路地裏に止めてあつたベルモットの車で一度ワカバに戻る為

ワカバに向かつた。

一方、此処は再びワカバ。

有理はアレからずつと遺体安置所に居たが一先ず自分の部屋に戻つて行つた。

その後、赤井が入つて來た。

赤井「・・・夏美。」

「大丈夫ですよ。私はそう簡単には、くたばりません、って。広州を完全につぶす

まではね。 -

そして夏美の顔に手をやり、「、くたばらない、って言つたくせに・。  
そう簡単に

‘くたば、つちまつて。お前は・・・何処まで・・・。」

1人で背負い込み・・1人で・・・。

そして夏美の笑顔が赤井の脳裏に蘇つて來た。

赤井「・・・・・お疲れさん、妹よ。」

そう夏美は赤井の、妹分でもあつた。

だが、FBIの仕事等でろくに構う事が出来ずにいた。

赤井フツと笑い「うなるんだつたら……もつと、お前を構つてやれば良かつたな。」

と同時にまじめな顔になり「……すまない。夏美。」

そして、有理が再び遺体安置所に戻ってきた。

有理「あ。」

赤井「よー、有理。」

有理「・・秀一兄さん。」

と続け様に「来てくれたんだ。」

赤井「ああ。」

そして、有理行き成り赤井に飛びついた。

赤井「・・・有理。」そう言い有理を口抱きしめた。

一方此処は再びオウガの部屋。

オウガは未だにモーターを見続けていた。

オウガ「・・赤井。」

と続け様にレイカ「彼もあえて、危険な事、するわね。ここにはジョン達も居るのに・・。」

オウガ「ああ。そうだな。」と続け様に「とまあ、あえて、危険を冒して、まで・・

夏美に会いたかったんだろうさ。」

ジンタバコに火を灯し「奴と夏美の関係は?」

オウガ「赤井と夏美は兄妹分だったんだ。」

其れを聞いてジンタバコを吸いながら・・・。

「ほひ。 さうか。 でも、 夏美は俺に 一言も言わなかつたぞ？」

オウガ「、 言いたくても、 言えなかつた、 んだろ? 何せお前の所の組織と

赤井が所属しているFBIは、 敵同士、 だからな。」

ジン其れを聞いて「たく・・それだけじゃ、 怒りねえ、 のによ・・。

」

あると「あら? 果たしてさうかしり?」

とベルモットの声がした。

ジン「・・ベルモット。」とのドア越しで言った。

するとベルモット、ミレイと共にオウガの部屋に入つて來た。

ベルモットクスと笑い「貴方の事だから、お氣に入り、ちゃんを敵に取られるのは

かなり嫌がると思つけど?」

ジンベルモットを睨みつけて「・・テメH。」

やつ面にベレッタの安全装置をはずした。

その顔を聞いて//レイ慌ててジンの所によつて「お・・落ち着いて  
！・ジン兄さんッ！・

ベ・・ベルモット姉さんも悪気はなかったのよー。」と必死で宥めた。

ジン「ミレー。」やがて安全装置を元に戻した。

其れを見たベルモット再びクスと笑い「あらへ//レイの前では、素直、なのね？」

ジン「・・・すみません。」

ウォッカ心の中で・・。

ミレイの姉さんすげ。。。

あの兄貴を一瞬で。。。

すると、ジンウォックを見て「何を考えていた? ウオッカ。」

ウオッカ「い・・いえ。特に何も。」

と慌てて弁解した。

そしてミレイオウガの所のモニターを見て「本当に・・・夏さん居なくなりちゃった」

んだ・・・』と悲しそうに呟いた。

オウガその様子を見て「・・ミレイ。」

ジン達もミレイのその様子を黙つて見ていた。

一方此処は再び遺体安置所。

有理は赤井から離れた。

そして赤井「それで？お前これからどうするんだ？」

有理「…姉さんの、拳法、受け継いで此処にずっと、留まひつ」と思つ。」

赤井其れを聞いて「だが、姉は…そう、望んでいない、んだろう？」

有理「・・かもしだい。だけど、姉さんはお父さん達の、意思を受け継いだ。

「逃げてばかりでは、何も、変わらない。だから・・。

赤井「、本家、には戻らず、ワカバ、に居る。そう言つ事か・・。」

有理頷きをして、再び夏美の遺体の所に向かいそして左腕に手を乗せ  
「姉さん、私が今度は、お父さん達の拳法を受け継ぐよ。」其れと  
同時に

「姉さんの意思も、・・。」やつ言つて、「拳法伝承術。」

すると夏美の左腕から有理の左腕へと光が渡った。

「うして有理は両親と姉の、意思を受け継いだ。」

赤井は只黙つて其れを見ていた。

と同時に、夏美・・・有理はお前が思っているより、強かつた、ぞ。

そつ心の中で再度呟いた。

そして有理「姉さん。ごめん。でもね・・此れは、私の意思、でもある。此れから

ワガバの為に頑張るよ。」

そして、赤井再び有理に近づき軽く頭を撫で「姉みたいに1人で背負い込むな。」

もし何があつたら俺で良ければ、相談、しろよ。」

其れを聞いて有理笑顔で「有難う。秀一兄さん。」と続け様に「私、此れからお兄様（オウ

ガ）の所に行くけど・・・秀一兄さんも来る？」

赤井フツと笑い「・・・いや。俺は、遠慮させてもいいよ。」と続  
け様に

「もしかしたら、‘奴’と鉢合わせになるかもしれないからな。」

（奴＝ジン）

「有理」・・・そつか。なら、‘仕方ないね。」

そして2人して遺体安置所から出て有理缶コーヒーを赤井に渡した。

有理「はい。秀一兄さんの好きなブラックコーヒー。姉さんに会つてくれたお礼。」

赤井「有難うな。」と続け様に「しかし、良く分かつたな。俺がブラック好きなの。」

有理「姉さんが言つていたの。秀さんコーヒーはブラックしか飲まないんだよってね。」

赤井再びフツと笑い「・・・そうか。」

あいつ・・・覚えていたのか。

有理「あ、もし出るんだつたら、裏口、から出た方が良いよ。」

と一つの裏側のドアを指差した。

赤井「やつをせてもりおひ。」やつに「じゃ・・またな。有理。」

有理領き「うん。またね。秀一兄さん。」

そう言いオウガの部屋に向かった。

そして、オウガの部屋に付き入って行き夏美の、葬式、についての説明を受けた。

第65章。夏美ワカバへの無言の帰還。そして、ミレイ米花女子大学での最後（後編。）

完



## 第65章。夏美ワカバへの無言の帰還。そして、ミレイ米花女子大学での最後（

今章もお付き合い下さり有難うござります。

さて、次章は夏美との最後の別れを書かせて頂きたいと思います。この小説も後残り・・わずかに迫ってきました。其れでは次章も今章と同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

オマケ。

ライカタバコに火を灯し「次章もどうぞ宜しく。」

## 第66章。夏美の葬式そして、有理の姉への想い。（前書き）

今章は、夏美の葬式の場面と有理の姉への想いを書かせて頂きました。此方も暗い話また長丁場になつておつますので、観覧する際には、注意と「理解」と「承をお願い致します。

## 第66章。夏美の葬式そして、有理の姉への想い。

そして・・。

2月16日（火）夏美の葬式が始まった。

場所は勿論ワカバの火葬場。

急遽服部の連絡で大阪から大阪府警本部長である父平蔵とそして和葉の父である

遠山刑事部長も駆けつけた。そして、夏美と有理の実家である橘家の本家人達も。

勿論。ワカバのメンバーそして、有理。ジン達もその場に居た。

だが・・赤井の姿は何処にも見当たらなかつた。

恐らく、此処でジンと鉢合せになつたら大変だろ？と思ひ自肅したのだらう。

そして、葬式の最後にオウガが皆に挨拶をしそして夏美自身にも、最後の言葉、を

かけた。

そして、有理も涙堪えつつも・・夏美の笑顔に写つてゐる遺影を見て

「・・見て。姉さん。今日はね、こんなにも大勢の方が、来て下さつたよ。」

と続け様に「私も昨日で20歳になりました。一応、大人の仲間入り」と

言つ事で此れから私も、自分の意思、でのワカバに留まる事を決めました。

と同時に、お父さん達の意思、そして、姉さんの意思、を受け継ぎます。

だから・・どうか。どうか。安らかにね。」と更に続けて「今まで本当にお疲れ様でし

た。」そう言つて夏美の遺影に一礼してその場から離れた。

そして、オウガ平蔵の所に行き声をかけてやつてください。と頼まれ夏美の遺影の所に

足を運び「・・・夏美。久しづりやな。まさかお前との再会が、こんな形、で実現してしまつ

とはワシ夢にも、思つとらんかった。」と続け様に「お前の訃報は・・・。平次から聞い

た。最初はワシも信じる事が出来へんかつたんや。何せ・・お前は

‘あの時、と同様に

‘そう簡単にくたばりは、しないと思つもみいひんかつたからや。今でもどつかから

お前が出て来てあの何時もの様に明るく元氣な笑顔で、びつも。平蔵さん。お久しぶりで

す。’とワシの所に顔出してくれそな気がして今でもならんのや。  
’と更に続けて

‘だが、今こいつお前の前に立つとそれが、現実、だと改めて思  
わされた。

こんな事・・言つて良いのか分からへんけど・・・今までお疲れさ  
んな。ゆつくり休んで

や。’ほな。こつか、向いひで余おつや。’其れまで、寂しいと  
思つが待つてくれ

な。」そう言い夏美の遺影に敬礼をしその場を去り遠山刑事部長の所に戻った。

遠山刑事部長は何も言わずにそつと平蔵の肩を軽く叩いた。

そして、最後に本家からもお礼の言葉を述べられ、葬式は終わった。

夏美の遺体は・・ワカバが所有するワカバの丘に両親の墓の側に埋葬された。

そして大阪組は一先ず大阪に戻り、本家組も本家に戻つて行き、

ワカバのメンバーも（有理を除いて）オウガの部屋に再び戻つて行つた。

一方有理はと言つと・・。

自分の部屋で本来なら姉から貰つはずだつた誕生日プレゼントの二日月のイヤリングを

ライカから受け取り其れを付けていた。

有理「・・・姉さん。」

今でも、姉さんの明るい声が、聞こえてきそうだよ。

私の部屋のドアの音が鳴り、よつ！有理！何やつているんだ？

つてね。そして私が、心配すると、何時もの様にタバコに火を灯し

ながらあの笑顔で

‘大丈夫だよ。姉さんはそう簡単にくたばらない、よ。だから安心しろ。ちゃんと

戻つてきちゃつから。’って私の頭を撫でてくれて言つてくれそ‘だよ。

でも、結果は、いじなつてしまつた、けど。私は、姉さんが側に居てくれたから

お父さん達が居なくとも何とか、堪える事、が出来た。

姉さんは何かと色々と、迷惑を、かけてしまつた氣がする。。。

でもね・・私ね姉さんの、妹、で本当に良かつたよ。

姉さんが常にどんな時も、私の事、を想ってくれていたんだもん。

お母さんみたいに不器用ながらもね・・。

私、姉さんのあの明るい笑顔を見るのがとてもとても、大好き、だつたんだ。

でも、もう其れが見れなくなるのが、とても残念に思ひます。

だけど・・このイヤリングとこのネックレスが姉さんだと思つて此  
れから私、頑張るよ。

この姉さんが愛したワカバと共にね・・。

そして、有理事前に夏美の部屋から持つて來た夏美が生前愛用して  
いたタバコである

ピマニシモワソをポケットから取り出し箱から一本取り出した。

そしてライターを探したが何処にも見当たらなかつた。

その時、一本の火を灯していたマッチが出された。

有理

あれ？マッチ？私持つていたかな？

すると「おー。早くしねえと、消えちまうぞ、？」

と低い男の声がして有理その声の主を見て驚き「ジ・・ジンさん？  
いつ何時の間に？」

ジンフツと笑い「・・悪いな。‘お前の事があれから気になつてよ。’様子を見にな・・。」

有理、ジンに差し出されたマッチにタバコの火を灯し「懃々有難うございます。」

ジン「いや・・。」そう言いマッチの火を消した。と同時に「‘大丈夫か’？」

有理頷き「大丈夫です。」そう言いタバコを吸い始めたが、一瞬呞てしまつた。

その様子を見てジンクツと笑い再び「大丈夫か?’と続け様に‘もしかして?初めてか?’

有理再度頷き「初めてです。だつて・・昨日20歳に‘なつたばか

り、だから。」

と苦笑いして言った。

ジン「そうか。なら、教えてやるよ。」 そう言つてタバコの吸い方を有理に教えていた。

有理ジンにタバコの吸い方を教わりつつクスと笑い「姉さんなら、タバコは体に毒だぞ」。

と笑いながら言われそう。

其れを聞いたジンはタバコを吸いながらニヤリと笑い「だったら何故、吸う？」

有理「此れ吸つていると・・・」のイヤリングとペンダント同様に、姉さんが側に居てくれそう

な気がして・・・、「と呟いた。

ジン」・・・やうか。」

と同時に心の中で・・・。

夏美。有理は、今でもこんなにもお前を・・・。

そつ恋きそして有理を自分の腕の中に抱き寄せた。

有理「！…あ・・・危ないですよー・ジンさん！私タバコ持つてこるのに・・・。」

ジンフツと笑い「、構わねえぜ。」と続け様に「なあ・・・有理。」

ジン「はい。」

ジン「、姉の代わりになれるかどうか分からねえが、・・・・・。

俺で良ければ、ずっとお前の側に居てやるば、？」

有理其れを聞いていつの間にか涙が出て来て「・・・、お願いします。」

とタバコを事前にテーブルの上に用意していた灰皿の上に揉み消してジンにすがりついた。

ジン「ああ。」そう言い有理を再び抱きしめていた。

そして、有理再び、夏美の声が聞こえてきた、様な気がした。

‘有理。人はな誰にだつて、幸せになれる権利、があるんだ。只・・其れが

中々、いかせられていない、と姉さんは思つんだ。人は色々と人に寄つちやあ

‘考え方方が違うと思つ。’だから、その考え方によつちやあ、幸せにもなれるし

返つて、不幸、にもなる。だから、有理・・・。お前にもな。

ねえ・・姉さん？

実はね・・姉さんには内緒だつたんだけビ・・実は私もジンさんの事が、好きだつた、

んだよ。姉さんが、惚れるくらいに、。だけど、姉さんに怒られそ

うな気がして

返つて言えなかつたんだ。

姉さんが、この男に惚れた理由・・今となつて何となくだけ、分かつた気が、

するよ。それと、姉さん<sup>ヒト</sup>「めんね・・。私は今自分の気持ちをジンさんに打ち明けます。

有理「・・・ジンさん。」

ジン「何だ?」

有理「実は、私・・・。前から、ジンさんの事が・・。」

ジン「俺の事が?」

有理「‘好きでした。’」と続け様に「私でも、姉さんみたいにちゃんと振舞えるか

どうか分かりませんが、・・・。今は、‘恋人の妹’として見て頂いても結構です。

ですが・・時間がたつたら・・・こんな事言つのも何なんですが、私を‘新しい恋人’

として見てくれませんか？」セツジンの顔を見て言った。

と同時に顔が真っ赤になつて一瞬ジンの顔から逸らしてしまつた。

ああ・・な、何言つているんだろう?私ったら・・姉さんの‘恋人’  
‘だつた男’に

我ながら恥ずかしい・・。

其れを聞いたジン再びクツと笑い有理の顎を持ち上げキスをした。

有理再び真っ赤になつて「・・・ジ、ジンさん??」

ジンニヤリ「此が、俺の答えた。有理。」と続け様に「だが、此れだけは言つておくぞ?」

俺は、待てない性分でもあり、氣に入つた者は中々放さない性分なんでな。」

有理「・・・ジンさん。」

そしてジン有理の耳元で「しばらぐ、じゃねえ・・・今日からお前は俺の女だ。」

と続け様に「‘分かつたな’？」

其れを聞いた有理は顔真っ赤にしつつも大人しく頷いた。

一方、オウガは自分の部屋で有理の様子を見ていた。

オウガ「…良かつたな」。有理。

レイカ「有理も此れで…安心ね。」

其れを聞いたミレイ「しかしまあ…有理もジン兄さんを好きだつたとは…。」

と笑いながら驚いた。

ベルモットも其れを聞いてクスと笑い「夏美も有理もある意味、物好きね、」

其れを聞いたウォッカは横で只苦笑いをしていた。

そして。。

シユウワイとシユウチョンもお互いに顔見合せながら「ねえ・  
シユウワイ兄さん。」

最初にシユウワイに声をかけたのはシユウチョンだった。

シユウワイ「何だ? シユウチョン。」

シユウチョン「なつさんも・・有理さんもある意味、凄い男ヒト、を好きになってしまつ

たねえ。」

シユウワライ腕を組みながら領き「俺も同感だ。」と言つた。

すると、雷龍が「おい。2人共、もしこの事がジン様の耳に入った  
らある意味

‘大変な事’になるぞ?」と笑つた。

其れを聞いたシユウワライ達は慌てて周りを見ていた。

その様子をオウガ達は笑つて見ていた。

第66章 夏美の葬式そして、有利の姉への想い。完。



第66章。夏美の葬式そして、有理の姉への想い。（後書き）

今章もお付き合いで下さり有難うござります。

さて、本小説も後予定では・・2章か3章位で

完結となる予定です。

と言いましてもあくまでも予定は予定ですから

その辺もご理解頂きます様宜しくお願ひ致します。

オマケ

ライカ「・・相棒。」と続け様に

「次章もどうぞ宜しく。」

## 第67章。ミレイへの夏美への想い。（前書き）

今章はミレイの夏美への想いを書かせて頂きました。

前章より多分短いと思います。

ミレイ自身の1人人称です。

## 第67章。ミレイへの夏美への想い。

アレから、ミレイはずっとオウガの部屋に居た。

ミレイも壁に寄りかかり腕を組みながら田を睨っていた。

そして。。。

夏さん。

今まで色々と本当に有難い。

私も少なからず、表で過じせた事本当に良かつたと思つてゐるよ。  
,

夏さん。

夏さんが私が、闇の人間であれ、そして、表の人間であれ、差別をせずに気さくに

接してくれた事をとても嬉しかったよ。

でもね・・・。

私はやつぱり、表で生きる事、は出来ないよ。

生まれも育ちも、闇、だし、私は、夏さんやワカバの眞みたいに、表で生きる事、

が出来る、強くない。

だけど・・。

此れだけは覚えて欲しい。

例え、‘住んでいるのが’闇であれ、表であれ私は、‘私’だし、  
其れが‘平等’だと

思つてゐるよ。

だから・・。

私は取り合えず‘大丈夫’だから・・。

だから・・。此れからも‘向こうで’あの明るい笑顔で見守つて

いてね。

多分・・有理もさう望んでこるよ。

それに・・それに・・。

ワカバの皆も・・。

だから・・・。

もう・・・心配しないで。

だから・・・。

私も・・いざれいつかは分からぬけど、向こう、行くよ。

もし、会えたら・・また一緒に、飲もう。

それまで・・待っていてよ。夏さん。

第67章。ミレイへの夏美への想い。完

## 第67章。ミレイへの夏美への想い。（後書き）

今章もお付き合いで下さり有難うござります。

さて、この小説も予定通りに行けば後・・1章位で

終わる予定です。

次章では、ミレイの闇への帰還。そして

ワカバについて書かせて頂きたいと思つております。

其れでは次章も今章と同様にお付き合いで下されば

幸いです。

オマケ。

哀「この小説も後1章で終わりみたいね。

工藤君。」

コナン「・・みたいだな。灰原。」

と続け様に「本当に終わるのかな・・・。」

ミノイ「どうだか・・・。」の作者『気まぐれだか』。

笑

コナン「・・おいおい。」と続け様に

「次章もどうぞ宜しくお願い致します。」

## 第68章。ヒローグ。（前書き）

今章では、ミレイとワカバを主に書かせて頂きました。今章での小説も完結です。此方はかなり長丁場になつておりますのでご了承ください。

此方で皆様にお詫びを致します。完結後再び自分で確認を含め読んでいたら

色々と訂正箇所が見つかりました汗。今更ではありますが訂正させて頂きました。

多分もう大丈夫だと思います。大変に申し訳ありませんでした。

## 第68章。ヒピローグ。

すると、オウガミレイに声をかけ「夏美から聞いたんだが・・お前は、闇に戻る、」

らしいな。」

ミレイ領き「ええ。大学の友達には、悪いですが、・・。もう、私は・・

「此処に居る事（表）に居る事は出来ません。今は亡き実の兄も元々、闇の人間、でしたか

ら。」

オウガ「・・そうか。」と続け様に「まあ・・お前が決めた道だ。  
俺はとやかく言わんよ。」

ミレイ「・・有難うござります。オウガさん。」

すると、ジンと有理がオウガの部屋に戻つて來た。

オウガ有理を見て「・・・有理。大丈夫か?」

有理「はい。大丈夫です。ジンさんが側に居てくれたから、気が楽になりました。」

と笑顔で微笑んで言つた。

オウガ領き「そうか。」と続け様にジンを見て「ジン。有理を、頼む。」

ジンタバコ吸いながら頷き「ああ。夏美の分までな・・。」

と有理の頭をそっと再び撫でた。

と同時に有理、オウガの所に行き「・・・お兄様。」

オウガ「、言いたい事、は分かっている。姉さんと同じ道を、歩む  
、事だらう?」

有理頷いた。

オウガ「だがな・・。有理此れだけは約束してくれ。ワカバは確かに、生と死、の狭間に

置かれているが・・だが、自分から、散るよつた、真似だけはそして・・

ジンや本家の入間を悲しませるような事はしないでくれ。恐らく・・お前の両親や

姉もそれを、望んでいる・・」

有理「・・・はい。お兄様。」

と同時にジン「じゃ・・・俺達はソロソロ帰らせてもらひや。」

そして「//アベ。」

ミレイ領き「じゃ・・・オウガさん。またいつか機会がありましたら・  
・。」

オウガ「ああ。」と続け様に「だが、此れだけは言わせて欲しい。  
例え、闇の人間であれ

表の人間であれ・・・此方ワカバは協力してくれる者を拒まない。いつでも

気楽にまた来てくれ。」

ミレイそのオウガの言葉を聞き「・・・有難うござります。」そう言  
つた。

と同時にジン「お前はまだつるへ有理。。。俺達は帰るが、今日は付いてくるか？」

有理「何時仕事が来るかどうか分からないから。。。。」

すると、レイカ「有理。お姉さんが死んでそんなに日ひたつていないから。。。

貴女はもうじめいへ休んでも良いうわよ？」と続け様に「ねえ？オウガ？」

オウガレイカから其れを聞いて頷き「ああ。今しづらへ。。。ジンとの時間を過ごしたら

どうだ？」

有理「・・でも。」

するといつの間にか戻つて来たライカが有理に近づいて来て軽く肩をポンと叩き

「良いんぢやないか？お前せんは今は、平然と、装つてゐるが・・内心は

あまり、穏やかぢやないだらつ、？お前せんやお前せんの姉せんとは、長い付き合い、

なんだ。何となく分かるよ。だから・・今はな？」

有理「・・ライカ姉せん。」

するとオウガ「大丈夫だ。もしどうしてもお前の力が必要になった時に仕事の連絡は

俺から入れてやつから。」と微笑んだ。

其れを聞いた有理「では、お言葉に甘えさせて頂いて行かせて頂きます。」

とオウガに一礼しある程度荷物を持つてジンの側により「私も行きます。ですが・・

休暇中にもしかしたら、ワカバで仕事の連絡が入り、途中でアジトに戻らないと行けなくなる

と思いますが・・。

ジンフツと笑い「ああ。構わねえよ。」と続け様に「それと・・有

理俺に対する

敬語は止める。俺達は、恋人同士、だからな。

有理「・・・」めんなさい。つい癖で・・・。

ベルモット其れを聞いてクスと笑い「、まじめなのね、貴女。」

有理其れを聞いて思わず笑いそして・・オウガ達を見て「じゃ、お兄様。お姉様

それに皆・・行つて来ます。」

オウガ「おう。氣をつけでな。」

レイカ「楽しんでらっしゃいね。」

シユウワトイヒシユウチョン、「行つてらっしゃい！有理さん！」

そしてライカ何時もの様にタバコに火を灯し「ああ。楽しんでな。

有理「はい。」そう言い「では。

と今度こそオウガの部屋をジン達と共に出ようとしたその時「有理様。」

雷龍「貴女様にお渡したい物がござります。」

そつまつて2通の手紙を取り出した。

有理その手紙を見ながら「・・・此れは？」

雷龍「一通田中はお親からでもう一通は姉者があげなつにな  
られる前に・・

本来なら貴女様のお誕生日にお渡しするはずだった・・お手紙です。

もし、お時間そしてお読みになられた時は  
でも・・

有理、雷龍から手紙を受け取り「・・・有難う。雷龍。」

雷龍、有理に一礼しそしてジン達にも一礼しその場を去った。

そして、雷明も兄雷龍と同様に有理とジン達に一礼をした。

ジン達は今度こそワカバを後にした。

そして・・ワカバの駐車場でジンの愛車である黒のポルシェ356Aに乗り込もうとした

その時、何時の間にか来ていた「ナン」がミレイに声をかけてきた。

ミレイ「お？ ナンへどうした？」

「ナン」「いや・・・お前に挨拶しておじつかと思つてよ。」闇に戻る  
「ひしいからよ。」

と続け様にミレイ慌てながら小声で「・・・おいおい。来て平氣な  
のかよ？此処にはジン兄さ

んもいるんだぞ？」

「ナン苦笑いし「大丈夫だよ。アレからジンの奴に見抜かれてしま  
つたから・・・。

まあ、多少・・・危険だがな。」

ミレイ「・・・そりが。」そして辺りを見渡し再び小声で「あれ? そ  
いつ言えば哀(志保)は?」

「ナンも小声で「バーロー。」来れる訳ねえじゃねえか」。あいつ  
はお前と違つて・・・

「組織の裏切り者」で下手すれば・・・。

「ミレイ小声で換えしてフッと笑い「・・・そりだつたな。」

そしてウォッカ「ミレイの姉さん。お取り込みの所申し訳あつやせ  
んが・・ソロソロ

出発しますゼ?」

ミレイ「ああ。悪い。今乗るね。」と続け様に「じゃな・・。コナ  
ン。また機会があつたら

「余おつか。」。

「ナンノフシヒ笑い」「おつ。」

そして、出発しようとしたその時にベルモット「二〇〇一  
二〇〇一」と  
「

「ナン」「ん?何だ?ベルモット?」

ベルモットクスと笑い「ジンが呼んでるわよ。」

「ナン」「へ?ジンが?」

そう言い不安を募らせつつもジンが座っている助手席に向かった。

「ナン」「・・何か用か?ジン。」

ジン窓を開けコナンを見てニヤリと笑い「今回は俺の妹分と夏美が  
かなり世話になつたな

「工藤新一。」

運転席に座っていたウォッカが驚いて「え？い・・今兄貴何て？」

ジン灰皿にタバコを消し再びタバコに火を灯し「こいつは・・昔、俺がばらしたはず、

の東の探偵のガキ、工藤新一、なんだよ。」

ウォッカコナンを見て「お前・・・?まさか・・・?」

「ナンメガネを外し「ああ。そつぞ。ジンの言ひ通り俺は工藤新一だ。

どうやら・・夏美の死んだあの日ジンの奴にばれてしまったんだ。

「

ウォッカ「じゃ・・・もしかしてあの時の毒薬の何らかの影響で・・・

「ガキの姿に、?」

「ナンメガネを掛けなおし、やつらの事。」

ウォッカ「しかし・・お前も度胸あるよな。下手すれば・・再び、  
ばらわれる、

とも知らずに・・。

ジンタバコを吸いながら再び一ヤリと笑って「こいつは、ばらさねえ  
よ、ウォッカ。」

ウォッカ「え？ 良いんですかい？」

ジン「ああ。『ワカバ』に此れからも付き続ける事を条件にな。」

ウォッカ「成る程。」

と同時にジン「まあ・・シェリーの奴もこいつがどつかで恐らく匿つているだろつよ。」

と続け様に再びコナンを見て「そだろ？工藤新一？」

「ナンフツ」と笑い「想像にお任せするよ。」と続け様に「だが、

あこつかわとじておこへ

やつて欲しい。」

ジンフツと笑い、「考慮しようつ。」

そして、口ナソ「ソロソロ行つた方が良いんぢやねえか?ジン?噂  
ではこの後赤井さん

此処に来るひしいからよ。」

ジン「やつれかでもうおひ。」と続け様に「じゃなあ。またい  
つか、会おうか。」

口ナソ「ヤコと笑い「ああ。」

そしてコナン黒のポルシェ356Aから離れた。

ジン、ウォッカに出すように指示する。

そして黒のポルシェ356Aは走り出した。

コナンは其れを只無言のまま送つて行った。

と同時に黒のシボレーがまるで入れ替えるようにワカバの駐車場に入つて来て

コナンそれに近づき黒のシボレーから降りてくる赤井に挨拶をし夏美の墓参りしに

ワカバの丘に向かつた。

一方、有理はワカバの駐車場に止めてある姉が乗っていた青のベンツを見ていた。

そして。。。

ふと有理には姉が青のベンツによつかかってタバコを吸いながら有理を何時ものよつな笑顔

で微笑んでいて、楽しんで来いよ。と言つてゐる姿が見えたよつな気がした。

有理其れを見て「行つてきます。姉さん。」

そう言い見えなくなるまで青のベンツを見つめていた。

その様子を見てウォツカ「…有理さん？」

ジン「多分…姉の愛車を見ていたんだりうよ。」と続け様に「そ  
うだろ？有理。」

有理小さく頷いた。

そしてベルモットタバコに火を灯し「でも…彼女のあの青のベン  
ツビツするのかしら？」

有理「あ、あれはね…ベルモットさん私が貰う事になつてているん  
です。」

一応…事前に免許も取得しましたし…。」

ベルモットタバコ吸いながら微笑んで「そう。良かったわね。」

有理嬉しそうに頷いた。

そして、ミレイ「所で有理、雷龍から貰った・・手紙読まないのか？」

有理「・・後でホテルに付き次第読みます。」

ミレイ「そうか。」

そつ言い黒のポルシェ366Aは林戸町にある某ホテルへと向かつて行つた。

そしてホテルに付くと同時にジンと同じ部屋で有理は過ぐす事となる。

因みにウォッカとベルモットヒルレイは別室。

その時に手紙を読んだ。

まず、両親の手紙・・。

そして読み終わつたら次に・・。

姉の夏美の手紙。

其処にはワカバへ想い。

そして・・自分の事・・。

そして・・有理の誕生日の事等を書いてあつた。

有理「・・そ、そんな。姉さん。」

と涙ぐんでいた。

ジン「どうした?」

有理「・・ジンさん。姉さん・・。あのメイランの、過去の銃弾の影響で、

病魔に冒されたみたいなの。」

ジン其れを聞いて驚いて「・・・そつか。」

そつ言い只有理を黙つて再び抱きしめた。

そして有理「・・姉さん。」と悲しそうに小声で呟いた。

一方、ウォッカとベルモットはそれぞれ自分の部屋で仕事等の準備等を

して過<sup>ご</sup>していたが、ミレイは自分の部屋でタバコを吸いながら窓を見ていて

外はすっかり夜になつていた。

そしてミルハイ・・只今、私の世界、。」そう言つた。

そして・・・心の中で・・・。

今後はこの闇の中で再び、闇の始末屋赤龍、として生き続ける。

私が、私で、あり続ける為に・・・。

第68章。HPヒローグ完。

1093

## 第68章。ヒューローク。（後書き）

今章で「」の第1作目が終わりです。

長い間本当に・・お付き合いでトセリ有難ひいざでこま

す。尚・・連載此れの他にも第2作ありますので

其方も其方で再びお付き合いでトセレば幸いです。

尚・・前々回?辺りにも述べさせていただきましたが

夏美さんが「へなるのはほりへ」の作品だけです。

残りの作品には出てくる予定です。

何で?と書つその辺の突っ込みはまことに恐れ入りますが無しでお願い致します。

其れでは本当に最後までお付き合いでトセリ有難う

いざでござました。

この小説の最後のオマケ。

N 「作者でござります。第1作目無事に完結

致しました！」

コナン「お疲れさん。」

元太「有難う！コナン君ッ！無事に終わりました！」

元太「でもよ・・今思つと俺達の出番少なくねえか

？」

光彦「僕も同感です。」

歩美「私も・・・。」

「……………」

哀その様子を見てクスと笑い

そして「今まで御覧頂き感謝するわ。この作者の  
作品後2作あるらしいから其方もビックリ直しへね。  
では・・またいつか会える」と願いつつ・・・」

これ以上長くなるとアレなので以下自粛。（笑：）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4900h/>

---

「闇から逃亡した少女とそれを追う漆黒の闇。」

2010年10月10日22時54分発行